

創立 10 周年記念誌

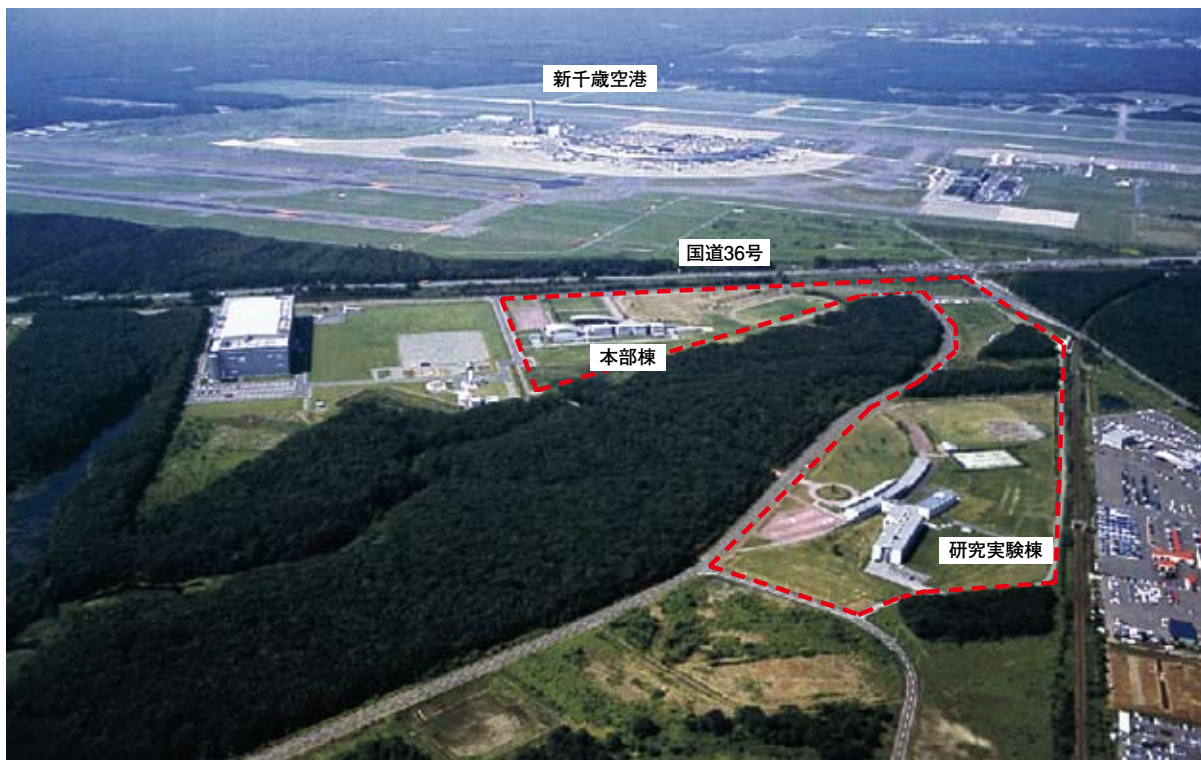


千歳科学技術大学





北側からの全景（着工前）



北側からの全景（現在）

刊 行 の 辞



学 長

雀 部 博 之

開学10周年にあたり、本学の開学までの足跡および開学後の10年間に亘る軌跡を記録し、「10周年記念誌」として広く関係各位にお届けすることができますことは望外の喜びであります。

千歳科学技術大学は、千歳市が大学を設置しその後は学校法人千歳科学技術大学が管理運営する公設民営の大学として平成10年4月に開学しました。光科学技術の教育研究拠点創生を目指した理工系単科大学という特徴を最大限に生かし、地方自治体および産業界との産学官連携を視野に入れた教育研究活動に力を入れてきました。このような大学の方向性は、本学の創設に尽力され初代学長となられた故・佐々木敬介先生の深い洞察力から生まれたもので、後に続く私ども教職員が目標実現に向けて大いに努力しなければならない点であると肝に銘じております。佐々木先生の思いは本学の建学精神「人知還流・人格陶冶」に凝縮されており、人を育てる大切さ、人の道の大切さを常日頃より教育研究に反映させることが使命であります。幸い、教職員ばかりでなく学生諸君もこの建学精神を十分に理解し、その実践に努力を惜しまない風土が形成されつつあると確信しており、開学以来10年という短い期間にも拘らず本学に関係する人々が幾多の困難を克服し着実に目標達成に向かって進んで行く姿を見せていただきました。

また、地域貢献という観点からは、本学独自のICT教育とそのシステム開発を基本として高大連携や地域小中学校との連携にも力を入れており、学生力の大きさを知ることができました。これらの成果は文部科学省の特色GPや現代GP、先導的教育情報化推進プログラム等の取り組みから得られたもので、学外からも高い評価をいただいております。

これらの本学の歩みを振り返り10周年記念誌を刊行することは、普段は俯瞰的に見るのでできなかった大学の全体像を眺める良い機会となり、改めて本学の問題点を浮き彫りにしてくれました。本記念誌の編集に携わった皆さんの想像を絶するご努力に敬意を表しますとともに、そのご労苦に深く感謝いたします。

本記念誌に対する関係各位のご意見・ご感想を拝聴し、次の10年に向けて本学の取組むべき課題を明確に設定して参りたいと念じつつ、刊行の辞といたします。

千歳科学技術大学創立10周年記念誌目次

グラビア

刊行の辞

10周年に寄せて

10周年に寄せて

10周年に寄せて

10周年に寄せて

10周年に寄せて

学 長	雀 部 博 之
内閣官房長官・衆議院議員	町 村 信 孝
千歳市長	山 口 幸太郎
前千歳市長	東 川 孝
最高顧問・前理事長	辻 岡 昭
理 事 長	小谷津 孝 明

第1編 開学までの足跡

大学誘致から大学設置へ

1. 大学誘致	12
2. 文部省協議	12
3. 学部学科等検討委員会	13
4. 大学設立推進本部の設置	14
5. 千歳科学技術大学基本構想	15
6. 大学設立趣意書	15
7. 財団法人千歳科学技術大学設立準備財団	16
8. 寄附行為及び大学設置認可申請	17
9. ホトニクスバレー構想	17
10. ホトニクスワールド・コンソーシアム（PWC）	18
11. 文部省による実地調査	18
12. 教員予定者説明会	19
13. 認可	19
14. 入試事務開始・事務体制	20
15. 入学式	20
16. 開学式	21
17. 佐々木学長開学式あいさつ（要旨）	22
18. 千歳科学技術大学設立時の思い出	23
19. キャンパスギャラリー・記念日	28
20. 着工から竣工までの写真	30

第2編 開学から10年の軌跡

1. 写真で見る10年の軌跡	34
2. 主な出来事	54
①完成年次における文部科学省大学実地調査	54
②入試改革	54
③学部・学科再編	55

第3編 佐々木敬介先生を偲ぶ

1. 故佐々木敬介先生のプロフィール	58
2. 平成10年度入学式学長あいさつ	59
3. 開学10周年に寄せて 初代学長夫人 佐々木 紀美子	60

4. 佐々木先生を偲んで 前学長・名誉教授 緒方 直哉	61
5. 佐々木先生との思い出 (佐々木敬介学長を偲ぶ会より) 今村 陽一	62
6. 思い出のスナップ写真	63

第4編 10年間の主な記録

1. 市民公開講座	68
2. 千歳光科学国際フォーラム	69
3. 佐々木記念賞	70
4. 学生表彰	72
5. 学生団体	73
6. 学生活動の履歴	74
7. 大学祭 (稜輝祭)	76

資 料 編

1. 歴代役付教職員一覧	80
2. 歴代役員名簿	81
3. 歴代評議員名簿	82
4. 歴代教員名簿	84
5. 歴代事務職員名簿	86
6. 組織図	88
7. 教職員写真	90
8. 第1回市民公開講座より	
①大学教育と千歳科学技術大学の役割 辻岡 昭	92
②光技術の変遷と将来展望 佐々木敬介	98
③自然と計算 川合 敏雄	102
9. 千歳科学技術大学における光教育	106
10. 表彰 (外部表彰・教育研究貢献賞)	108
11. 奨学金受給状況	110
12. 進路状況	111
13. 創立10周年記念事業	112
14. 校章・校旗・校歌	114
巻末 略年表	115

付 録

10周年記念募金者芳名録	124
D V D 版目次	127

あとがき

10周年に寄せて



内閣官房長官・衆議院議員

町 村 信 孝

この度、貴大学が、開学10周年の記念すべき節目を迎えられたこと、誠におめでとうございます。私は、2度の文部（文部・文部科学）大臣・外務大臣、そして内閣官房長官として、又、地元選出の国会議員として開学準備当初から今日まで継続して大学の発展に向けてお手伝い申し上げましたが、誠に感慨深いものがあり、慶賀に存じます。

また、此までに至る間、雀部学長はじめ関係各位の並々ならぬご努力に敬意を表し、感謝申し上げます。

平成10年4月、光科学という専門分野に於ける国内唯一の技術系大学として開学し、当時日本中の注目を集めたものです。平成13年12月には、待望の大学院設置が認可され（翌年4月に開学）平成19年には、我が国のICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）戦略である『e-japan戦略』等に基づき「先導的教育情報化推進プログラム」に申請、6月に採択を受けられ、又、現行の光科学部2学科から総合光科学部3学科へと学部・学科改編の届け出が受理され（20年4月の入学生から3学科・6コースがスタート）今年は、学生支援機能の充実を図るための複合多目的施設の完成を見る等、名実ともに我が国唯一の光科学テクノロジーの先駆ける技術大学として大なる期待が寄せられています。

又、貴大学は、早くから地域に於ける『産・学・官』連携事業や地域ポータルサイトの構築等『地域貢献活動』にも取り組まれ、建学の精神である『人知還流・人格陶冶（有能な人材や大学での研究成果を実社会に放出し、その成果を社会から大学に還流させ、また、高い理想を実現するために人格を高めていく）』を実践されています。今後もこの理想実現のため深遠な学術理論と応用を研究・教授し、創造性、個性及び国際性に富む先導的な人材の育成を図り、社会の発展に寄与されるよう私からもお願い申し上げます。

終わりに貴大学が、更なる研鑽を積まれ、多くの優秀な技術者・研究者を輩出し、世界へ向けての光テクノロジー発信拠点として発展されますようご期待申し上げ、お祝いの言葉と致します。

10周年に寄せて



千 歳 市 長

山 口 幸太郎

千歳科学技術大学が開学10周年を迎えられましたことに、心よりお喜びを申し上げます。

貴大学の開学は国際交流都市・高度技術産業集積都市を掲げる当市にとって長年にわたる悲願とも言えるもので、千歳市が設置し、学校法人が運営するという公設民営の大学として誕生したものであります。

開学後は、大学院の設置や施設の建設など着実に研究体制の充実や施設整備を進められており、また、毎年国際会議を開催し、学生・研究者の国際感覚の醸成と共に、地域の国際化に貢献されております。

さらには、市民公開講座の開催、市内小中学校との交流授業など地域に根ざした活動を積極的に展開されておりますことに心から敬意を表する次第であります。

近年は少子化による18歳人口の減少が続き、「大学全入時代」などといわれておりますが、現実には大学の差別化が進み、特色の無い大学は生き残れない時代となってきました。このような中で貴大学が日本で唯一の「光サイエンス」を学び、研究できる大学として認知され、また、就職に強い大学として評価されているのは、就職支援体制の充実はもとより、学生を研究者として、人間として育てる力が評価されているからであると認識するところです。

平成20年度からは新学部「総合光科学部」と名称の変更と新学科の編成を行い、幅広く研究を進める体制をつくられると伺っており、今後も時代の求める優秀な学生・研究者が輩出されるものと確信しております。

結びにあたり、10年という一つの節目を契機に益々ご発展されますとともに、大学関係者の皆様のご健勝とご活躍をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

10周年に寄せて



前千歳市長

東川 孝

開学10周年誠におめでとうございます。

創生期から携わった一人として、誠に感無量のものがあります。

この大きなプロジェクトは、課題も多く大変苦勞したことが記憶に残っております。

以下3点について概略をのべます。

1. マチづくりの理想像は大学にある。

何時かは定かでないが、ある都市学者から、マチづくりの理想像は、つぎにあると教えられた。即ち、

- ① 空港のあるマチ
- ② 産業のあるマチ
- ③ 自然環境のあるマチ
- ④ 大学のあるマチ

これが調和のとれた発展するマチと言われ耳から離れることがなかったので、平成4年大学設立に向けて本格的に取り組んだのである。

2. 開学までの苦勞

最も苦勞したのは、概算98億円の資金調達であった。特に寄附金が集まるのかと言われ、多くの関係機関、知り合いに頭を下げ寄附をお願いした。ある日電話があって個人宅を訪問、即座に百万円の寄附を頂いた事がある。その後民間寄附は約13億円となった。また、優秀なスタッフが精力的に調整し、資金のメドがついた。スタッフの皆さんに深く感謝している。

3. 我ら七人の首長

平成15年1月朝日新聞社の取材があった。それは、厳しい条件下で生き残る地方の実態を調べる全国七首長が対象、千歳市も含まれた。七首長は、臼杵、佐賀、犬山、太田、志木、千歳と大郷町（宮城県）であった。各地の特徴は、BS導入、教育特区、農業特区等で、千歳は大学設立であった。

それによれば、「市長は企業と学界の橋渡しをし、議会などの反対の声をかわし、悲願だった千歳科学技術大学を98年に開校させた」とある。これは七首長の特徴ある政策が評価されたものであろう。

結びに、今後は大学の建学精神に基づいてさらなる発展を期待するものであります。

10周年に寄せて



最高顧問・前理事長

辻 岡 昭

千歳科学技術大学の開学は、平成10年4月、従って来る平成20年4月には創立後10年という、区切りを迎える。この間、大学にとって最も不幸なことは、佐々木敬介初代学長が平成10年10月に逝去されたことであろう。幾多の困難を乗り越えて、やっと迎えた開学、さあ、これからと言う時だけに、彼の心情、くやしさは察するに余りがある。

さて、本学も10年を一つの区切りと考え、気持ちを新たに新しい出発をすることは大切であろう。慶應義塾も西南戦争の直後、廃校の危機にさらされたという。その当時、九州からの学生、特に鹿児島県出身者が多かった為、学生数が激減したためであるという。廃校もやむなしという弱気になった福沢先生の気持ちをひるがえしたのは、存続を熱望した学生たちの熱意であったという。

恐らく日本の多くの私立大学は永い年月の間に幾度か存立の危機を経験しているであろう。特に昭和20年の終戦からの10数年間は、戦災にあった学校は勿論、あわなくても建物、備品、実験器具等古くなり、いたんだりして、使えない状態の物が多かった。しかし、どの学校も五十歩、百歩でその点、逆に我慢し易い状態にあった。恐らく私立大学は永い年月の間に幾度か危機を経験しているであろうが、時代の動きが早く、科学技術の進歩の早い今後は、危機も激しく、たびたび訪れるであろう。従って我々は世界の状況に絶えず気を配る必要がある。そして当然乍ら対応すべき事柄の取捨選択が最も重要であろう。

大学と言えども一つの団体である。団体が最も大事にすべきは和である。教職員の和、学生の団結、千歳市との協調など、心配りが十分にあった上で、大学の発展がある。差し当っては同窓会の充実であろう。最も難しく、時間がかかる。最も大切なことだから。

10周年に寄せて



理 事 長

小谷津 孝 明

平成20年4月、千歳科学技術大学は創立10周年を迎えました。誠に喜ばしい限りです。

平成10年、千歳市公設民営の大学として創設された本学は、光科学部一学部の構成で、物質光科学科と光応用システム学科を擁しておりましたが、平成14年4月には大学院光科学研究科光科学専攻（修士課程）が、次いで平成16年4月には同博士課程〈後期〉が開学され、現在、総収容定員1,009名の学園となりました。

平成19年度より学科再編を試み、バイオ・マテリアル学科、光システム学科、グローバルシステムデザイン学科の三学科とし、学部名称も総合光科学部と改めました。

これまで本学は、研究・教育の活発な大学、面倒見のよい大学、就職率の高い大学として知られて来ました。これは千歳市、教員、職員、先輩、企業の方々、現役の学生諸君、そしてご両親等全員が営々と続けてこられた努力の賜物ですが、人知還流・人格陶冶の建学の精神の下、さらに大きな飛躍が期待されるところです。

新渡戸稲造は、「知識思想は天よりの預りものなれば、一人一家の秘蔵すべきものにあらず、あまねく世界に提供すべきものなり」と言います。また、「身分が低い、財がない、あるいは学がないなどといって人を避けるは、それ以外さらに貴き人格というもののあるを知らぬ故なり」と言い、「卑しとて隔つる心あるなれば賤が伏屋に月はやどらじ」と詠いました。これらをそれぞれ人知還流、人格陶冶の本意また指針として、研究・教育・自己研鑽・社会貢献に努め、人間性豊かな真の科学技術人の集う千歳科学技術大学にしたいものです。

本学が千歳市公設民営の大学として創設されたことのもつ意味は重いものがあります。過日、本学評議員会議の席上、評議員の方がこう仰有いました。「大学創設に当たって千歳市は資金約98億円の拠出と土地の提供をしました。この資金は言わば千歳市民の血と汗の税金です。それだけに、千歳科学技術大学は千歳市民にとって宝ものであり誇りです。立派に発展していただきたいのです。」と。この言葉は私の心にジーンと沁み込みました。事実、創立からその後10年間にわたり市職員の派遣を受け、人件費の支援も受けました。先に述べました評議員の方の言葉は千歳科学技術大学の全教職員が忘れてはならない言葉として身体に刻み込み、千歳市と大学の発展のため一層の努力をしようではありませんか。

第1編 開学までの足跡



1. 大学誘致	12
2. 文部省協議	12
3. 学部学科等検討委員会	13
4. 大学設立推進本部の設置	14
5. 千歳科学技術大学基本構想	15
6. 大学設立趣意書	15
7. 財団法人千歳科学技術大学設立準備財団	16
8. 寄附行為及び大学設置認可申請	17
9. ホトニクスバレー構想	17
10. ホトニクスワールド・コンソーシアム (PWC)	18
11. 文部省による実地調査	18
12. 教員予定者説明会	19
13. 認可	19
14. 入試事務開始・事務体制	20
15. 入学式	20
16. 開学式	21
17. 佐々木学長開学式あいさつ (要旨)	22
18. 千歳科学技術大学設立時の思い出	23
19. キャンパスギャラリー・記念日	28
20. 着工から竣工までの写真	30

大学誘致から大学設置へ

1. 大学誘致

昭和47年

千歳市議会において「国連大学設置に関する要望」が決議される。

昭和60年4月1日

千歳市の行政組織に大学誘致主幹が設置される。

昭和62年3月31日

上記大学誘致主幹が廃止される。

平成4年2月18日

千歳市から学校法人五島育英会に大学誘致の要望書が提出される。

平成4年3月2日

学校法人五島育英会から「美々地区での大学新設を検討する」旨の回答が得られる。

平成6年4月1日

千歳市の行政組織「地域計画部」に「大学設立推進本部」が設置される。

本部長（小松裕助役事務取扱）

－副本部長（佐々木勝利地域計画部長兼務）

－大学整備室長（坂本捷男地域計画部次長兼務）

－総務課長（福島富夫）－主査（川端忠則）（安藤孝嗣）

－企画課長（長谷川盛一）－主査（井手 剛）（森田友里恵）

－事業調整室長（古屋憲六）

平成6年5月9日

大学設立主体となる学校法人を新たに設立することについて、企業の支援を得て運営すべく地元に空港周辺プロジェクトに協力を頂いている株式会社日立製作所に参加要請を行なったところ、基本的に支援する旨の回答が得られる。（後に、同社より施設営業推進本部施設第二部部長代理（当時）の職にあった今村陽一氏の紹介を受ける。）

平成6年6月

千歳市職員坂本捷男氏（千歳市大学設立推進本部大学整備室長（当時））と前述今村陽一氏は、横浜市日吉にある慶應義塾大学佐々木敬介研究室を訪れ、千歳市が長年にわたり懸案としていた高等教育機関の設置について協力を要請し快諾が得られる。

2. 文部省協議

平成6年2月16日（大学設置基準等の解釈について文部省に確認）

平成6年6月29日（大学設立に係る協議－第1回）

平成6年8月26日（大学設立に係る協議－第2回）

平成6年10月14日（大学設立に係る協議－第3回）

平成7年2月1日（大学設立に係る協議－第4回）

平成7年7月6日（大学設置・学校法人設立に係る事前協議－第1回）

平成7年7月19日（大学設立準備財団の設立に係る事前協議－第1回）

平成7年8月7日（大学設立準備財団の設立に係る事前協議―第2回）
平成7年9月5日（大学設置・学校法人設立に係る事前協議―第2回）
平成7年10月13日（大学設置・学校法人設立に係る事前協議―第3回）
平成7年10月17日（大学設立準備財団の設立に係る協議―第3回）
平成7年12月7日（大学設置・学校法人設立に係る事前協議―第4回）
（大学設立準備財団の設立に係る協議―第4回）
平成7年12月27日（大学設立準備財団の設立に係る協議―第5回）
平成8年1月12日（大学設立準備財団の設立に係る協議―第6回）
平成8年3月4日（大学設立準備財団の設立に関する第1次審査クリア）

文部省とは数度にわたり、大学設置、学校法人設立、民間寄付の受け皿となる財団法人設立認可申請などについて意見交換や協議が行なわれた。

協議は、「学部学科名が何故融合理工学部なのか、分かりづらい。」「何故地方の中核都市に大学が必要なのか。」が焦点となり、一番心配していた定員240名には多くの時間を費やさなかった。また、先端産業教育に着目していることは新規性があるとして深い関心が寄せられた。

その結果、「学部学科、カリキュラム編成の妥当性」、「校地造成計画の妥当性」、「教員の確保」、「寄付金の確保、寄付者の適格性」などが今後の検討事項とされた。

当時の千歳市議会大学設立に関する調査特別委員会で、文部省担当者から受ける印象、例外規程との適合性について質問され、理事者は「先端科学技術分野の光技術に視点をあてたことが希有であるとの評価を得た。感触はよく前向きの指摘も受けている。」と答弁している。

3. 学部学科等検討委員会

平成7年1月24日

大学設置に係る学部学科等検討委員会を設置。

委員長 佐々木敬介・慶應義塾大学理工学部教授

委員 林 喜男・武蔵工業大学工学部教授

山下 幹雄・北海道大学工学部教授

藤原 裕文・室蘭工業大学工学部教授

三戸 慶一・慶應義塾大学理工学部助教授

芦高 秀知・理化学研究所研究推進委員

大川 實・㈱日立製作所施設営業本部長

岩浅 孝・千歳工業クラブ代表幹事

渡部 茂・千歳市大学等高等教育機関誘致推進期成会長

川嶋 信之・北海道通商産業局総務企画部長

林 陽・北海道商工労働観光部長

小松 裕・千歳市大学設立推進本部長

平成7年2月3日（学部学科等検討委員会―第1回）

本委員会の設置の趣旨、大学誘致の経過、文部省の方針を説明した後、今後の検討事

項について提案し、了承される。

席上、委員から「産学共同の必要性」「長期的視野で夢のある大学にすべきである。」
「卒業生の就職先の確保が課題である。」などの意見が出される。

平成7年2月21日（学部学科等検討委員会―第2回）

市が設置を希望する4つの学部について「その必要性及び課題等」の検討が行なわれる。

その結果、新設する大学に設置する学部としては光関連の学問を教授する「先端技術関連」と情報科学を中心とする「情報関連」の学部で今後検討を進めることとなる。

平成7年3月27日（学部学科等検討委員会―第3回）

新設大学に設置する学部学科は、融合理工学部物質光学科及び電子光システム工学科、並びに総合情報科学部光情報科学科の2学部3学科構成とすることの方向性が出される。

平成7年4月7日

大学設置に係る学部学科等検討委員会（委員長佐々木敬介慶應義塾大学教授）が新設大学の学部、学科の構成などに関する最終報告書を東川市長に渡す。



4. 大学設立推進本部の設置

平成7年4月23日

市長選において大学設置推進を公約にした東川孝氏が当選（2期目）。

平成7年6月1日

千歳市の行政組織「地域計画部」から「大学設立推進本部」が分離独立され、坂本捷男副本部長のほか7名が専任となり、本格的設立準備態勢が強化される。

平成7年6月20日（市議会代表質問―東川市長答弁）

「大学の研究成果を生産活動に結びつけ、一帯を「光技術」に関する研究・交流地区として整備する「ホトニクスバレー構想」の実現に取り組む。」

平成7年6月21日（市議会代表質問―東川市長答弁）

「校名については、文部省から新設にふさわしい名称をとの指導を受けている。」

「大学は懸案であり、ぜひとも実現されなければならない。これまでの経過から新たな学校法人設立の方向が決まった。誘致を進めてきた結果として設立する展開になった。」

5. 千歳科学技術大学基本構想

平成7年7月5日

千歳科学技術大学基本構想を策定。

学校法人を設立し大学設置を行なうことを明確化。形態は公設民営型。

1学部2学科、入学定員240名、創設費98億1百万円。

設立手法として大学設立準備財団方式を選択。

平成7年7月7日

千歳市議会が大学設立に関する調査特別委員会を設置。

平成7年7月11日

千歳市議会の大学設立に関する調査特別委員会において、学部学科の内容、大学名称などの基本構想の説明。

平成7年8月

市民説明会を開始。約30回開催。

6. 大学設立趣意書

『平成8年度第2回理事会議案より』

学校法人 千歳科学技術大学設立趣意書

産業・就業構造の変化、技術革新の加速、情報化の進展、価値観の多様化等により、広範かつ急速な変革が進行している現代社会において、科学技術水準の向上に寄与し、もって人類の繁栄と国際協調に貢献する大学の存在が求められている。

このような状況にあって、わが国が科学技術分野における独創性を駆使し、そして国際社会・経済における先導的な役割を担う科学技術、さらには、地球環境の保全と人類福祉の向上に不可欠な科学技術として、『光』科学技術が注目・期待されている。

このため、光科学技術をもって学術研究の振興を図り、産業経済の発展及び国際社会への貢献を恒久の命題として、有為の人材と研究成果の社会還元を迫及する「千歳科学技術大学」を設立し、平成10年の開学を実現させるものである。

本大学の設置に当たっては、個人の尊厳を重んじ、真理を追究する若人の育成・教育の普遍性を維持するために、公益性を有する私立大学の形態を具体化することとし、このことから日本を代表する産業界、さらには地方公共団体との協力により「学校法人 千歳科学技術大学」を設立する。

設立の趣意

1. 先端的、学際的な分野である光科学技術についての教育研究活動を進め、我が国の創造的な学術振興と技術の向上、並びにマルチメディア社会の確立・発展を目指すとともに、研究成果を社会に還元する場の形成も図り、もって社会の発展に寄与する。

(「人知還流」)

2. 人類の繁栄と技術革新への対応、我が国の国際貢献と国際協調への対応、並びに地域振興への対応という観点から、人間性と創造性に富む人材を育成する。

(「人格陶冶」)

7. 財団法人千歳科学技術大学設立準備財団

平成7年11月28日

大学設立準備財団の設立許可の事前申請提出。

平成7年12月11日

財団法人千歳科学技術大学設立準備財団設立発起人会を開催。

出席者 東川 孝・千歳市長

我孫子健一・北海道空港社長

我妻 広繁・日本興業銀行札幌支店長

川手 士郎・日立製作所専務取締役

永利 久志・東京急行電鉄副社長

伊澤 達夫・NTT研究開発本部副本部長

辻岡 昭・学校法人杏林学園副理事長

内海 孚・慶應義塾大学教授

佐々木敬介・慶應義塾大学教授

【千歳市大学設立推進本部の経過説明】

新設大学は、他大学と競争して生き残れることが条件。自治体が大学を設置する場合、公立は政令都市の市立か道立しか認められないので、第三セクター方式とした。

平成8年3月13日

文部省に財団法人千歳科学技術大学設立準備財団の設立認可申請提出。

平成8年3月26日

文部省が財団法人千歳科学技術大学設立準備財団の設立を認可。

平成8年4月13日

教員候補者説明会



平成8年6月20日

千歳市議会が大学用地の無償譲与を可決。

平成8年9月12日

千歳市議会が大学にかかる債務負担行為（限度額：69億4654万円）を賛成多数で可決（賛成22人、反対9人）。

8. 寄附行為及び大学設置認可申請

平成8年9月20日

第1次学校法人千歳科学技術大学
寄附行為認可申請提出。

平成8年9月26日

第1次千歳科学技術大学設置認可
申請提出。

平成8年9月30日

文部省が各認可申請書を受理。

平成8年12月2日

校舎建設工事起工式。

平成9年1月14日

大学設置学校法人審議会面接審査。

平成9年6月25日

第2次千歳科学技術大学設置認可申請追加書
類提出。

学部名：融合理工学部 ⇒ 光科学部

学科名：電子光システム学科 ⇒ 光応用
システム学科

学部の名称は、第1次申請において科学
と物性物理と電磁気学を融合した教育を実
践する意味から「融合理工学部」としてい
たが、光技術を専門領域とする我が国唯一
の高等教育機関であることを象徴する観点
から、最終的には、「光科学部」とした。



9. ホトニクスバレー構想

平成9年3月31日

千歳市が委託した株式会社日立総合計画研究所から「ホトニクスバレー構想事業化調査」の調査結果が報告されたことをもとに「ホトニクスバレー構想（概要）」が取りまとめられる。

【構想の目的】

ホトニクスバレー構想は、スタンフォード大学を核とする米国のシリコンバレーの日本版を目指したもので、千歳科学技術大学を核として、世界に評価される光技術の頭脳拠点を形成し、21世紀を牽引する新産業の創出・育成を図ることを目的とする。本構想の特徴は、新技術の研究開発に係る人材育成はもとより、基礎研究、応用研究及び開発研究と連動させ、さらに事業化へと連鎖的に展開するシステムを構築することにある。また、その研究成果を再び大学や研究機関へと還流させることによって、創造的な研究活動を発揮させることを狙いとする。

10. ホトニクスワールド・コンソーシアム（PWC）

平成9年8月28日

千歳科学技術大学及び付属研究所を中心として、有機光デバイスをキーテクノロジーに、光通信・光エレクトロニクスに関する材料、デバイス・システムの研究開発・実用化、さらには情報科学の経済効果の研究等を通じ、光技術の国際的研究拠点の形成を目指すホトニクスバレーの実現のため、所要の事業を行なうことを目的として、「ホトニクスワールド・コンソーシアム（PWC）」を設立。

PWCの事業としては、次の項目が掲げられている。

- ①産学官共同研究の実践及び研究成果の実用化への支援事業
- ②技術コーディネーターの育成
- ③千歳科学技術大学の学術研究活動支援
- ④知的所有権の管理
- ⑤基盤施設整備に関する検討及び支援機関との連絡調整
- ⑥光技術の交流ネットワーク化、情報収集及び提供

11. 文部省による実地調査

平成9年10月2日

文部省大学設置分科会による実地調査（第1回）



【審査講評】

- * 光科学専門の大学として、意欲的な取組みが成就することを期待する。
- * 設置趣旨が活かされるように履修指導について配慮願う。
- * 学生の確保、進路、就職について社会の動向を見つつ配慮してほしい。
- * 大学の独自性を確保して、十分な公私の連携を配慮してほしい。
- * おそらく世界初の光専門の大学である。産官学の協力体制の中で、この分野のリーダーシップを取っていただきたい。
- * 新しい企画をカリキュラムの中にも配慮してほしい。
- * 公設民営ということで、非常に難しい分野の大学設立に取り組んでいる。千歳市との協力の中で課題を乗り越えて欲しい。

平成9年11月7日

文部省大学設置分科会による実地調査（第2回）



12. 教員予定者説明会

平成9年12月7日



13. 認可

平成9年12月19日

文部省が学校法人千歳科学技術大学寄附行為を認可。

文部省が千歳科学技術大学設置を認可。



平成9年12月25日

学校法人千歳科学技術大学理事会及び評議員会の開催。

平成10年1月22日

校舎工事完了。教具、校具、備品の搬入開始。

14. 入試事務開始・事務体制

平成10年 1 月28日

公募推薦入試（受験者数42名）。

平成10年 2 月13日

前期一般学力入試（受験者数697名）。

平成10年 3 月 8 日

後期一般学力入試（受験者数173 名）。

区 分	受験者数	入学者数
推薦入試	96名	273名
一般入試	870名	
計	966名	

受験者数966名の出身地

北海道内 868名

（札幌市467名・石狩管内104名・その他297名）

北海道以外 98名

（東北24名・関東37名・北陸 5 名・中部14名・近畿 4 名・中国 8 名・九州沖縄 4 名・大検 2 名）

平成10年 4 月 1 日

教職員新体制発足。

教育職員 16名

事務職員 23名 （内千歳市派遣職員12名・嘱託職員 3 名）

15. 入学式

平成10年 4 月11日

第 1 回入学式。入学生273名。

町村信孝文部大臣（当時）御臨席。



16. 開学式

平成10年 6 月 6 日

開学式。開学記念式典。（開学記念日となる。）



大学前案内看板



千歳市内に設けられた臨時バス乗車場



受付風景



500名の市民の方や関係者の方々が参集した開学式

平成11年 3 月 31 日

財団法人千歳科学技術大学設立準備財団解散。

17. 佐々木学長開学式あいさつ（要旨）（平成10年6月6日開学式）

平成6年6月に千歳市の関係者から協力依頼を受け、大学認可まで3年半の期間を経て、光をコアとする千歳科学技術大学が開学したことに大きな喜びと関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

当初から私立大学で地方の単科大学を取り巻く状況はきわめて厳しいという認識に立ち、大学単体の設立ではなく、もっと大きな全体構想を作り上げました。すなわち、大学はコアの部分で、これを取り巻く産学官、純粋研究から応用研究まで、特に、世の中に役立つに至るまでのスペクトルの広がりを持つような科学技術の研究振興を含む大学の構想を考えました。大学の研究成果を官、民と共に実用化に結びつけていく。そのための仕組みとして、大学の発足に先立ってホトニクスワールド・コンソーシアムをすでに設立しております。

光をコアとすると申しましたが、光は森羅万象の表現を表している、非常に広い、科学技術の本質的な位置づけにあると考えています。ただし、光科学は電気工学や機械工学といった分類からすれば後発に位置しています。また大学の教育体制は国立大学の講座制の是非が色々議論されている状況にあります。このような状況の中で、本学はまったくの白紙の状態に既存の学問を越える、既存の学問の切り口を変えるような視点を新たに導入するという位置づけでの光科学技術を想定しております。

今回、273名の1期生を迎え、何かしら光に興味を持った学生が入ってきております。その学生に対して、我々は光科学とはどういうことか、という問いに対する答えをカリキュラムに全部入れてあります。それらの学生が年次を進んで勉強し、またスタッフはそれぞれの先端的な研究をする。さらに直結する研究のアクティビティは当然大学院に求めることになります。大学ができたばかりで気が早いかも知れませんが、4年後には大学院を開設し、大学院が完成する9年後には大学のコアの部分が完成すると考えております。光と物質の相互作用を機能に結びつける、あるいはデバイスに結びつけるというようなことを基本に据えた学問をここから発信していくことを考えています。

我々の研究は世界につながっており、この大学から発信した研究が世界的に流れを作り出し、現実動くような産業の流れを作ることが一番重要で、そのための仕組みを作る必要があります。大学はコアであり、ここから発してワールドワイドに広がりを持ってこちらに戻ってくる、多少時間がかかってもそういうコンセプトを貫いていきたいと考えています。

終わりに開学に至るまで多くの関係者、特に東川市長をはじめ千歳市には多大なご援助を頂いたことに心から感謝申し上げます。



18. 千歳科学技術大学設立時の思い出（文中の敬称は省略させていただきます。）

大学を設立するにあたって、準備財団設立、学校法人設立そして大学設立と設立申請が重複する中、学校法人の各種規程の整備、カリキュラムの作成、職員や教員の採用計画など事務局職員のその苦労は想像を絶するものだった。平成6年4月に設置された大学設立推進本部の職員は坂本捷男大学整備室長を始め、福島富夫、長谷川盛一、井手剛、川端忠則、阿藤孝嗣、森田友里恵と全員が千歳市職員の7名でスタートしている。平成8年3月26日に設立が認可された大学設立準備財団の職員は、平成8年4月1日時点で副本部長に坂本捷男、課長職に渡辺信幸、長谷川盛一、川端忠則、溝江満弥、係長職に原文雄、佐々木智、井手剛、係員に中野朝子、松崎正信、細貝貴生、島田和明の事務職員12名と、小松川浩、高岡詠子、福田誠、堀之内英の4名が主にカリキュラムの教務関係を担当するなど総勢16名と組織が強化されている。

当時の若手メンバーで現在大学で教壇に立っている小松川浩教授と福田誠准教授に思い出を語ってもらった。

(福田)

若手の苦労話をまとめるようにということですが、もう若手ではなくなってしまいましたね。大学設立の話が持ち上がった当時は、小松川先生も私もそれぞれ別の職業についており、佐々木先生と三戸先生から大学を作るからやってみないかということで参加したわけですが、「たいへんだった」の一言に尽きますね。何も無い状態で、校舎の敷地は原野だったし、文部省へはこれから大学設立のための認可申請をするという段階でした。当時は文部省から大学設立が抑制されていたから、申請が通るかどうかかわからない状況でした。結果的には、平成10年度に設立された理工系の大学は本学だけでした。そんなわけで、「どうなるかわからない」というのが精神的なプレッシャーだったように思います。認可申請がだめだったら、千歳市役所で雇ってくれたのでしょうかね？ いずれにしても、今とは全く別の人生になっていたことでしょう。開学10年を迎えて、今ここに居ることが不思議な気がします。

小松川先生も私も当面の身分は千歳科学技術大学設立準備財団の職員ということで、慶應大学の矢上キャンパスと千歳を行き来して仕事をしていましたね。千歳では、市役所の中に財団本部が設立されましたが、3回ぐらいでしょうか市役所のいくつかのフロアーを転々とし、最後は千歳駅前大通り沿いの千歳市民ギャラリーに事務所が移りましたね。ちょうどその頃、文部省への認可申請書を作成することになり、夜中に大量にコピーをとりました。両面コピー



建設前の大学用地に建てられたやぐら



設立準備財団が作成した文部省への許可申請書類の一つ

を作るのですが、午前1時とか2時になると頭がぼけてくるので、どのページの裏にどの向きで印刷するかというようなことがわからなくなってしまって、たくさん失敗コピーを作ってしまったことを覚えています。何万枚といった量のコピーを市の職員の方と手分けして準備しました。市の職員の方々も毎日夜中まで働いていました。その働きぶりは本当にすごかった。執念といった方が良いかもしれませんが、一丸となってがんばっていたと思います。そういう多くの方々の熱意によって本学は当初の計画通り平成10年4月に開学を迎えることができたのだと思います。

佐々木先生と三戸先生が研究と教育というように役割分担をされて、たまにお二人の意見が合わないようなところがあって、周りの者はあたふたとしましたが、どうもお二人の中ではあうんの呼吸というか、何か周りの者にはわからないけれども、通じ合うものがある、最後は良い着地点に到達して物事が決まって行ったような気がします。最先端の大学を作りたいとの気持ちから、カリキュラムが高度な内容になりすぎてしまって、文部省から「学部の科目としては難しすぎるので、変更するように。」との注文がついてしまいました。そこで、平成9年3月16日に川崎のホテルに泊まり込んでカリキュラムを練り直しました。佐々木先生、三戸先生、川合先生が中心となって、それは大変な作業量でしたが、何とか二日間で作業を終了することができて、ほぼ現在のカリキュラムが完成しました。そういえば、当時の学科名は物質光科学科と電子光システム学科とっていましたね。

(小松川)

そうでしたね。よく考えると、当初の大学学部名称も光科学部ではなく、融合理工学部でしたね。当時は、文部省からは理工学部の頭に「融合」を付けるのは前例も無く許可が下りませんでした。しかし、現在は創造理工学部が許可される時代でもあり、当時の佐々木先生の見通しを感じます。開学後10年で、光科学は最先端技術から基盤技術へとシフト



5月の風景

してきた感があります。私が佐々木先生の助手をしていた頃、先生がこうした社会の訪れを期待されていたことを思い出します。21世紀になり、時代がますますグローバル化の中で、工学・理学のみならず、社会科学も巻き込んだ学際領域の融合化・複合化が加速しています。我々もこうした時代の動きをきちんと見据えて大学人として日々の活動を行っていく必要があるのですね。

本学にとっての開学後の大きな変化というと、入試ですよ。色々と入試は苦労してきたと思いますが、開学時の入試は、受験生にはそれほど困らなかった一方で、入試の準備では別の苦労が随分あったようですね。福田先生は、開学の際には入試の準備を積極的に担当されていたと思いますが、何か苦労話がありますか。



10年目の銀杏並木

(福田)

入試問題の作成を作題者の方をお願いするにも、皆さんそれぞれ職場が異なり、世界中の様々な場所にいらっしゃったわけですから、連絡をとるのもなかなか難しい状態でした。いろいろ問い合わせを受けたのですが、今のよう
にネット環境が整っていなかったのも、電話とFAXでやりとりしました。やっと問題原稿が集まって印刷に回すというところで、原稿をお預かりしました。開学前なので、もちろん校舎もなく金庫も無い状態でしたから、入試問題の原稿をお預かりしたのはいいけれど、その保管管理にはたいへん神経を使いました。たとえば、風呂に入るにも問題が入ったアタッシュケースを風呂のドアの前に置いて、ドアは少し開けた状態で風呂に入っていました。火事のようなことがあったらそれだけをもって逃げようと思っていました。最初の入試では、700人を超える受験生が集まり、東京会場だけでも70名以上の受験がありました。今思うと夢のような話ですが、とてもうれしかったですね。



初年度の入試問題

平成10年の開学直後は、教員が確か16名しか着任していなかったのですが、学生は270名を超える1年生が入学してきました。当然TAはいなかったのも、教員があれもこれもやっていた。開学初年度は、計算機実習を春学期に行い自然科学実験を秋学期に行うという時間割になっていましたので、計算機実習を担当していた小松川先生は準備に追われていたと思います。パソコンはWindows95の時代で、今のように安価で高性能のハードウェアが大量に出回っていたわけではないので、機器の選定や予算の管理が大変だったと思います。自然科学実験については、物品がなかなかそろわ



自然科学実験の実験室

なかったことと予算が削られたので器具を自作しました。インターネットによる通販がなかったので部品の調達がたいへんでした。今では、ネットで注文すると数日後には様々な部品が手に入るのも、あのときにネット通販があればどんなに便利だっただろうと思います。たった10年なのに、ずいぶん時代が変わったと思います。

(小松川)

福田先生が実験系の準備で、私が情報系の準備でした。情報系は、NTTさんにSIをお願いして、大変助かった記憶があります。ちょうどITが注目され始めていたことで、私もSI業務（当時のNTTの業務）というのを初めて目にして、新鮮だった覚えがあります。世界の「IT元年」が1980年後半のWWW発明と1990年初めのJAVAの登場であるとする、本学の開学時にはほぼIT10年で、開学後10年の今で見ても、IT20年の真ん中半分が本学の歴史ということになります。ITがこの20年で社会の基盤へとシフトしたことを考えると、本学もこうした革新的なスピードで変化する情報社会の中で、どのように対応していくべき

か、真剣に考えていく必要があるのでしょうね。

しかし、最後は人と人がコミュニケーションをとりながら物事を解決していくという人間の営みには変化があるわけでもないと思います。小規模校の本学では、こうした点では、多少大きな飲み会を行えば、ほぼすべての教職員が集まれる訳で、情報の共有はとっても図りやすいのでしょうね。この辺は、福田先生も同じように感じますか。

(福田)

教授会や教室会議はお互いに顔を付き合わせて議論していましたね。末広8丁目のマンションにほとんどの先生が住んでおられたので、そのマンションは“大学マンション”と呼ばれており、教授会もそこでできるような状況でした。もちろん実際に開催されたわけではありませんが。

最後になりますが、確かに設立当初の構想としては「融合理工学部」で、残念ながら文部省からは認められなかったですね。もともと佐々木先生は光の大学を作るというよりは、理工学を総合的に扱う大学にしたかったのですね。開学から10年が経って本学も改組となりますが、今まさに佐々木先生が理想とした大学になろうとしているわけですね。開学前の初心を忘れずに、面倒見の良い大学として前進していけたらいいですね。



計算機実習室



雪解け間近



研究室からの風景



隣接する千歳湖



ミズバショウの群生地（千歳湖）

19. キャンパスギャラリー・記念日

【モニュメント】

『悟りの門 / 学びの庭』



悟りの門



学びの庭

「悟りの門」の門柱には、建学の精神である「人知還流」「人格陶冶」が刻まれています。門をくぐると目の前に「学びの庭」が広がり、大学創設時の信条（格物の六訓）を刻んだモニュメントが立ち並んでいる。

*人知還流

有能な人材や研究成果を社会に放出し、その果実を社会から大学に還流させること。

*人格陶冶

高い理想を実現するためには、人格を高めることが必要。

*格物の六訓

格物には“物事を成し遂げるためには、その本質を極めなければならない”という意味が込められている。

- | | |
|---------|----------------------------|
| 一、思考の目安 | プラス思考で臨むか、マイナス思考で止まるか。 |
| 二、存在の確信 | 可能性の存在を確信して挑戦するか、無として諦めるか。 |
| 三、面壁の捨 | 執着しているすべての物を捨て、白紙の状態で臨めるか。 |
| 四、知恵の重さ | 知恵こそが成就の力。 |
| 五、縮小の限界 | これ以上縮めようがない中にも、法則性を見出す努力。 |
| 六、陽の恵み | 光の源泉、太陽の恵みに感謝。 |

【施設】

*本部棟

学校法人の本部と事務室、教室、厚生施設としての体育館、食堂、売店から構成され、半円形にデザインされた建物は、研究・実験棟と対になって、「CHITOSE」の「C」を表している。エントランスは円形の化粧柱に囲まれた、吹き抜けのオープンスペース。光と影のコントラストが、格調高い雰囲気醸し出している。

*研究・実験棟

ここは、光テクノロジーの世界的な研究拠点となり、クラス1000のクリーンルームなど最先端の研究設備が整備されている。

*ひらめきの橋

本部棟と研究・実験棟を一直線で結んでいて、研究のアイデアや解決策がパッとひらめくようにと願いを込めて名付けられている。

*美々学園通り・美々西通り

イチョウ並木が続く美しい街路。

世界のイチョウは日本から広まったように、本学の成果が世界へ伝播することを願って植えられている。

歩道は、オーストラリア産のザクロ色のタイルを敷き詰めてあり、有能な人材と新技術が数多く輩出されるようにとの願いが込められている。



【記念日】

* 6月6日 開学記念日

平成6年6月、千歳市職員坂本捷男氏と(株)日立製作所社員今村陽一氏は、横浜市日吉にある慶應義塾大学佐々木研究室を訪れた。訪問の目的は、千歳市の長年にわたる懸案であった高等教育機関の設置についてである。

研究室にいた佐々木敬介氏は、慶應義塾大学理工学部の教授の職にあった。佐々木敬介氏の若き研究時代は、光科学の研究環境が未熟で、大変苦勞の多い時代であった。佐々木敬介氏は常日頃より光の将来性・可能性や自前の研究ビジョンを自信を持って熱く語っていた。当時は、この分野の先駆者として輝かしい研究成果により、光の時代を切り開いた世界的にも著名な研究者であった。

坂本捷男氏と今村陽一氏は佐々木敬介氏に千歳市の概要、大学設立の動機、悩みなどを説明後、意見交換を行なったところ、佐々木敬介氏から設立に向けての全面協力を快く得ることができた。これにより、大学設立に向けて第一歩を歩みだすことになり、この日が平成6年6月初旬であったことから6月6日を大学開学記念日と制定した。

* 9月19日 光の記念日

レーザーの発振が米国ではじめて報道されたのは、1960年(昭和35年)7月7日付のNew York Times であり、日本では同年7月11日付けの朝日新聞で伝えられた。このニュースが学術的な場で最初に報告されたのは昭和35年9月19日「光と電波の座談会」の席上であった。

これをもって、日本初の光関連技術を専門とする本学に最もふさわしい日である9月19日を「光の記念日」として制定した。

20. 着工から竣工までの写真

本 部 棟



平成8年12月 着工前



平成9年5月



平成10年4月 開学



研 究 ・ 実 験 棟



第2編 開学から10年の軌跡



1. 写真で見る10年の軌跡	34
2. 主な出来事		
①完成年次における文部科学省大学実施調査	54
②入試改革	54
③学部・学科再編	55

1. 写真で見る10年の軌跡

平成10年度（1998年）

大学の動き

- H10. 4. 1 開学
佐々木敬介教授初代学長に就任
- H10. 4.11 第1回入学式（入学者273名・宣誓 合志 憲一さん）
- H10. 6 開学式
開学記念祝賀会開催
- H10. 7 第1回市民公開講座開催
- H10. 8 オープンキャンパス1998（第1回）
- H10.10 佐々木敬介学長逝去
先端有機ホトニクス物質と応用に関する国際会議（ICONO' 4）開催
- H10.11 緒方直哉教授第2代学長に就任
佐々木敬介学長を偲ぶ会（大学葬）



世の中の出来事

米英軍、イラクを大規模攻撃
橋本内閣退陣、小渕内閣発足
北海道国際航空機新千歳－羽田間就航

町村信孝文部大臣にご臨席いただく



6月6日に行なわれた開学式と
披露された乗馬風景



「2000年ノーベル化学賞受賞者」
アラン・J・ヒーガー氏



H 10.10 先端有機ホトニクス物質と応用に関する国際会議 (ICONO' 4)

平成11年度（1999年）

大学の動き

- H11. 4.10 第2回入学式（入学者277名・宣誓 北 幹雄さん）
H11.10 第1回稜輝祭（学校祭）開催
第1回千歳光科学国際フォーラム開催
第1回佐々木記念賞授与式
H12. 2 常陸宮殿下・常陸宮妃殿下ご来学



第2回入学式受付



ソーラーカー部



講義室



顕微鏡室



共同利用物性（レーザ）実験室



学生実験室

世の中の出来事

欧州でユーロ誕生
東海村 JCO で臨界事故発生
千歳川放水路計画中止決定



第1回千歳光科学国際フォーラム（参加者108名）



講演するベルギー・ルーバン大学教授 アンドレ・P・パスーン氏



H12.2 常陸宮殿下・常陸宮妃殿下ご来学

平成12年度（2000年）

大学の動き

- H12. 4. 8 第3回入学式（入学者168名・宣誓 小山 栄紀さん）
- H12. 8 インターンシップ開始
- H12. 9 ISOM2000光メモリー国際会議開催
- H13. 2 学内企業説明会（出展企業30社）



第3回入学式



第2回市民公開講座

世の中の出来事

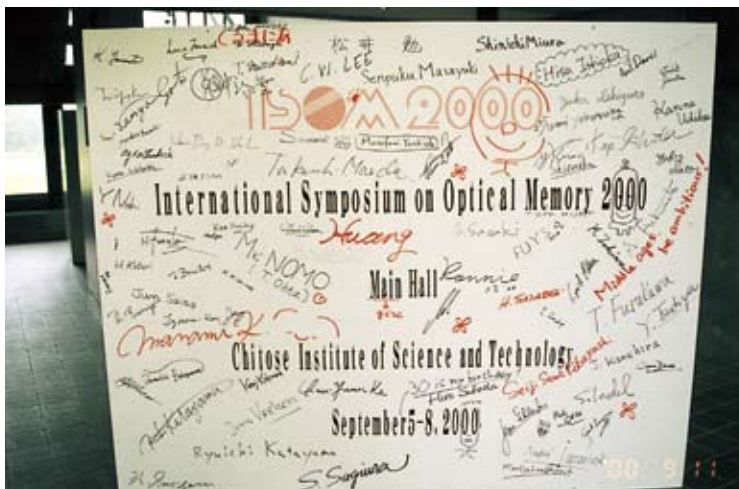
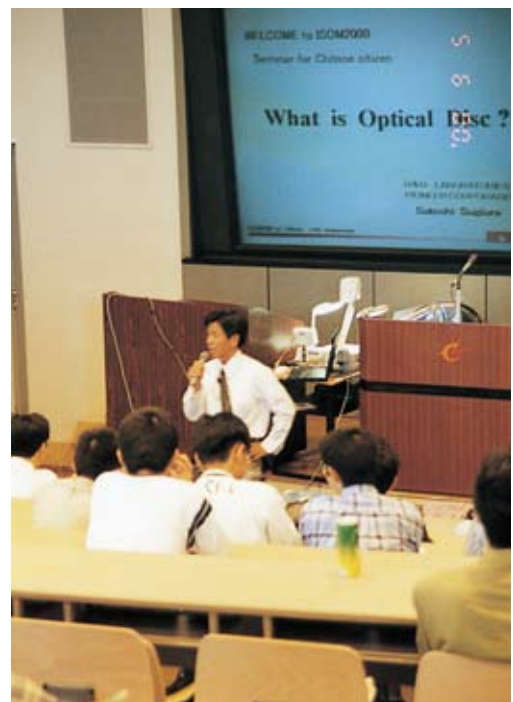
米国でブッシュ大統領、ロシアでプーチン大統領当選
雪印中毒事件・三菱自動車リコール隠し
白川英樹氏ノーベル化学賞受賞
東日本電信電話㈱千歳営業所廃止



研究実験棟アトリウム



ISOM2000光メモリ国際会議



評議員会（東京開催）

平成13年度（2001年）

大学の動き

- H13. 4. 7 第4回入学式（入学者235名・宣誓 横井 伸浩さん）
- H13. 6 大学院設置認可申請書提出
大学実地調査
入試改革の取り組み開始
- H13.11 校歌制定
- H13.12 大学院設置認可
- H14. 1 大学報創刊
- H14. 3 第1回千歳科学技術大学同窓会（設立総会）小口敬太郎氏初代会長に就任
- H14. 3.16 第1回学位記授与式（学位記授与者248名・答辞 永井 拓史さん）
第1回謝恩会開催

【大学報の創刊】

本学の開学は平成10年4月、待望の校歌が制定されたのが平成13年11月、大学院の設置認可されたのは平成13年12月、初めての卒業生を世に送り出したのは平成14年3月と、大学として大きな区切り迎えた平成13年度に「大学報」の創刊をみた。

その目的について、当時の理事長辻岡昭氏は次のように語っている。

- ① 大学は、時代に対応することも大切であるが、一方で時代を超え、世の風潮に容易に動かされない確固たる心を持つことが大切である。
- ② この心は、永い年月を経て培われ、よい伝統、或いはよい校風の形で現れてくるもので、多くは大学の草創期に基礎が造られ、本学は今がその時期である。
- ③ 一般に歴史の形成には正しい記録による裏付けが必要である。
- ④ これを機に本大学にゆかりの人達が一致協力して、よい伝統に導く「千歳科学技術大学」を育て上げ、それは素晴らしい校風を誇れる大学でありたい。

このようにして平成14年1月に「千歳科学技術大学報」が創刊された。

以後平成15年4月までは月1回のペースで発刊されている。

その後の発刊は年2回のペースとなり、平成20年3月現在第20号となっている。

発刊内容は、発刊当初から予算や決算などの財政状況を公開しているほか、事業活動や学事事項をはじめ、入試情報、就職情報、学生活動情報などその時々各種情報を提供している。



世の中の出来事

世界貿易センタービルの崩壊
小泉内閣発足
野依良治氏ノーベル化学賞受賞
池田小学校児童殺傷事件
千歳オフィス・アルカディア開業



第2回千歳光科学国際フォーラム

「2000年ノーベル化学賞受賞者」故アラン・マクダイアミット氏

第1回学位記授与式



学位記を授与される代表者



答辞を述べる永井拓史さん

国歌斉唱に引き続き、本学校歌を作詞作曲いただいた元洗足学園大学教授寺島尚彦先生の指揮により在校生有志のピアノ演奏及びコーラスで校歌が斉唱されました。



式を終えた皆さんの笑顔



担当教授から学位記の授与を待つ卒業生

平成14年3月末で退職された先生達



緒方直哉教授

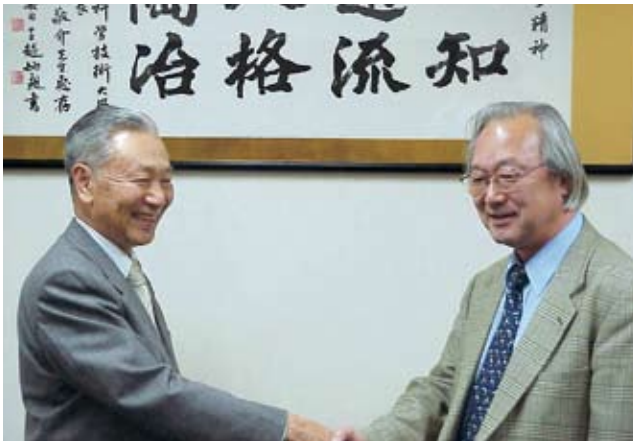


川合敏雄教授

平成14年度（2002年）

大学の動き

- H14. 4. 1 大学院（博士前期課程）開設
雀部博之教授第3代学長に就任
- H14. 4. 6 第5回入学式（入学者254名・宣誓 中原 誠さん）
第1回大学院入学式（入学者14名）
- H15. 1 大学入試センター試験本学開催
大学同窓会会報創刊
- H15. 2 産学連携交流事業（研究成果社会還元セミナー）
- H15. 3.15 第2回学位記授与式（学位記授与者258名・答辞 安藤 美和子さん）



緒方学長から雀部学長へ

平成15年1月1日 サンデー毎日記事より

千歳科学技術大学は光科学の分野で成功をあげていることで知られている。地方で充実した研究、教育をしている大学は、もっと注目されてもいい。小さいながらも独自のカラーを持つ大学がこれから伸びていくはずだ。

（名古屋大学大学院教授梅津和郎氏コメント）



第5回入学式

世の中の出来事

日韓サッカーワールドカップ開催
小柴昌俊氏ノーベル物理学賞受賞
田中耕一氏ノーベル化学賞受賞
千歳市立千歳市民病院開院



オープンキャンパスでのコンピュータ実習



大学PRシャトルバスの運行



英会話サークル



バレーボール部



小学生の体験学習



真実研究会



野 球 部



文 芸 部



バドミントン部



フットサル愛好会

初めて実施された大学入試センター試験



硬式テニス部



平成15年度（2003年）

大学の動き

- H15. 4. 5 第6回入学式（入学者270名・宣誓 川本 裕太さん）
第2回大学院入学式（入学者17名）
- H15. 6 産学官連携推進室発足
電波の日・情報通信月間「北海道総合通信局長表彰」受賞
- H15. 8 夢・化学21 一日体験入学
- H15. 9 産学連携交流事業「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」開催
平成15年度文部科学省選定事業「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」
の採択を受ける。
- H15.12 大学院棟施設整備工事着工
- H16. 3.20 第3学位記授与式（学位記授与者258名・答辞 四十物 孝憲さん）



夢・化学21 一日体験入学



入学式終了後の父母・保護者説明会



産学連携交流事業
サイエンス・パートナーシップ



オープンキャンパスの実験

世の中の出来事

スペースシャトルコロンビアが空中分解、7人死亡
新種のコンピュータウイルス猛威
阪神タイガースが18年ぶりにリーグ優勝
山口幸太郎氏第6代千歳市長に当選



平成16年3月末で退職された宮崎栄三教授



電波の日・情報通信月間
「北海道総合通信局長表彰」受賞



キラキラサークル
社団法人「小さな親切」運動本部から
全国庶民賞贈呈される。



第4回千歳光科学国際フォーラム



「1986年ノーベル物理学賞受賞者」
ハインリッヒ・ローラー氏



大学同窓会会報第2号が発刊され会報名を
「美々の森」と命名される。



学食のスタッフ

平成16年度（2004年）

大学の動き

- H16. 4.10 第7回入学式（入学者223名・宣誓 小幡 はるなさん）
第3回大学院入学式（入学者15名）
H16. 4 第4回大学同窓会総会 齊藤岳人氏第2代会長に就任
H16. 7 産学連携交流事業「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」開催
H16. 8 大学院棟竣工
就職課を研究実験棟に変更
大学等開放推進事業「大学Jr.サイエンス事業」開催
H16. 9 本学大学院博士後期課程に初の国費留學生が入学
平成16年度文部科学省選定事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」の採択（2件）を受ける。
H16.11 企業と大学の情報交換会開始（札幌・東京会場 出席企業87社）
H16.12 CISTテレビコマーシャルの放送開始
H17. 2 学内企業説明会（出展企業90社）
H17. 3.19 第4学位記授与式（学位記授与者224名・答辞 横井 伸浩さん）



サイエンスパートナーシップ



市内で行なわれた祭に参加した「YOSAKOIソーラン部」



大学Jr.サイエンス事業（チューターとなる高校生が先生から授業を受ける）

世の中の出来事

スマトラ沖地震発生、死者22万人
新潟県中越地震発生、死者40人
新札（千円札・五千円札・一万円札）発行
駒澤大学付属苫小牧高校甲子園初優勝
千歳駅バスターミナル機能供用開始



コーラス部による校歌斉唱



弓道部



午後からは、チューターとなった高校生が小学生に指導



NHKテレビニュース640の取材を受ける
ソーラーカー部



完成した大学院棟



第5回千歳光科学国際フォーラム



企業と大学の情報交換会



平成17年2月に逝去された
児玉那彦教授と研究室のメンバー

平成17年度（2005年）

大学の動き

- H17. 4. 9 第8回入学式（入学者240名・宣誓 吉岡 毅さん）
第4回大学院入学式（入学者31名）
- H17. 7 本学が就職に強い大学として「週刊新潮」、「週刊エコノミスト」に取り上げられる。
- H17. 9 小谷津孝明氏第2代理事長に就任
- H17.10 第1回父母懇談会
- H18. 2 サイエンス会議
- H18. 3.18 第5回学位記授与式（学位記授与者243名・答辞 坂口 貴子さん）



小中学校児童生徒による成果発表（サイエンス会議）



特色GP・現代GPによるGPフォーラム



福永宗碧さんから毎年届けられる春の便り

世の中の出来事

ロンドンなど世界各地でテロ発生
郵政民営化法成立
JR福知山線事故で107人死亡
千歳アウトレットモール・レラ開業



学内企業説明会



キラキラサークルによる花壇整備



支笏湖氷湧まつりでボランティア活動



売店のスタッフと学生



第1回父母懇談会



平成17年9月で退職された安達千波矢教授

平成18年度（2006年）

大学の動き

- H18. 4. 8 第9回入学式（入学者217名・宣誓 三浦 隆治さん）
第5回大学院入学式（入学者26名）
学内奨学金制度創設
- H18. 4 信州大学と共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
独立行政法人メディア教育開発センターと共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
- H18. 7 平成18年度地域新生コンソーシアム研究開発事業「次世代情報通信の高速広帯域システム
用光デバイスの開発」の採択を受ける。
- H19. 3 多目的複合施設着工
- H19. 3.17 第6回学位記授与式（学位記授与者248名・答辞 冨田 量宏さん）



GPフォーラム



小中学生を対象にしたeラーニング講習会（eカレッジ）



三戸慶一教授



池田弘治教授

平成19年3月末で退職された先生達

世の中の出来事

北朝鮮が地下核実験実施
秋篠宮紀子さまが男子ご出産
安倍内閣誕生
北海道で竜巻発生、9人死亡
千歳市家庭ゴミの有料化実施



宮本博文教授



インターンシップの状況



多目的複合施設建設はじまる



完成した学生寮「シェルブルー千歳」(民間による本学専用寮全95戸)

平成19年度（2007年）

大学の動き

- H19. 4. 7 第10回入学式（入学者178名・宣誓 長屋 則宏さん）
第6回大学院入学式（入学者23名）
- H19. 6 学科再編に伴う「総合光科学部」の設置届出が受理される。
北星学園大学と共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
平成19年度文部科学省委託事業「先導的教育情報化推進プログラム事業」の採択を受ける。
- H19. 8 平成19年度文部科学省選定事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム事業（現代GP）」
の採択を受ける。
- H20. 2 ICT活用教育研究フォーラム開催
- H20. 3.15 第7学位記授与式（学位記授与者234名・答辞田中 俊輔さん）



10周年記念棟竣工

上……………現在の校舎右側に竣工となった10周年記念棟
左……………外観

現在の講義棟に渡り廊下により接続された
10周年記念棟の外観

左下……………2階「メディアホール」
PC教室が2室、コンピュータラーニングルーム、プロジェクトルーム、メディア教育推進室を配置

右下……………1階「学生ホール」
学生課オフィス、保健室、学生相談室等を配置

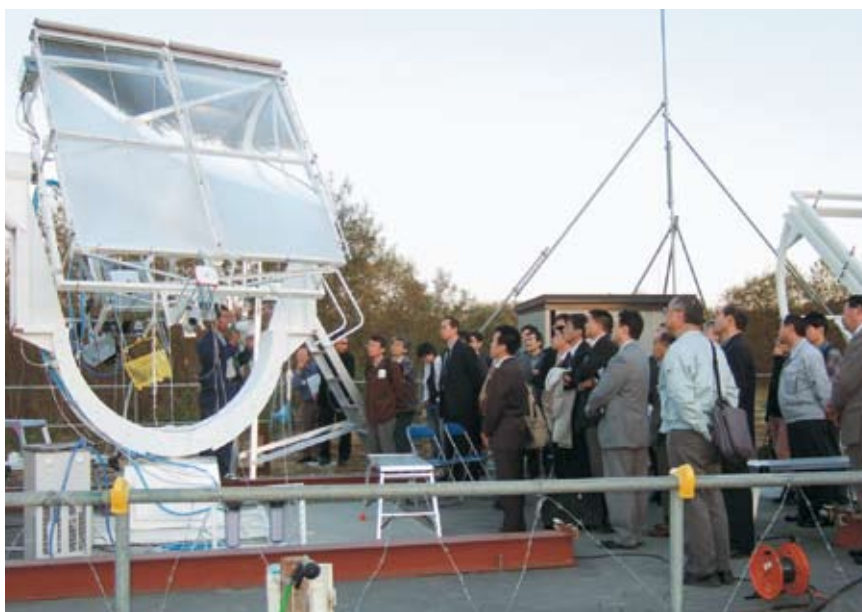


世の中の出来事

原油急騰
安倍内閣退陣、福田内閣発足
新しい万能細胞（iSP細胞）開発
不二家、ミートホープ、石屋製菓など食品偽装相次ぐ
米軍再編に伴い訓練の一部千歳基地実施



「ニッポンの大学」小林哲夫著
（講談社現代新書）に、
就職に強い大学「工学系単科大学」の部第1位として紹介されている。



産学官連携事業における太陽光励起レーザ実証実験装置見学



千歳市生涯学習事業ふるさとポケットの
空気砲の実験



平成20年3月で退職された花村榮一教授



2. 主な出来事

①完成年次における文部科学省大学実地調査

完成年度を迎えた平成13年6月、文部科学省によるアフターケア実地調査が行なわれ、第1回6月4日は法人部門について、第2回は6月25日大学設置について行なわれた。

調査は、大学設立趣旨の実現度に対する自己評価、留年者・ドロップアウト率、学科移行に際する学科間ばらつき、大学院希望者数、就職の見通し、などについて質疑応答があり、以下の審査講評をいただいた。

【審査講評要約】

(結 論)

当初の設置の趣旨に基づき、順調に完成に向かってしていると理解した。結論から言うと文書等での特段の留意事項はない。

(感 想)

光科学に焦点を絞ったという点について脱帽した。規模、技術の将来を考え、絞られた趣旨が誠に成功だったと理解する。また、学部・学科のネーミングも実態を良く表わしており、大変良い結果をもたらしている。学生インタビューでも、光という言葉に惹かれてこの学校を選んだという話もあった。

(今後配慮が必要な点)

- * 学科分けについて現在は特段大きな問題は無いが、今後も常に注意深く見ていく必要がある。
- * 第1学年の科目は基礎的な授業内容なので、可能な限り第2学年以降の情報（先生の顔・卒論）を学生に伝えて欲しい。
- * 設立以来4年間の教育研究実績を是非近い機会に総括して、自己評価なり研究紀要を作成し、PRに努めていただきたい。
- * 学生同士が教育研究などについてコミュニケーション、グループワークが出来るような空間が必要だと思う。
- * これまでは設置の趣旨どおりに厳密に進められてきているが、今後はダイナミックに時代に合わせながら、改善していった欲しい。
- * いまは千歳市と大変良い関係にあるが、大学自身が成果を出して、地元で喜ばれるような好環境を作っていかなければならない。

②入試改革

本学は開学3年目の12年度に大幅な定員割れという大ピンチを迎えたのを契機に入試改革に踏み切った。

- * 広く多くの受験生に本学を知っていただくためにも大学入試センター試験を本学において実施する体制を構築した。
- * 本学の入試では、物理、化学に重点を置かれていたが、入試時の国語の成績と卒業時の達成度には強い相関関係があることが他大学において実証されていることを考慮して、本学においても入試科目に国語、生物を採用することとした。
- * 次のクラスで補習の充実を図った。

力学基礎クラス、電磁気学基礎クラス、化学基礎クラス、数学基礎クラスの各クラスでは学生が分かるまで指導する体制をとり基礎クラス受講者の物理学関連科目の成績が大きく向上した。

また、自然科学実験などでは、大学院生のT Aのほかに企業からのT Aの協力もいただき実験実習科目を重視する姿勢を堅持した。

③学部・学科再編

入学者数の減少傾向が続いたことから、2006.4.1に大学評議会メンバーによる対策が議論され、学部・学科再編計画を早急に立案、実施することとした。

主な検討経緯は以下の通りである。

- 18. 4. 1 大学評議会メンバーによる合宿・議論（キックオフ）
- 18. 5 企画運営グループ、学科検討タスクグループ発足・議論
- 18.11 将来構想タスクグループ発足（実行段階に移行）
- 18.12 教室会議等の議論を踏まえ、全教職員への説明会
- 19. 1 教員配属希望提出、配属決定
- 19. 4.23 臨時理事会で承認
- 19. 4.25 文部科学省届け出
- 19. 6.26 届け出受理、新体制での学生募集

再編の内容は、「光科学」の分野変更は行なわないが、従来の光科学部を「総合光科学部」として可能な限り幅広い分野に研究教育活動を広げるべく、以下の3学科6分野構成とした。

○バイオ・マテリアル学科

- ・バイオ・メディカル分野
- ・光マテリアル分野

○光システム学科

- ・オプト・エレクトロニクス分野
- ・通信・ロボティクス分野

○グローバルシステムデザイン学科

- ・情報・メディア分野
- ・システムイノベーション分野

- 学部・学科の人材育成の指針は以下の通りである。

総合光科学部

理学と工学を融合したカリキュラムを基本に、光科学技術に関する基礎から応用までを身につけ、さらに人間や環境への視点を有する幅広い職業人を育成する。

バイオ・マテリアル学科

バイオ・メディカル分野と光マテリアル分野の教育と研究により、基幹技術としてのフォトニクスの知識を有し、かつ、バイオ・マテリアル関連産業に展開可能な知識を有する職業人を育成する。

光システム学科

光テクノロジーを軸とした光・電子工学と通信・ロボット工学を融合した教育と研究により、21世紀の「ものづくり」を支える幅広い知識と応用力を備えた職業人を育成する。

グローバルシステムデザイン学科

情報技術と光技術に感性工学・人間工学・環境工学などの知見を取り入れ、科学技術を社会に応用する実践的な教育と研究により、グローバルな視点から人間主体の技術開発を行なうことのできる職業人を育成する。

なお、光科学部の学生募集は2008年度以降中止するが、在学生在籍する間は存続する。



第3編 佐々木敬介先生を偲ぶ



1. 故佐々木敬介先生のプロフィール	58
2. 平成10年度入学式学長あいさつ	59
3. 開学10周年に寄せて 初代学長夫人 佐々木 紀美子	60
4. 佐々木先生を偲んで 前学長・名誉教授 緒方 直哉	61
5. 佐々木先生との思い出 PWC副会長 今村 陽一 (佐々木敬介学長を偲ぶ会より)	62
6. 思い出のスナップ写真	63

1. 故佐々木敬介先生のプロフィール

(昭和11年7月25日函館市にて出生)

【学歴・職歴】

昭和35年3月 慶應義塾大学工学部電気工学科卒業
昭和39年4月 慶應義塾大学工学部助手
昭和44年3月 慶應義塾大学大学院工学研究科工学博士取得
昭和61年4月 慶應義塾大学工学部電気工学科教授
平成4年4月 慶應義塾大学大学院理工学研究科専攻主任
(物質科学専攻)

【各種委員等】

昭和46年4月 (社)電子情報通信学会海外論文編集委員
昭和62年4月 理化学研究所国際フロンティア研究システム研究員
(分子素子チーム)
平成2年10月 欧文誌(英文)「Nonlinear Optics」編集委員
平成2年10月 (社)電気学会：C部門・有機非線形光学材料調査専門委員会委員長
平成4年7月 通産省工業技術院次世代産業基礎技術開発「非線形光電子材料」評価委員
平成6年1月 文部省/学術審議会専門委員
平成6年1月 通産省/産業技術審議会専門委員
平成9年8月 ホトニクスワールド・コンソーシアム会長



在りし日の学長のビデオ放映

2. 平成10年度入学式学長あいさつ (平成10年4月11日第1回入学式より)

千歳科学技術大学 学長 佐々木 敬 介

新入生諸君、入学おめでとう。本千歳科学技術大学は、千歳市の物心にわたる全面的支援を受けて文部省より認可を受け本日、入学式を迎えました。また、本日は公務御多忙中の町村文部大臣も出席くださり、これから始まる本大学の歴史にとって永久に記念すべき平成10年4月11日となりました。

本大学は、おそらく世界で初めてであろう光科学部を設置し、これから研究教育を展開して参ります。

申すまでもないことですが、約500万年前ともいわれる人類の誕生から光は人類を包み育んできました。この光が近代科学として出発するのは今からちょうど100年前の1898年の光電効果の発見と、それに続くアインシュタインの光量子仮説以来です。これは、光が電子と深く関っていて電子を動かすのは電磁波としての光であり、また、電子が動けば光や電磁波が発生する。しかも光はあるエネルギー単位すなわち光量子として関わるというものです。このあたりの基本的な知識は間もなく始まる専門基礎科目の電磁気学や量子力学でしっかり身につけてください。

従来は、日本の自然科学の研究教育では化学、物理学、電子工学等はそれぞれが大きな分野を形成し、それらがさらに分化して専門分野を形成してきました。今回、本大学では、この3分野を栄養供給の根としてその上に光科学の果実を实らせるように大胆な研究教育を計画しました。このことは予め世界の科学者に問い掛けて賛同を得ております。また、これでは狭いのではないと思われるかも知れませんがそんなことはありません。先刻申し上げた様に、光は電磁波の或る波長域に存在しますが、電子との関わりは全電磁波に共通の理論を作れます。

ご存知のように20世紀は、電子と半導体物質が主役のエレクトロニクス時代です。一方、1960年のレーザの発明により光科学発展の条件が整ってきて21世紀には大きく展開できる見通しがあります。この北海道の美々の地から世界に向かって教職員、学生諸君が一体となって、実現を目指しましょう。

私は、大学や大学院での研究成果が社会に役立つものであり、教育を受けた卒業生は社会で活躍していただきたいと考えます。そのため、本学はこの千歳の地から展開するホトニクスワールド・コンソーシアム(PWC)の中核となります。PWCは産官学の協力により大学の研究成果の実用化と可能性を身につけた卒業生の活躍の場を世界的に展開する機構で、昨年8月にすでに発足しています。このような期待される状況を我々は「人知還流、人格陶冶」の言葉で表現したいと思っています。これから基礎教育における大学の果たす役割は、世界的にますます高くなります。幸いにして本大学の就任予定教員には世界的な研究を展開してきた人物を揃え、御覧のような世界最高水準の研究設備環境を整えて新入生諸君を迎えることができました。これからは教職員・学生が力を合わせて、今申し上げた目標の実現に向かうことを心から期待して私の御挨拶といたします。

3. 開学10周年に寄せて

初代学長夫人

佐々木 紀美子

千歳科学技術大学の開学10周年を心よりお祝い申し上げます。

出席させていただいた平成10年の入学式と開学式の情景が感慨深く思い出されます。開学から10年、光陰矢のごとしと申しますが時の流れの速さ、めまぐるしく変化する社会情勢や科学技術の急激な進歩に驚きを感じます。安穏と日を過ごしておりましたが、節目となるこの10年を振り返る機会を与えていただきました事に心より感謝申し上げます。

かえりみますと主人は、食品会社を創業した父の「これからの時代はエレクトロニクスが重要になる」とのアドバイスで工学部に進学したと入学の動機を語っておりました。大学で教育、研究に40年余りを過ごし、いずれは光学関連の研究所を創立し、生涯光の研究を続けたいとの夢を描いていました。平成6年に千歳市より大学創設計画のお話をいただき、準備委員会発足以来、国内外を奔走しておりました。海外の研究者や多くの方々の賛同を得て開学準備をすすめ、関係機関のご協力のもと平成10年に光科学専門の大学の開学を実現させていただきました。開学時の関係者の方々の感慨はひとしおだった事と思います。初代学長としての在任は半年間のみでしたが、理事長様はじめ後任の学長、教職員、関係機関の大勢の方々のご尽力により開学4年後には大学院も設置され、平成20年度には学科も増設されとの事を伺いました。着々と世界の注目を集めるすばらしい大学に発展しつつある事をお聞きし、開学の礎とならせていただいた主人も本望であった事と思います。あらためて関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

千歳科学技術大学が末永く光輝き、ますますご発展されます事を心よりお祈り申し上げ、遠くから見守らせていただきたいと思います。



4. 佐々木先生を偲んで

千歳科学技術大学 前学長・名誉教授

(有) 緒方材料科学研究所所長

緒 方 直 哉

千歳科学技術大学が平成10年4月に開学してもう10年になる。光陰矢の如しとか、10年一昔とよく云われるが時が経つのは本当に早いものと思う。故佐々木敬介先生の優れた先見の明によって光科学を専門とする世界でも唯一の大学が千歳市の全面的な支援の下で設立された。まだ市営牧場であった広大な敷地の整地をしている時、平成9年の春に今のキャンパスを訪れた時はまだ泥んこの状態で、ここに立派な校舎が出来るとは想像もつかなかった。

初代の学長に就任された故佐々木敬介先生は光科学、特に非線形光学の分野で世界的な研究業績のあった方で、私とは研究とゴルフを通じて親交があった。まだ上智大学にいた私が千歳科学技術大学に招かれたのは佐々木先生とのご縁に始まる。平成9年4月末に佐々木先生から千歳科学技術大学の状況を見に行きませんかと光科学を専門とする大学の先生方が5、6人一緒に誘われて、泥んこのキャンパスを見学した後に翌日ゴルフをする予定でニドムに泊まり、夜に大宴会を行って翌日朝に起きてみると15センチもの積雪があって勿論、ゴルフ場は閉鎖で仕方なく朝からまた、宴会をしたが、5月の連休が近いというのに雪とはさすが北海道だと思った記憶がある。

私はそれまで勤めていた上智大学を平成10年3月で定年を迎えるので、佐々木先生のお誘いを受けて千歳に来たのは平成10年のお正月を過ぎてからであった。第一期生の入学試験の問題作成やら開学の準備で忙しい日を送ったが、入学試験はまだ校舎が引渡しを受けて間もないこともあって、2月始めに札幌駅の北側にある予備校の教室を借りて行った。入学試験も無事に終わって2月末にフィリピンのマニラ市の北にあるリゾート地で国際会議があって、暑いところだがゴルフができますよと佐々木先生をお誘いしてご一緒にフィリピンに行った時は大変お元気で一日2回ゴルフを廻って帰国された。開学の準備に忙しい毎日であったが、たまたま3月半ばに当時、私の所の卒業生が北大大学院にいたので飲み会を札幌でやろうということで佐々木先生をお誘いしたところ喜んでついてこられたが、途中から気分が悪いので千歳に戻りたいと云われて急遽タクシーで千歳に戻った。その時以来、病床に臥されて4月11日の入学式ではご挨拶をされたが、以後は東京に転院されて平成10年10月5日にととう帰らぬ人となられた。フィリピンや札幌にお誘いしたことが病のきっかけになったのではないかとずっと気に掛かっていることである。

この10年の間に世の中は急激に変化して、科学技術の進展も予想以上に早く展開されている。電子科学から光科学への技術的進歩には目を見張るものがあるが、この方向を見据えた佐々木先生の慧眼には心から敬意を表したい。千歳科学技術大学が創立10周年を迎えて新しく学部の再編成を行うが、世界の光科学をリードする研究・教育の大学としてますます発展することを心から期待している。



5. 佐々木先生との思い出（佐々木敬介学長を偲ぶ会より）

（株）日立製作所 新事業本部本部長

PWC副会長 今 村 陽 一

平成10年10月5日午後3時38分、千歳科学技術大学初代学長 佐々木敬介先生が逝去されました。享年62歳と余りにも早く、特にこの4年間は21世紀の将来を担う光テクノロジーの一大拠点を創造すべく国内海外を問わず東奔西走し、難題と思われていた私立大学を新設し、更に昼夜兼行の活躍により、産学官連携組織であるホトニクスワールド・コンソーシアム（PWC）、光学研究機関である千歳ホトニクスリサーチセンターをも設立されるなど、前途洋々たる活動が開始された矢先のことだけに残念でなりません。今でこそ光科学は電気工学の主要分野に成長し、光ファイバー通信、光ディスク、レーザー、太陽電池などに応用され、その重要性が認識されていますが、私が佐々木先生のご指導を受けていた昭和50年頃は電子計算機、無線通信等が脚光を浴び、光科学の研究環境は未熟で、大変苦勞の多い時代であったと思います。しかし、佐々木先生は、我々学生に不満など漏らさず、光の将来性・可能性や自前の研究ビジョンを熱く語るなど若き研究者としての一面と、自宅から持参された素麺や西瓜を差し入れしてくれるなど優しい兄貴といった一面とを持ち合わせ、豊かな人間性を見せてくださいました。卒業後も機会を見つけては研究室に足を運び、近況を興味深く拝聴しましたが、話の内容は年々難解になり、既に私の理解レベルを超えておりました。しかし、唯一この分野の先駆者としての自信と輝かしい研究成果により、光の時代の到来を理解させるには十分でした。

そんな折りの平成6年6月、佐々木先生と千歳市の大学設置構想との出会いは、今思うに運命的なものを感じざるをえません。佐々木先生が将来の夢として温めてきたプランを実現できる機会到来であり、今まで培ってきた知識・研究成果、大切に育んできた人間関係、思いなど凝縮されていたことなどがビッグバンの如く短時間に解放されたからです。世界中の仲間からの「ワンダフル」との絶賛を受け、多数の招待講演・共同研究依頼、はたまた先生を頼って訪れる海外研究者など佐々木先生の人徳と人望が発揮されました。

しかし、運命とは何と残酷なものでしょうか。平成10年3月頃から体調を崩され、慶應義塾大学病院に入院し、治療に励み始めましたが、効果が見込めずかえって副作用で体力を弱めるとのことで治療を断念し5月初旬には奥様の絶大な協力の下、千歳に転居されました。爽やかな北海道の季節の中で、自分で悟られた残り時間を希望に燃えた学生との触れ合いや共に力を合わせて来た仲間と一緒に大学の運営を軌道に乗せること、研究指導や産学連携の研究体制構築にあてるなど最後まで現役で活躍されることを心に決めたからです。人一倍の責任感から病気を周りの仲間に悟られないよう、気丈に振る舞い7月24日の市民講座では20分もの講演をされました。しかし9月初旬になると体力低下が顕著となり、延命効果を求めてやむなく東京の病院へ転院することになりました。

ここでも、単なる病人でなく「ニューコンセプト千歳科学技術大学設立」と題した本の出版をしたいと意欲を見せ、自筆で目次を書かれておられました。更に10月3日には12日から千歳で開催される国際会議への出席の一念から辛い治療に耐え、一時はベッドサイドに座れるほどの回復が見られました。その後安定した状態の中、4日午後8時に容態が急変し医師の懸命なる処置にも関わらず佐々木門下生の吉田、長江、笹田及び私の到着を待っていたかのように

ほぼ同時に静かに息を引き取られました。振り返れば、自分の死を覚悟されて病気と戦い続けたこの5ヶ月間の佐々木先生の心痛は察するに余り有ります。又、常に佐々木先生の傍らで片時も離れず看護された奥様、不安な毎日を送られた佐々木先生ご夫妻を親身になり力付けられた坂本専務理事には強く敬意を表します。

旧約聖書の創世記の一日目に、「神は‘光あれ’と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。」と記されております。これと佐々木先生が常日頃我々に「森羅万象は光で説明できる」とおっしゃられていたことが、頭の中で交差し共通感を受けます。願わくばこの千歳科学技術大学が佐々木先生が理念とされた「人知還流・人格陶冶」の元、北海道、日本の発展に寄与する有為な人材・企業を多数輩出し、光り輝くことを祈念すると共に、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

6. 思い出のスナップ写真



H7.5.19 現場に建てられたやぐらにて



H8.3.26 教員候補者説明会にて



H8.11.1 登別温泉にて



H8.12.2 建設工事起工式にて



H9.10.2 文部省による実地調査にて



H9.12.7 教員予定者説明会にて



H10.4.11 入学式にて



H10.4.11 学長室にて

第4編 10年間の主な記録

1. 市民公開講座	68
2. 千歳光科学国際フォーラム	69
3. 佐々木記念賞	70
4. 学生表彰	72
5. 学生団体	73
6. 学生活動の履歴	74
7. 大学祭（稜輝祭）	76



1. 市民公開講座

本学では、「地域に開かれた大学」の理念を具現化するために、千歳市と共同主催で「市民公開講座」を実施しており、教員が市民に向けて研究成果をやさしく解説する機会を設けている。会場は本学での講演が主であるが、地域に出向いての実施もしている。

第1回の講座は、辻岡昭理事長、佐々木敬介学長、川合敏雄学部長による講演が行われた。

市民公開講座の内容

年度	実 施 内 容 (テーマ)	講 師	実施日
10	大学教育と千歳科学技術大学の役割 光技術の変遷と将来展望 自然と計算	理事長 辻 岡 昭 学 長 佐々木 敬 介 教 授 川 合 敏 雄	7月24日
12	味噌汁とワインから学んだ科学 紫色はなぜ尊い？（光と古代信仰・宇宙観） プラスチックTVはできるか？ IT時代の地域情報化（ITで千歳が変わる） 光とカラー：顔を探している	助教授 Olaf Karthaus 助教授 王 建 康 教 授 雀 部 博 之 助教授 小松川 浩 助教授 johnathon john	1月23日
13	光で物質を作る 電話の仕組みから光ファイバー通信まで 光るDNA（高分子化合物）の話 ITと光産業 新しい平面テレビの話	教 授 花 村 榮 一 教 授 川 瀬 正 明 教 授 緒 方 直 哉 教 授 小 林 壮 一 助教授 安 達 千波矢	1月22日 1月29日 2月 5日 2月19日 2月26日
14	光とDNA テレビの作られ方と正しい見方 日本語に生きている大陸文化 — 日中の言語文化交流 — 千歳と神仙思想 — 日中の思想文化交流 — 古代宗教思想は科学の原点なり — 中国土着宗教 — 道教と科学技術 — 光って何者？ — 光は真っ直ぐ進む — — 色の正体 —	名誉教授 緒 方 直 哉 助教授 碓 井 広 義 助教授 王 建 康 助教授 王 建 康 助教授 王 建 康 教 授 石 田 宏 司	10月 6日 1月25日 2月 1日 2月 8日 2月15日 2月22日
15	情報技術が教育に寄与できるか — E-learning の取組み — ワープロ・表計算ソフトの活用 — (PC マエストロ紹介 ワード編) — — (PC マエストロ紹介 エクセル編) —	助教授 小松川 浩 講 師 高 岡 詠 子	2月21日 2月28日 3月 6日
16	現代的教育ニーズ取組支援プログラムと光実験	教 授 石 田 宏 司	3月30日
17	光で癌を見つけ、退治しよう 人体小宇宙・気・医	講 師 李 黎 明 助教授 王 建 康	3月 4日
19	ドイツ人から見た日本の教育・研究 身の回りのデジタルとブロードバンド	教 授 Olaf Karthaus 教 授 川 瀬 正 明	3月22日

2. 千歳光科学国際フォーラム (CIF ; Chitose International Forum)

第1回千歳光科学国際フォーラム (参加者108名)

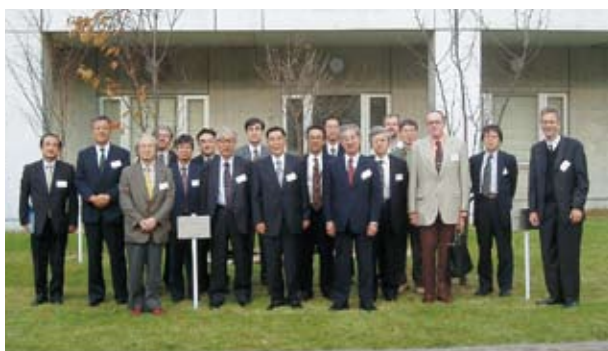
第2回千歳光科学国際フォーラム (参加者250名)



第3回千歳光科学国際フォーラム (参加者92名)



第4回千歳光科学国際フォーラム (参加者84名)



第5回千歳光科学国際フォーラム (参加者72名)



第6回千歳光科学国際フォーラム (参加者70名)



第7回千歳光科学国際フォーラム (参加者146名)



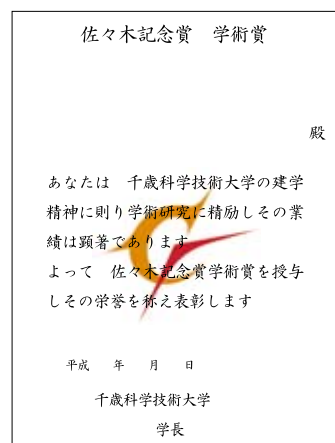
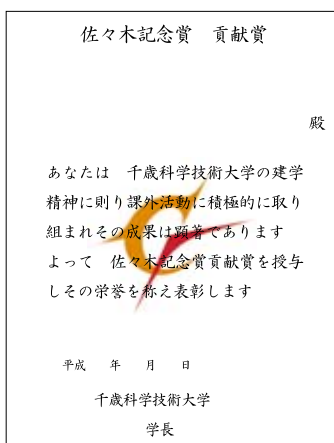
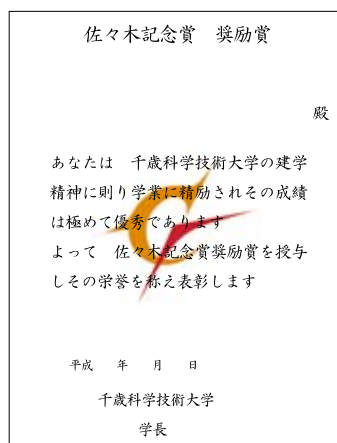
第8回千歳光科学国際フォーラム (参加者120名)



3. 佐々木記念賞

本学の建学の精神に則り、学業学術に精励し、学内外の各種活動に積極的に参加し、それぞれ顕著な業績、功績のあった本学の学生および大学院生を表彰するもので、本学の創設に深く携わり初代学長となられた故佐々木敬介教授の教育研究にかけた情熱と学生への温かい思いやりの心を永く記憶にとどめるために平成11年度に制定した。

「奨励賞」は、2、3年生のうち学業成績優秀な者、「貢献賞」は、全在学生のうちクラブ活動または学外活動等において功績があった者、また「学術賞」は大学院生のうち学術・研究に関して成績優秀、または顕著な業績があった者に表彰している。



平成11年10月12日 第1回 佐々木記念賞授与

学術奨励賞 高橋 寛明さん (物質光科学科2年)
石岡 妃沙さん (光応用システム学科2年)

平成12年10月 5日 第2回 佐々木記念賞授与

学術奨励賞 安藤美和子さん (物質光科学科2年)
伊川 英男さん (光応用システム学科2年)

平成13年10月 5日 第3回 佐々木記念賞授与

学術奨励賞 四十物孝憲さん (物質光科学科2年)
土谷麻依子さん (光応用システム学科2年)



平成14年10月 7日 第4回 佐々木記念賞授与

奨 励 賞 平田 智子さん (物質光科学科3年)
知場 大記さん (光応用システム学科3年)
貢 献 賞 村岡 利晴さん (物質光科学科4年)
五十嵐一哉さん (光応用システム学科4年)
学 術 賞 小山田崇人さん (光科学研究科光科学専攻 修士1年)
杉山 秀則さん (光科学研究科光科学専攻 修士1年)

平成15年10月 6日 第5回 佐々木記念賞授与

- 奨励賞 中野谷 一さん (物質光科学科3年)
横井 伸浩さん (光応用システム学科3年)
貢献賞 学生会執行委員会
本郷 順一さん (光応用システム学科4年)
学術賞 合志 憲一さん (光科学研究科光科学専攻 修士2年)
堀内 大嗣さん (光科学研究科光科学専攻 修士2年)

平成16年10月 5日 第6回 佐々木記念賞授与



- 奨励賞 田中 敏博さん (物質光科学科3年)
石田 朝千さん (光応用システム学科3年)
貢献賞 伊藤 大志さん (弓道部)
バスケットボール部
学術賞 澤田 昌幸さん
(光科学研究科光科学専攻 博士前期課程1年)
江口 薫さん
(光科学研究科光科学専攻 博士前期課程2年)

平成17年10月 5日 第7回 佐々木記念賞授与

- 奨励賞 泉 和宏さん (物質光科学科3年)
正木 正嗣さん (光応用システム学科3年)
貢献賞 辻 直也さん (光応用システム学科2年)
弓道部
学術賞 中井 直也さん
(光科学研究科光科学専攻 博士前期課程2年)

平成18年10月 5日 第8回 佐々木記念賞授与

- 奨励賞 田中 俊輔さん (物質光科学科3年)
佐藤加那子さん (物質光科学科3年)
石川 智也さん (光応用システム学科3年)
貢献賞 大河内佑貴さん (弓道部)
学術賞 宮田憲太郎さん (光科学研究科 博士前期課程2年)

平成19年10月 9日 第9回 佐々木記念賞授与

- 奨励賞 岡田 孟矩さん (物質光科学科3年)
福田 智之さん (物質光科学科3年)
貢献賞 佐藤加那子さん (文芸部)
理工工房
学術賞 西出 順一さん (光科学研究科 博士後期課程3年)
松原 悠平さん (光科学研究科 博士前期課程1年)

4. 学生表彰

平成18年度より、本学を卒業する学生を対象に、「優良賞」および「善行賞」の『学生表彰制度』を創設した。

この制度は在学期間を通しての成績や活動に対して表彰するもので、成績、人物、健康とも優れた学生に対する「優秀賞」と、学内活動における功績があった学生に対する「善行賞」があり、受賞者には、学位記授与式において賞状と副賞が授与される。

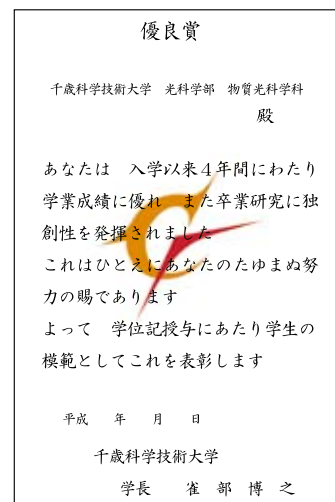
平成18年度受賞者

<優良賞>

泉 和宏さん	(物質光科学科4年)
歌川馨太郎さん	(物質光科学科4年)
坂本 亮也さん	(光応用システム学科4年)
佐藤 卓さん	(光応用システム学科4年)
冨田 量宏さん	(光応用システム学科4年)
布施 舞さん	(物質光科学科4年)

<善行賞>

該当者なし



平成19年度受賞者

<優良賞>

佐藤加那子さん	(物質光科学科4年)
田中 俊輔さん	(物質光科学科4年)
石川 智也さん	(光応用システム学科4年)
石橋 克也さん	(光応用システム学科4年)

<善行賞>

秋山 慶造さん	(光応用システム学科4年)
---------	---------------



5. 学生団体

開学間もない頃から学生の間では、体育系や文化系においてクラブ・同好会などの学生団体（サークル）が次々に結成された。学生団体は、本学教員に指導教員（顧問）を依頼し、「学生団体結成願」を学生課に提出したうえで、学生会執行委員会の認可を得て活動を開始している。

学生団体数は開学以来、消長がみられるが、現在体育系・文化系に所属している団体は次表のとおりとなっている。（平成19年6月現在）

体 育 系

団 体 名	人数	団 体 名	人数
サッカー部	13	バスケットボール部	22
バレーボール部	11	バドミントン部	11
硬式テニス部	27	弓道部	16
フットサル部	19	大東流無傳塾合気柔術部	8
Y O S A K O I ソーラン部	17		

文 化 系

団 体 名	人数	団 体 名	人数
文芸部	12	軽音楽部	19

サークル

団 体 名	人数	団 体 名	人数
ストリートダンスサークル	7	麻雀サークル	4
卓球サークル	6	天文サークル	7
空手サークル	8	理工工房	12
Ski & Fun Ski サークル	13	いべんとサークル	22
スポーツチャンバラサークル	2	ソフトボールサークル	15
手品サークル	5	航空研究会	9
美術文学サークル	6	野球超人会	19
陸上競技サークル	1	都山流尺八サークル	3
だーつサークル	11	アーチェリーサークル	2
株式学習サークル	4	アカペラサークル	15
社会サークル	3		

【学生会】

学校側の連絡事項などを各クラスに伝える、いわゆる大学と学生の橋渡し役として当初は4クラスから1名ずつ選出され学生連絡会が発足したのが学生会の始まりで、1期生で先輩もいない中での活動には色々と紆余曲折があったものの、平成11年1月に学生会の運営事務局として学生会執行委員会が発足したのを契機に活動が開始された。

活動内容は、大学と学生の橋渡し役の他、体育系や文化系の部活動に対しての予算配分や学内清掃があり、平成12年度になり大学祭（稜輝祭）実行委員会の発足を期に第1回稜輝祭が開催された。その後、平成13年度に卒業記念事業委員会による謝恩会が第1回学位記授与式当日に開催され、同じ日に本学の同窓会が設立され総会が開催された。

学生会執行委員会	3名	稜輝祭実行委員会	15名
----------	----	----------	-----

6. 学生活動の履歴

平成11年 5月	弓道部設立	
平成13年 1月	第48回北海道地区大学体育大会	陸上競技部（砲丸投げの部優勝）
7月	ソーラーカーチャレンジイン北海道2001	ソーラーカー部（Bクラス準優勝）
8月	第3回全日本学生ソーラーカーチャンピオンシップ	ソーラーカー部 （ハーフサイズカテゴリークラス6位入賞）
9月	千歳民報社杯サッカー大会 札幌学生野球秋季リーグ戦 千歳体育の日記念バレーボール大会	サッカー部（優勝） 公式野球部（Ⅲ部リーグ4位） バレーボール部（準優勝）
12月	千歳地区秋季サッカー大会 NHK総合テレビ「金曜ひろば640」に出演	サッカー部（優勝） ソーラーカー部
平成14年 4月	公認団体として「水泳部」「囲碁部」が認められる。	（文化団体6団体・体育団体9団体となる。）
6月	千歳地区硬式テニス大会	テニス部 横尾昌法・五十嵐尚紀組（ダブルスB級準優勝）
7月	札幌学生テニスリーグ戦 第49回北海道地区大学体育大会 硬式野球部・バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・弓道部	テニス部
9月	第4回全日本学生ソーラーカーチャンピオンシップ 札幌学生野球秋季リーグ戦	ソーラーカー部 硬式野球部 本多順一・首位打者賞/年間首位打者賞受賞
	札幌学生バスケットボールリーグ戦	バスケットボール部Ⅳ部優勝（Ⅲ部リーグに昇格）
平成15年 6月	千歳地区サッカーリーグ戦 千歳地区硬式テニス春季大会	サッカー部（優勝） テニス部
7月	北海道学生弓道選手権大会 第50回北海道地区大学体育大会 硬式野球部・バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・弓道部	秋穂 満さん（シングルス優勝） 弓道部 伊藤大志さん（個人戦3位）
9月	北海道バドミントン秋季リーグ戦 千歳地区秋季選手権サッカー大会 全日本フットサル選手権北海道地域大会千歳地区選手権大会	バドミントン部（Ⅲ部昇格） サッカー部（優勝） フットサル愛好会（準優勝）
10月	ソーラーカーチャレンジイン北海道2003 千歳神社秋季例大祭「献花」 第49回北海道学生弓道女子争覇戦	ソーラーカー部（「訓子府町賞」受賞） 文芸部（華道の部） 弓道部 Ⅳ部リーグ団体優勝（Ⅲ部リーグに昇格）
11月	社団法人「小さな親切」運動本部から全国庶民賞「小さな親切実行賞」受賞 北海道学生弓道選手権大会合同新人戦	キラキラサークル（「千歳からはじまる北海道千歳エアポート花ロード36」等の地道な活動に対する活動評価） 弓道部（男子団体戦3位） 伊藤大志さん（個人戦4位）
平成16年 2月	千歳市社会福祉協議会創立50周年記念特別表彰「奨励賞」受賞 支笏湖まつり実行委員会「感謝状」受賞	ボランティアサークル
7月	第51回北海道地区大学体育大会 硬式野球部・バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・弓道部	ボランティアサークル バスケットボール部（3位）

10月	第50回北海道学生弓道争覇戦	男子弓道部 Ⅲ部リーグ優勝（Ⅱ部リーグに昇格） 女子弓道部 Ⅳ部リーグ優勝（Ⅲ部リーグに昇格） 伊藤大志さん 個人戦優勝及び射道優勝賞受賞 桃野裕介さん皆中賞を受賞
12月	第3回千歳地区フットサルリーグ大会	フットサル部・優勝 サッカー部・準優勝
平成17年 1月	千歳・支笏湖水涛まつりに協力参加	ボランティアサークル
2月	平成17年度全国書初作品大会入賞	文芸部 佐藤加那子さん入賞
7月	第52回北海道地区大学体育大会	バスケットボール部（ベスト8位）
	バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・弓道部	
平成18年 4月	北海道バドミントン春季リーグ戦大会	男子4部リーグ戦 Bブロック4位
6月	YOSAKOIソーラン祭	YOSAKOIソーラン部「光一天」出場
7月	第53回北海道地区大学体育大会	
	バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・弓道部	
9月	北海道バドミントン秋季リーグ戦大会	男子4部リーグ戦 Bブロック4位
10月	第52回全道学生弓道争覇戦	男子弓道部 Ⅱ部リーグ戦 加藤 浩志さん 射道優勝賞及び皆中賞受賞 大河内佑貴さん 皆中賞を受賞
		個人決勝戦進出 大河内佑貴さん・斉藤雅文さん
11月	全道学生弓道新人戦	
	全日本フットサル選手権	フットサル部（千歳地区予選 準優勝）
	千歳地区フットサルリーグ戦	フットサル部（3位）
平成19年 2月	全書芸 全国書初作品大会	佐藤加那子さん（特選賞受賞）
4月	北海道バドミントン春季リーグ戦大会	男子4部リーグ戦 Bブロック3位
	北海道大学バレーボールリーグ（春季大会）	男子6部 Bブロック2位
6月	YOSAKOIソーラン祭	YOSAKOIソーラン部「敢闘賞」
	札幌学生テニスリーグ戦（硬式テニス）	男子テニス部 6部リーグ ブロック3位
7月	第53回北海道地区大学体育大会	男子弓道部 団体4位
	バレーボール部・バスケットボール部・サッカー部・バドミントン部・弓道部	
	2007スカイ・ピア&YOSAKOI祭千歳トーナメント戦	YOSAKOIソーラン部ベスト16
	YOSAKOIソーラン空知支部大会	YOSAKOIソーラン部準大賞
9月	北海道バドミントン秋季リーグ戦大会	男子4部リーグ戦 Bブロック3位
	NHK-FMフレッシュサウンド北海道「FM大学LIVEバトル!2」出演	軽音楽部
10月	夕張もみじ祭出演	YOSAKOIソーラン部
	北海道大学バレーボールリーグ（秋季大会）	男子6部 Bブロック2位
平成20年 2月	旭川冬祭出演	YOSAKOIソーラン部

【資料提供：学生課】

7. 大学祭（稜輝祭）

【発 足】

本学の大学祭は、学生の有志が「大学祭を開催する実行委員会」を組織して学生に呼びかけたことから開学2年目の平成11年10月に第1回の大学祭が開催された。実行委員会は15人の学生で立ち上げ、春先から初の大学祭の開催に向けて準備をすすめる一方、学生へのアンケートなどをもとに大学祭のタイトルは「稜輝祭」と命名された。「稜」とは、「多面体の面をなす多角形の辺のこと。」つまり、様々な個性をもつ人の集まりである大学、「その辺をなす学生の一人ひとりが輝ける大学祭でありたい」という願いから命名されている。初の稜輝祭は、2日間にわたり開催され、「フリーマーケット」「模擬店」「ライブ」が行なわれ、合わせて、市民の方にレーザー光や光ファイバーなどのさまざまな装置や実験に触れてもらうオープンキャンパスや本学緒方学長と雀部学科長を講師とした「市民講座」も開催され多くの市民の方が本学を訪れている。

【大学祭のテーマ】

年度	開 催 日	テ ー マ
平成11年度	平成11年10月 2日～ 3日	Create a new sensation (旋風を巻き起こす)
平成12年度	平成12年 9月23日～24日	Bless my soul (魂の鼓動)
平成13年度	平成13年 9月22日～23日	全員集合！！
平成14年度	平成14年 9月21日～22日	真輝一点 (～ Dream Lights ～)
平成15年度	平成15年10月11日～12日	意気軒昂
平成16年度	平成16年 9月18日～19日	新装開店
平成17年度	平成17年10月 8日～ 9日	送りバント (～未来に送る千歳の光～)
平成18年度	平成18年 9月23日	燃年祭歳 (～ねんねんさいさい～)
平成19年度	平成19年 9月23日	自遊自在





第1回 稜輝祭



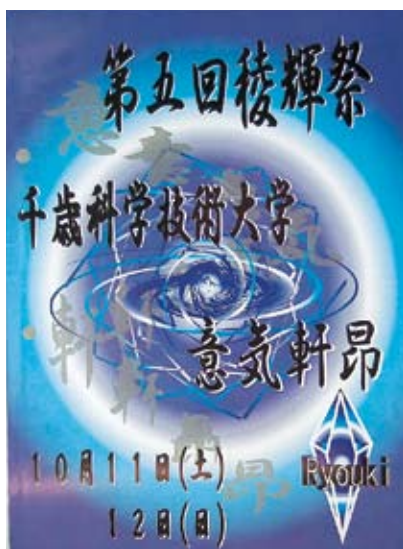
第2回 稜輝祭



第3回 稜輝祭



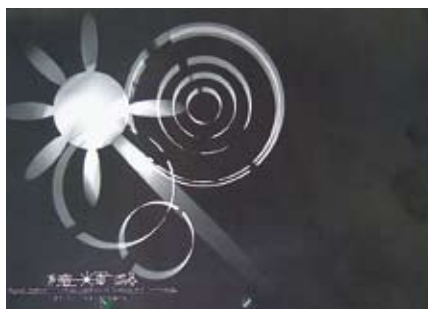
第4回 稜輝祭



第5回 稜輝祭



第6回 稜輝祭



第7回 稜輝祭



第8回 稜輝祭



第9回 稜輝祭

資 料 編

1. 歴代役付教職員一覧	80
2. 歴代役員名簿	81
3. 歴代評議員名簿	82
4. 歴任教員名簿	84
5. 歴代事務職員名簿	86
6. 組織図	88
7. 教職員写真	90
8. 第1回市民公開講座より	
①大学教育と千歳科学技術大学の役割 辻岡 昭	92
②光技術の変遷と将来展望 佐々木敬介	98
③自然と計算 川合 敏雄	102
9. 千歳科学技術大学における光教育	106
10. 表彰（外部表彰・教育研究貢献賞）	108
11. 奨学金受給状況	110
12. 進路状況	111
13. 創立10周年記念事業	112
14. 校章・校旗・校歌	114
巻末 略年表	115

付 録

10周年記念募金者芳名録	124
D V D版目次	127

1. 歴代役付教職員一覧

(平成20年4月1日現在)

役 職 名	氏 名	自	至
理事長	辻岡 昭	平成 9年12月25日	～ 平成17年 8月31日
	小谷津孝明	平成17年 9月 1日	～ 現在
学 長	佐々木敬介	平成10年 4月 1日	～ 平成10年10月 5日
	緒方 直哉	平成10年11月 4日	～ 平成14年 3月31日
	雀部 博之	平成14年 4月 1日	～ 現在
学部長	川合 敏雄	平成10年 4月 1日	～ 平成14年 3月31日
	三戸 慶一	平成14年 4月 1日	～ 平成18年 3月31日
	浜中 宏一	平成18年 4月 1日	～ 平成20年 3月31日
	川瀬 正明	平成20年 4月 1日	～ 現在
研究科長	雀部 博之	平成14年 4月 1日	～ 平成16年 3月31日
	加藤 洸	平成16年 4月 1日	～ 平成18年 3月31日
	川瀬 正明	平成18年 4月 1日	～ 平成20年 3月31日
	石田 宏司	平成20年 4月 1日	～ 現在
基礎教育主任	門倉 弘枝	平成10年 4月11日	～ 平成12年 9月30日
	johnathon john	平成14年 4月 1日	～ 平成18年 3月31日
	浜中 宏一	平成18年 4月 1日	～ 平成19年 3月31日
	山中 明生	平成19年 4月 1日	～ 現在
物質光科学科主任	緒方 直哉	平成10年 4月11日	～ 平成11年 3月31日
	雀部 博之	平成11年 4月 8日	～ 平成14年 3月31日
	石田 宏司	平成14年 4月 1日	～ 平成20年 3月31日
	川辺 豊	平成20年 4月 1日	～ 現在
バイオ・マテリアル学科主任	川辺 豊	平成20年 4月 1日	～ 現在
光応用システム学科主任	三戸 慶一	平成10年 4月11日	～ 平成14年 3月31日
	浜中 宏一	平成14年 4月 1日	～ 平成18年 3月31日
	小林 壮一	平成18年 4月 1日	～ 現在
光システム学科主任	小林 壮一	平成20年 4月 1日	～ 現在
グローバルシステムデザイン学科主任	吉田 淳一	平成20年 4月 1日	～ 現在
学生総合センター長	宮本 博文	平成12年 4月 1日	～ 平成14年 3月31日
	池田 弘治	平成14年 4月 1日	～ 平成16年 3月31日
	川瀬 正明	平成16年 4月 1日	～ 平成20年 3月31日
	角田 敦	平成20年 4月 1日	～ 現在
大学情報センター長	小林 壮一	平成12年 4月 1日	～ 平成18年 3月31日
情報・メディア教育センター長 (H19.4.1改組)	小松川 浩	平成18年 4月 1日	～ 現在
図書館長	川辺 豊	平成19年 4月 1日	～ 現在
広報センター長	碓井 広義	平成19年 4月 1日	～ 平成20年 3月31日
	小松川 浩	平成20年 4月 1日	～ 現在
学習指導主任	三戸 慶一	平成10年 4月11日	～ 平成14年 3月31日
	児玉 邦彦	平成14年 4月 1日	～ 平成17年 2月10日
	山中 明生	平成17年 4月 1日	～ 現在
学生部主任	宮本 博文	平成10年 4月11日	～ 平成14年 3月31日
	池田 弘治	平成14年 4月 1日	～ 平成16年 3月31日
	山中 明生	平成16年 4月 1日	～ 平成17年 3月31日
	碓井 広義	平成17年 4月 1日	～ 平成19年3月31日
	山林 由明	平成19年 4月 1日	～ 現在
就職部主任	川瀬 正明	平成11年 7月 1日	～ 平成18年 3月31日
	角田 敦	平成18年 4月 1日	～ 現在
入試部主任	石田 宏司	平成14年 4月 1日	～ 平成16年 3月31日
	川辺 豊	平成16年 4月 1日	～ 平成19年 3月31日
	石田 宏司	平成19年 4月 1日	～ 現在
専務理事	坂本 捷男	平成 9年12月25日	～ 平成12年 3月31日
	松岡 信之	平成12年 4月 7日	～ 平成15年 5月10日
	鈴木 修	平成16年 4月 1日	～ 現在
事務局長	坂本 捷男	平成10年 4月 1日	～ 平成12年 3月31日
	渡辺 信幸	平成12年 4月 1日	～ 平成15年11月30日
	宮澤 和典	平成15年12月 1日	～ 平成16年12月31日
	長谷川 豊	平成17年 1月 1日	～ 平成18年 3月31日
	菅原 敏	平成18年 4月 1日	～ 現在

2. 歴代役員名簿

学校法人 千歳科学技術大学 役員・監事名簿											
	H9年度	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
辻岡 昭	初代理事長										
坂本 捷男	理事										
佐々木敬介	理事・初代学長										
我孫子健一	理事										
伊澤 達夫	理事										
内海 孚	理事										
川合 敏雄	理事										
川手 士郎	理事										
永利 久志	理事										
東川 孝	理事										
緒方 直哉		理事・第2代学長									
松岡 信之			理事								
佐室 有志					理事						
雀部 博之						理事・第3代学長					
小谷津孝明						理事		第2代理事長			
三戸 慶一						理事					
山口幸太郎							理事				
岡 正則							理事				
鈴木 修								理事			
田島 卓也									理事		
小糸 彰									理事		
斎藤 信男									理事		
高橋 直也										理事	
浜中 宏一										理事	
川瀬 正明										理事	
市川 昭司											理事
木村 良臣	監事										
我妻 廣繁	監事										
山澤 充雄		監事									
檜森 聖一				監事							

3. 歴代評議員名簿

学校法人 千歳科学技術大学 評議員名簿											
	H9年度	H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
佐々木敬介	評議員										
緒方 直哉	評議員										
川合 敏雄	評議員										
三戸 慶一	評議員										
門倉 弘枝	評議員										
坂本 捷男	評議員										
秋馬 謙一	評議員										
小谷津孝明	評議員										
東川 孝	評議員										
我孫子健一	評議員										
荒牧 光良	評議員										
大川 實	評議員										
松倉 浩司	評議員										
正木 宏生	評議員					評議員					
國枝 良吉	評議員										
後藤 三郎	評議員										
内海 孚	評議員										
高梨 裕文	評議員										
廣重 力	評議員										
山口 義人	評議員										
辻岡 昭	評議員										
柴田 稔久	評議員										
雀部 博之		評議員									
灘本 正博		評議員									
八木 真介		評議員									
松岡 信之			評議員								
花村 榮一				評議員							
石田 宏司						評議員					
佐々木勝利						評議員					
浜中 宏一						評議員					
佐々木正丞						評議員					
鈴木 修								評議員			
山口幸太郎								評議員			

学校法人 千歳科学技術大学 評議員名簿											
H9年度		H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
1997年		1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
熊谷 直孝							評議員				
富永 基							評議員				
加藤 洸							評議員				
松田 信行							評議員				
牧野 哲也								評議員			
夏井 健一								評議員			
矢島 泰司								評議員			
加藤 渥								評議員			
足立 憲三									評議員		
伊藤 隆一									評議員		
塚越 久光									評議員		
斎藤 信男									評議員		
赤羽 正雄									評議員		
福井 素子									評議員		
金澤 広司									評議員		
小林 壮一									評議員		
小松川 浩									評議員		
川瀬 正明									評議員		
加茂 孝之									評議員		
三ツ野 仁										評議員	
小谷 泰久											評議員
渋谷 隆夫											評議員
大月 康正											評議員

4. 歴任教員名簿

	担当学科	学校法人 千歳科学技術大学 教員名簿									
		H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
		1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
佐々木敬介	物質光科学科	教授・学長									
川合 敏雄	光応用システム学科	教授・学部長									
緒方 直哉	物質光科学科	教授 学長									
三戸 慶一	光応用システム学科	教授				学部長				特任教授	
石田 宏司	物質光科学科	教授									
宮本 博文	光応用システム学科	助教授	教授						特任教授		
門倉 弘枝	物質光科学科	助教授									
johnathon john	物質光科学科	助教授									准教授
張 公儉	光応用システム学科	助教授									准教授
川辺 豊	物質光科学科	助教授					教授				
江口 真史	光応用システム学科	助教授									准教授
谷尾 宣久	物質光科学科	専任講師						助教授			准教授
小松川 浩	光応用システム学科	専任講師		助教授							教授
福田 誠	光応用システム学科	助手				専任講師		助教授			准教授
高岡 詠子	光応用システム学科	助手		専任講師							准教授
堀之内 英	物質光科学科	助手		専任講師							
宮崎 榮三	物質光科学科	教授									
浜中 宏一	光応用システム学科	教授								学部長	
芦高 秀知	物質光科学科	教授									
加藤 洵	物質光科学科	教授						研究科長			
川瀬 正明	光応用システム学科	教授								研究科長	
児玉 邦彦	光応用システム学科	教授									
雀部 博之	物質光科学科	教授				研究科長・学長	学長				
吉田 淳一	光応用システム学科	教授									
今井 敏郎	物質光科学科	助教授									教授
王 建康	物質光科学科	助教授									准教授
山中 明生	物質光科学科	助教授					教授				
小川 正浩	物質光科学科	専任講師									
小田 尚樹	光応用システム学科	助手		専任講師							准教授
李 黎明	物質光科学科	助手					専任講師				准教授
池田 弘治	物質光科学科		教授						特任教授		
花村 榮一	物質光科学科		教授								

	担当学科	学校法人 千歳科学技術大学 教員名簿									
		H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
		1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
角田 敦	物質光科学科			教授							
小林 壮一	光応用システム学科			教授							
Olaf Karthaus	物質光科学科			助教授						教授	
安達千波矢	物質光科学科				助教授			教授			
唐澤 直樹	光応用システム学科				助教授						准教授
長谷川 誠	光応用システム学科				専任講師				助教授		准教授
Randy L.Evans	物質光科学科				専任講師						
碓井 広義	光応用システム学科					助教授				教授	
寺本 敬	物質光科学科							専任講師			
林 康弘	光応用システム学科							助手			助教
小田 久哉	物質光科学科								実験助手	助手	助教
山林 由明	光応用システム学科									教授	
坂井 賢一	物質光科学科									専任講師	
今井 順一	光応用システム学科										専任講師

* 平成19年4月1日より「助教授」は「准教授」に職が変更になりました。

* 平成19年4月1日より「助教」が新設されました。

吉田 淳一	客 員 教 授	——									
會沢 勝夫	客 員 教 授		——	——	——	——	——	——	——	——	——
井上 久遠	客 員 教 授			——	——	——	——	——	——	——	——
伊澤 達夫	客 員 教 授							——	——	——	——
安達千波矢	客 員 教 授								——	——	——
宮下 忠	客 員 教 授										——

氏 名		名誉教授認定日
緒方 直哉	名誉教授	平成14年4月17日
川合 敏雄	名誉教授	平成14年4月17日
三戸 慶一	名誉教授	平成19年5月28日

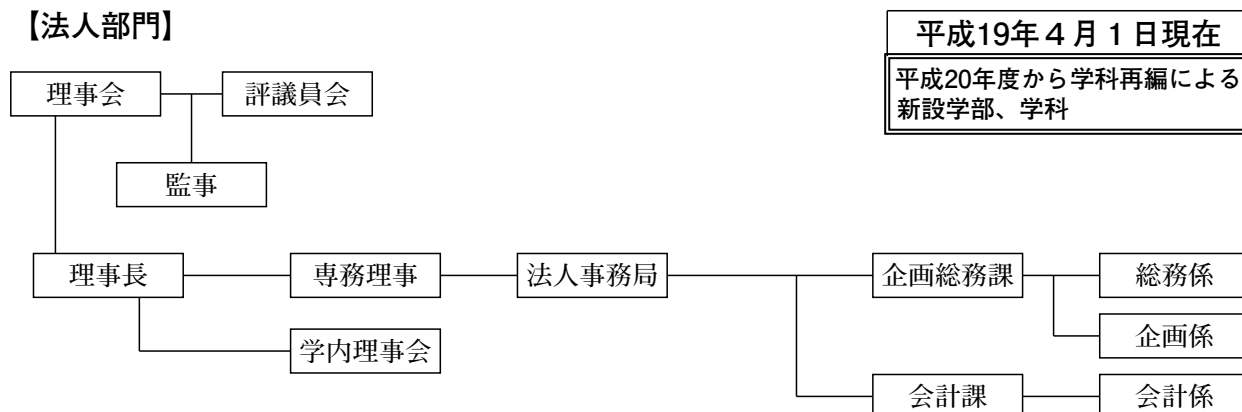
5. 歴代事務職員名簿

		学校法人 千歳科学技術大学 事務職員名簿														
		H10年度 1998年	H11年度 1999年	H12年度 2000年	H13年度 2001年	H14年度 2002年	H15年度 2003年	H16年度 2004年	H17年度 2005年	H18年度 2006年	H19年度 2007年					
坂本 捷男 渡辺 信幸 中野 朝子 松崎 正信 井手 剛 細貝 貴生 川端 忠則 島田 和明 喜多 英司 嶋崎 正嗣 白木 諭 佐藤 正 松村 俊司 福原 啓祐 餌取さやか 浅沼千佳子 前川 雄史 田中 絵美 波多野吾郎 岩田 健一 萩田 克美 千葉 志乃 泉 博 佐藤 透 佐々木尋美 仲俣 里美 長谷川 豊 佐々木 智 小島 一則 高橋 智男 工藤 峰男 松岡 信之 小林 俊晴 墓田 裕幸 金井 邦彦 丸山 則親	専務理事（兼事務局長）															
				事務局長												
				学生係長												
	総務係															
				入試広報係長		入試広報課長										
	教務係						教務係長									
	学生課長															
	財務係; 教務係			入試広報係												
	総務係長; 教務係長						学務課長					教務課長	研究推進課長			
	総務課長			企画総務課長												
	財務係長; 学生係長			総務係長												
	教務課長			入試広報課長												
	教務係長; 主査															
	教務係; 総務係						教務係		教務係長		企画総務係長		教務課長			
	総務係															
	教務係						入試広報係		会計係					教務係		
	学生係長; 会計係長			学生係長												
	学生係			教務係						学生係					教務係長	
	学生係			入試広報係						入試広報係長					企画係長	
	図書係; 財務係			会計係						会計係長		企画係長		入試広報係長		
	コンピュータ管理係			情報管理係												
	経理係			会計係			企画総務係			就職係長						
	会計課長			学務課長												
	図書課長（嘱託）															
	厚生係（嘱託）			学生係（嘱託）		学生係										
	図書係（嘱託）						図書係		教務係					メディア教育 推進係長		
				会計課長					事務局長							
				企画調整係長		総務係長										
				企画調整係		就職係		就職係長								
				情報管理課長（派遣）						情報管理課長					情報システム課長	
				情報管理係長（派遣）												
				専務理事												
				企画総務課長												
				企画総務係			研究係		学生係					図書係		
	学生課長															
	就職課長															

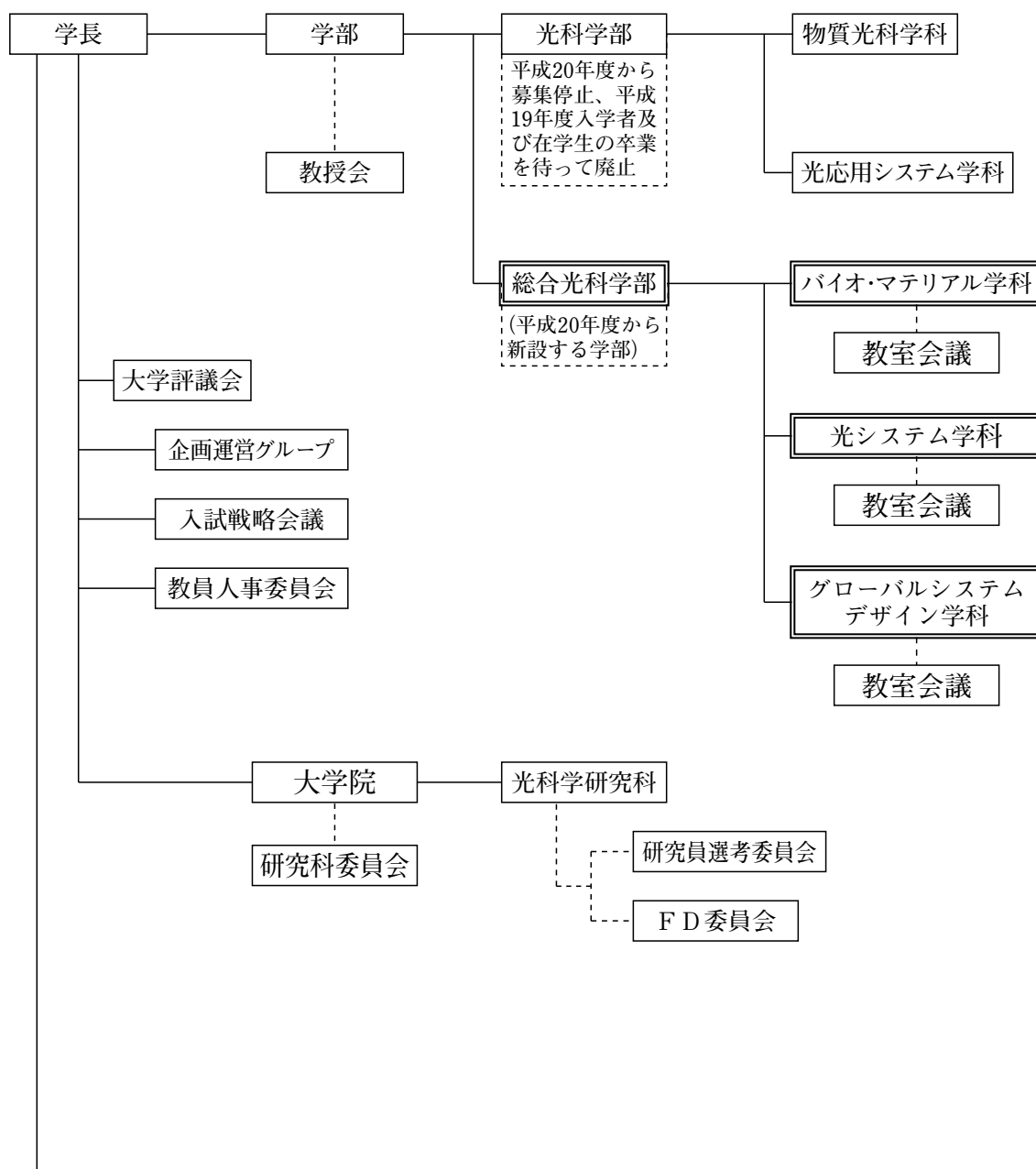
学校法人 千歳科学技術大学 事務職員名簿									
H10年度	H11年度	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度
1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
林 博樹 阿部記代士 伊藤 哲 大和 隆之 藤木健一郎 菊田 直哉 田口 大介 佐々木まゆみ 大沼友一郎 宮沢 和典 鈴木 修 桑島 洋志 庄司 明弘 近藤 聖子 松本あや子 井上 利夫 吉田 慎吾 木澤 光暢 山川 広人 河原木さやか 富樫 里美 伊藤 孝子 田中 恵 鳴海 重明 菅原 敏 石井 茂 高杉 雅史 大河内佳浩 金井 彩香 斉藤 裕巳 米澤 一弘 田中麻佐子 村上 深雪 齊藤 寛子 富樫 建太 倉島 毅 立野 仁			企画総務係長				教務係長	教務課長	
			情報管理係						
		入試広報係長(嘱託)	就職課長		図書係長				
				企画総務係					
				入試広報係					
				入試広報係			教務係		
				就職係					学生係
					学生課(嘱託)				
					学生課長(兼就職課長)	就職課長			研究推進課長
					事務局長				
					専務理事				
					企画総務課長				
					総務係				
					教務係				
					研究係			研究推進係	
						会計課長			
						総務係	入試広報係		
						情報管理係		入試広報係	
						情報管理係		メディア教育 推進係	
						入試広報係			
						学生係		学生係長	
						企画総務課(嘱託)			
						就職課(嘱託)			
						学生課長		学生課長(嘱託)	
						事務局長			
						企画総務課長			
						会計係	会計係長		
						主幹	入試広報課長		
						企画係	学生係		
						就職課長			
						情報管理係長	メディア教育 推進室長		
						会計課(嘱託)			
						学生課(嘱託)	企画総務課(嘱託)		
						図書係			
							研究推進係 就職係		
								総務係長	
								メディア教育 推進係	

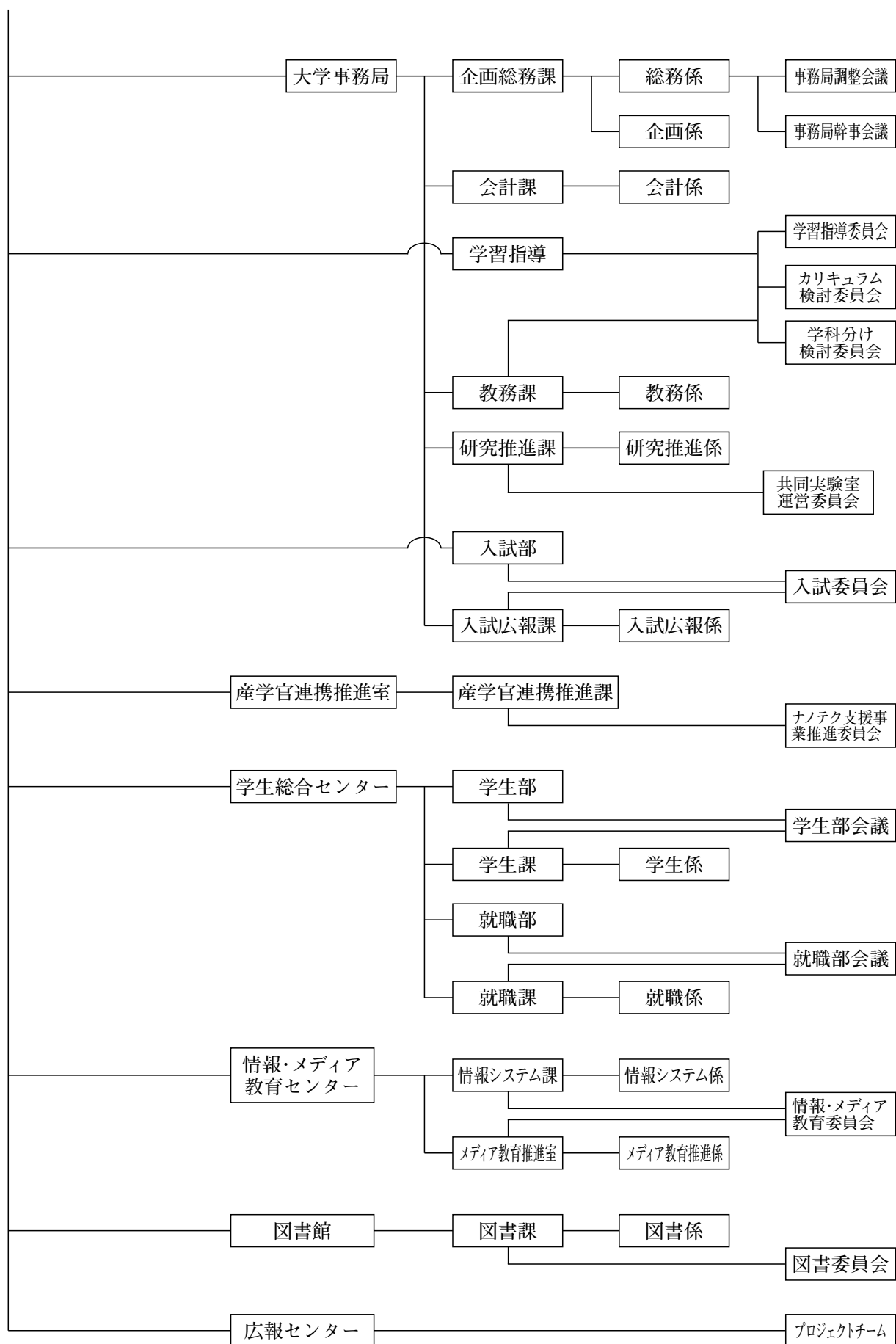
6. 組織図

【法人部門】



【大学部門】





7. 教職員写真



H12.1 仕 事 始 め



H16.1 仕 事 始 め



H20.3 教 育 職 員



H20.3 事 務 職 員

①大学教育と千歳科学技術大学の役割

ただいま紹介いただいた辻岡です。よろしくお願いします。

一番最初に話すので一番易しいことをしゃべります。だんだん難しくなると思います。

それから、ここにこういう良い装置があるのですけれども、私は大体ずぼらですから、何も書いてきていません。だから気楽にお聞きいただきたいと思います。だんだんこれをお使いになって、難しい話になると思います。気楽に聞いてほしいと思います。私も気楽に話します。

どこから話していいかわかりませんが、雑談からいきますと、先週、1週間位前に、これは千歳で読んだのですけれども、読売新聞の社会面を見ていました。そうしたら、東京都の猫の話が出ていました。猫が何匹いるかという、116万匹いるのだと。どうやって調べたのかわかりませんが、そのうち家の中で飼っているのはいくつかという、60万匹であったというのです。あと残りの56万匹は屋外で飼っていると。その中には野良猫も入っています。野良猫は11万匹だと。結局そういう屋外で飼っている猫が非常に悪さをしますので、苦情がたくさん出ています。どうにかしろと。そこら辺まではいいのですけれども、それに対する弁護が出ています。猫というのは人間と共生しているので、共生というのは一緒に住んでいる動物であって、犬と違うのだと。猫をつないでしまったらどうしようもないのだと。猫というのはわがままいっぱいなのだ。わがままだからいいのだというような話でした。

それを聞いていて、ああ、愉快だなというふうに、私なんかは野次馬ですから、思っていたのですけれども、要するに一番大事なのはそんなことではなくて、他人に迷惑をかけないという、今の世の中に限りません、他人に迷惑をかけないように飼うということが基本でしょう。日本でそういうことが今ごろ議論されているのは残念です。

よくよく考えてみますと、一番最初に我々が受けた義務教育、小学校教育ですね、あれがちょうど明治5年です。1872年かな、そのころに初めて義務教育制度というのを敷こうと、すぐ敷けたわけではありませんで、敷こうというのを決心までした。ちょうど明治維新で、日本の近代化を目指した時です。近代化をするにはいろいろな方法があります。けれども、その一番の元に教育というものを置きました。これは非常に先見の明があるし、そのために日本は今日、発展してきたのだと思いますけれども、その義務教育制度を敷くにあたって何をやるかといったら、一番最初に、要するに国民としてというよりも社会に出て守るべき心得みたいなこと、そういうものを教えるのが義務教育だとしています。ですからそのころからの教育がうまくいっていれば、ほかに迷惑をかけないで色々なことが行われているわけで、この頃になって色々な議論を見ていますと、この教育があまりうまくいかなかったと思います。ただ、読み書き、ソロバンと言いますね。これは世界で一番日本が進んでいます。その教育のやり方も進んでいます。全体に同じようなことを教えて、それで日本の全体の教育程度を上げたのです。

そのころ、ちょっと考えていただければいいのですけれども、日本は鎖国から覚めまして、要するに世界のことをあまり知りませんでした。だから色々なものが、科学にしても何にしても全部遅れていました。それをどうやって取り返そうかという、それが一番最初だったと思うのです。同時に、国としてはそのころはもちろん兵役がありますから、国民皆兵ですよ、だから軍備も十分なくてはならない。国としては道路もちゃんとなくてはならない、汽車は引かなくてはならない、そういう非常にお金がなくて大変なときに、教育にまず力を入れよう

と、小学校をたくさんつくり、先生を養成しました。そういうことをやっていったという、これは大変なことだろうと思います。

ただ、それができ上がりましたのが、ちょうど明治の19年頃にほぼ完成しました。明治19年というのは1886年です。小学校は何年、たしか、そのころはまだ4年だったと思いますけれども、教育を受けることが義務だというふうになりました。

これが日本の歴史ですけれども、同時に、もう一つ画期的なのは、明治19年に東京帝国大学ができました。つまり大学令というものが初めて施行されました。ということは何を意味するかといいますと、小学校、中学校、それから昔の旧制の高等学校、大学という、一つの学校制度、それが一つモデルができたということなのです。同時に、そういうモデルができますと、他の学校というか私立大学もだんだんそのモデルに習ってくるわけですが、政府は東京大学だけつくったかという、そうではありませんで、7帝国大学をつくったわけです。今、その帝国大学というのはなくなりましたが、その一つがちょうど北海道大学に当たるわけです。七つの帝国大学をつくったことというのは非常に意味がありますけれども、これに50年以上かかっています。そのくらい、学校をつくるということは非常に大変だったわけです。ただし、九州から北海道まで、基本となる大学がそこにできて、それを見習って多くの大学ができてきました。

ただ、そのころの教育というのは、初めからそうですけれども、義務教育が社会のルールみたいなものをしっかり教えようということがありました。ところが、全体としますと、要するにおくれていた近代化、それに追いつこう、先進国に追いつこうという努力です。そのための教育という体制を敷いていった。それが実は非常に長く日本の場合残っていて、つい最近までその制度が残っていたと言えます。画一的な教育と言いますか、大体同じことを教え、それを聞いて学ぶのです。よく皆さん聞かれると思いますけれども、西欧に学ぶという、それが学問の方向だったわけです。要するに外国の先進国を見習っていこうと。ですから、皆さん方の中でも教育を受けた方の大部分は、やはりよく記憶して覚えてこい、まず理解しろと。新しいものを考え出せなんていうのはあまりなかったと思うのです。考え出せなんていうのではなくて、これだけ覚えなくては点をやらないぞというような教育、これは非常に楽なのです。

当然、最初の出だしからして、小学校なんかは師範学校を出た先生が色々なところで同じように教えるわけですから、みんなそろってくるわけですが、そういう画一的な、あるいは知識偏重というのですけれどもね、今の言葉で言いますと。知識を詰め込むという、そういう教育がずっと行われたのですけれども、これはあまりけなしてはいけません。この頃覚えることがいけないようなことを言っていますけれども、覚えなければものは始まらないのであって、あるいは理解しなければ始まらないのです。今のお子さん方、あるいはお孫さんに言ってほしいのです。何か覚えたりするのはむだなことのように言っていますが、それから始まらなくて、人間、どうにもなりませんね。ものを考えると言ったって、頭の中にあるものを整理して考えるのですから、それを覚えていないのは空ですから、空からは考えなんて生まれっこないのです。だからそういうやり方も一応はよかったのです。ただ、欠点があるということは申し上げておきたいというふうに思うのです。

そうやって大学ができたのですけれども、その大学が戦前までは非常に少なかった。4年生大学というのは国公立が19だと思っています。それから一番多いときで私立大学が28、トータルで47くらいが4年制大学の数です。ところが、この4年制大学が急に終戦後に増えてくるわけですね。終戦後にいっぺんに増えてきました。ただ、戦前は、4年制大学に行く数というのは、これもとらえ方が難しいのですけれども、大体受験する学生の年代の2ないし3%が4年

制大学に進んだということなのです。非常に少なかった。今はそんなパーセントではありません。大体30%を超えています。今年の発表でいきますと、昨年の例ですが、35%になっているだろうということを聞いております。

戦後に大学の数が急に増えました。これは何だかというと、一つには専門学校、あるいは旧制の高等学校、それがいっぺんに大学に昇格してきたということもあると思います。毎年どんどん増えまして、私立大学も出てきました。トータルとしては、現在、ちょっと数はつかめないのですけれども、600近くあると思います、4年制大学が日本全部で。そのうちのたしか144が国公立で、残りが私立大学ということになります。要するに昔に比べますと10何倍に増えていると。しかも収容人員というのが多くなっていますから、もっと多いわけです。ではどのくらい増えているかというと、先ほど申し上げました35%ということですから、昔の2、3%の時代に比べますと、いわゆる大学というのは大いに大衆化されたということは言えると思うのです。

そういう大学の数が増えてきますと、今度はまた大学の教育のやり方、あるいは学校としての特色、そういうものがそれぞれ色々なことを考え出しますし、同じことをやっていると困りますので、そういうことが非常に活発に論議されるようにだんだん増えてきたのですけれども、一番大事なのは、要するに明治に始まった教育は、よく言われるように、国を富ますという、富国ということです。それともう一つは国を強くするという、富国強兵と言っていたのです。ところが、戦争で負けまして、軍隊がなくなりました。ということは、強兵という部分がなくなってしまいまして、戦後の教育というのは富国、国を富ませることがいいことだということで、国を富ませるのを目的としました。大きく言ってしまうと、そういうことが戦後の特徴だったと思うのです。それがある程度成功してきた。

同時に、皆さんが富んできますから、そうすると教育する範囲というか、あるいは学校へ行く人の数が増えてきます。それと同時に、非常に日本全体を、世界でも珍しいぐらい平等思想みたいな、そういうものが普及しましたから、隣の人が行ったらうちの子も行かなければというふうになってくるわけです。そういうのが増えた原因だろうということなのです。

それでも30何%ではないかと言いますけれども、高等教育機関といいますのは、この4年制大学も入りますけれども、短期大学も入るのです、高等教育機関の中には。同時に専門学校も入ります。看護婦さんの専門学校も入りますね。ですからかなり広い。ということは、専門教育、高等教育を受けようとするパーセントというのは60%を超えています。そのうちの半分が4年制。ところが今、短大が、一生懸命4年制に変わろうとしています。ということは、4年制大学に進学する数というのは、パーセントはどんどん増えてくる。ただ、お子さんの数が減りますので、今の大学の数というのはもうこの辺で十分なのです。あまり多くする必要はありません。まして私なんかは、大学はどんどん減っていくだろうと思っています。それから、合併する、あるいは吸収する、そういうこともあるだろうと。吸収の相手がなければつぶれてしまう。これはどんどんこれから進んでいくだろうと思います。今の世の中の動きと同じようなことがあるだろうと思うのです。

そういうときに、この千歳の科学技術大学をなぜつくるのだというのが一つあるわけです。歴史的にはそんなふうな流れですけれども、もう一つ、大学の使命というのは、何と申しますか、詳しく言うと職業教育みたいなことになってしまいますけれども、私が基本から言いますと、人間というのは色々な素質を持って生まれてきているわけです。その素質というのは、一生懸命伸ばしていく必要があります。なぜ必要があるかといいますと、どういう人でも社会の世話になっているわけです。多くの人の恩恵を被って生きているわけです。今の若い子という

のは、何か1人で生きているような顔をしていますけれども、それならもう電車にも乗せてやらないし、自動車にも乗せてやらないし、もっと言えば都会に住んでは困るし、ごみを出しても困るしということになるわけです。ともかく病気になったって見てやらないぞということです。そういうことで、色々なことをずっと見ていきますと、猛烈に世話になるわけです。世話になった、それに対して何かを返さないというのは、これはいけませんから、その返す手段というのは、それぞれの人が探さなくてはいけないということです。先程、人に迷惑をかけてはいけない、それが基本だったと言いましたがけれども、それは消極的な意味ではそうですけれども、もっと積極的に言えば、社会に対して、あるいは周りの人々に対して、大いに返さなくてはいけないということです。

それでは何をもって返すか。能力が色々ですから、その人に合った能力を開発して、それを伸ばして、それを社会に返していくということ、これが人間として生まれてきた義務だろうと私は思っています。そのために大学はお手伝いができる、あるいはしようということです。そこに画一的な教育じゃなくて、一人一人の特徴をいかした教育が必要だろうと考えているわけです。そのために、それではどうするかというと、大学側で考えることは、子供たちに色々なことを教えますけれども、子供たちが生きるのは未来なのです。今ではなく、将来なのです。だからどういう将来がこれから展開していくかという、それを知りませんと、知らないといつか、それを予測しないと、教育というのは成り立たないわけです。

私なりに今の現代を予測するのは何だとしみますと、四つばかりありますけれども、一番大きいのは、日本というのは、あるいは世界がと言ってもいいでしょうけれども、科学技術の進歩、これは今後も続くであろうと。科学技術というのは、最近になって、その進歩がいいことばかりでないと。公害の問題もあるではないか、CO₂が多すぎるではないかとか、炭酸ガスですけれども、それでは自動車に乗らないでみんな歩くかといったら、そんなことしませんよね。だから科学技術の進歩というのは、そういうマイナスも必ず生ずるけれども、そのマイナスをいかに少なくし、そしていいところを享受するかということだろうと思います。けれども、とにかく科学技術の進歩はとまらない。世界各国が、今、猛烈な勢いで努力しています。どこも一生懸命です。現に中国は、非常に多くの理工科系の学生を日本の大学に留学させました。この頃少し減ってきました。どうして減ってきたかということ、中国の技術の水準が上がってきたからです。そういうふうにして、今、東南アジアも目の色を変えて来ていましたけれども、だんだん減る傾向です。日本も、当然、科学技術を伸ばしていかなければ、もう世界から忘れられるし、世界の国が尊敬しないといつか、大事に思わないようになる。だから日本も、やはり科学技術はどんどん進歩させなくていけないと思います。

平成8年ですから一昨年ですか、政府が、やはり日本の将来のためには何が要るかということで、科学技術創造立国という、変な名前をつけましたけれども、創造というのは作り出すという、新しい科学技術をつくり出すことによって国を建て直そうということです。また最近、大学審議会から出た、21世紀の大学像という文章の中にも、まず第1番目にこの点にふれ、科学技術を進行させて、国を建てていくこと、これが不可欠であり、日本にとってはどうしても必要だということが載っています。

その時に、2000年までに、あと2年ぐらいしかありませんけれども、日本の科学技術に使うお金、政府が出している補助金、要するに予算です、それを今よりももっと増やそうではないかということが閣議で決まったはずなのです。それが今度はどうなってしまうかわかりませんが、日本の科学技術に出しているお金は、GNPの0.52%でした。それは一昨年です。ところが、外国はどうだといいますと、アメリカが0.9%を超えていました。ドイツが

もうちょっと多かったと思います。やっぱり0.9%台。フランスが1.1%だったと思います。大体主要国というのは1%前後にあるのですけれども、日本の場合には0.5%という、パーセントから言うと半分です。ただ、GNPが日本は大きかったですから、科学技術費というのは比較的恵まれていたと思いますけれども、それはともかくとして1%位にもっていかねばというのが一つの目標でした。そのくらいに、今、世界を挙げて、科学技術の振興、あるいは開発、新しい技術を生もうということに一生懸命なのです。

それからもう一つ、今度はその次は、皆さんもご承知のように、情報化という、これが猛烈に進みつつあると。もうかなり進んできました。私共も日常生活でなかなか追いつかない状況です。一生懸命やっていると、孫が横から来てポポッとやって頭にきますけれども、そういう時代になってきました。皆さん方もぜひ習得しないと生きていけなくなるであろうということをやっと申し添えておきます。つまり情報社会というのはどんどんこれから進んできます。ちょうど進み始めたところです。

それで、一番私なんか心配しているのは、今度はそういうふうになってきたときに、情報量というのは非常にたくさん入ってきます。どういう情報を自分がとるかという、それは各人の考えですね。だからそのところをしっかりとしない場合には、情報に振り回されてしまいます。「考える教育」をしろというのは実はここから出てきているのです。考えることを進める教育がこれからは大事だよというのは、情報化社会になりますと、非常に大事なことになるわけです。色々なことを数多く言われると、その選択の問題が重要になるからです。一方、好むと好まざるにかかわらず、情報化というのは進んでいくのですから。

もう一つは、今度は国際化です。国と国が非常に近づいています。こんなにものすごいとは思いませんでしたけれども、今の世界情勢、あるいは日本の情勢を見るとおわかりだと思います。世界が非常に近くなる。我々ですら国際的な感覚で日々を過ごしませんと生きていけない時代になりつつあります。ということは、国際間の距離が非常に近づいてきて、国際的に認められないと日本は生きていけないし、我々が生活する場合でも、常に国際的な視野、そういうものを持って当たらなくてはならない。この前、ちょっと銀行へ行きましたら、銀行も国際化で大慌てで、今ごろ大慌てというのはおかしいのですけれども、要するに国際的な動きを知らない、銀行にお金も預けられない時代がもう来つつありますよね。そんなふうなことで、国際化は必然的に進んでくるといふこと、これはもういかんともしがたいと思います。

今の世の中というのは、先ほど周りのことを考えないで生きていてはいけないのだと言いましたけれども、それは個人もそうなのです。それから国もそうなのです。周りの、諸外国のことを考えないで生きていくというのは、これはとても生きていけない時代になってきたというか、もうなってしまったのですけれども、そういうことを考えていかななくてはならないと思います。

この三つぐらいでまずまとめてしましましょう。この大学をつくったのは、大学なんてもう要らないという、そういうときにこの学校をつくっていく、その一番の元は、今お話しした、将来をどう読むかという、その答えから出ていると思うのです。

というのは、一つには、科学技術というのはこれからもますます進歩する。これなくしては日本の将来はないということです。それが一つです。そのための一端を担おうということです。

それからもう一つは、情報化、これがどんどん進みますけれども、その一番の基本になるところのサイエンスといいますか、それをやりませんと、人のものばかり持ってきて並べてつないだってしょうがありませんので、その一番の基本からずっとやっていこうという、いわ

ゆるそれが光科学と思っています。これは後ほど色々なお話が出てくるだろうと思います。それをお聞きいただければと思いますけれども、そういうことが一つです。

それからもう一つは、この学校はもう既に国際化というか国際的な視野で、諸外国のことを視野の中に入れてカリキュラムも組み、あるいは研究活動もし、教育も行うことを考えています。だからこれからつくるべき大学はどうしても日本には大事な、かけがえのない大学でありたい。私は、この大学によって、もちろん千歳を良くしたいし、北海道全体も良くしたい、ひいてはそのことが日本も良くするだろうと。それから、もっと大きく言ってしまえば、人類にもいい影響を及ぼしていくだろうというふうに思います。

あと、もう少しこれからの先の世界について話すことがあると思うのですが、ちょっと忘れてしまいましたから、大体この学校に関係したところだけを少しお話ししておきたいと思うのです。

いずれにしても、そういう大きな望みというか、そういうものを持って、この学校をつくってきました。今まで順調に進んでおります。同時に、皆さん方、千歳の方々、その他多くの方の協力を得ております。ただ、これから先、色々なことがまだまだ山積しておりますけれども、これをやりませんと、日本がおくれてしまうというか、日本の中で光科学だったら千歳に来なくてはだめだというふうにしたいし、世界の人たちもやがてここに集まってくるというふうにしたいわけです。一生懸命やりますので、ぜひご協力をいただきたいと思います。

ただ、今までの協力いただいたことを何もお礼を言わないで、またしろなんていうのはあれですが、ここまで来てしまったのだから、できてしまったのですから、最後まで面倒を見ていただきたいと思います。

そういうことで、あと、難しい話が出てくると思います。30分たってしまいますので、もう少し話しますとあと10分位かかってしまいますので、このくらいで勘弁させていただき、またの機会にお話しする機会があると思います。少しまとまりませんでしたけれども、今後ともよろしくお願いを申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

ごめんなさい、質問を聞かないで。言いつばなしというのは今の時代に合いません。こういう教育がだんだん変わってくるのですよね。大いに討論をしよう。けれども、言いつばなしというのはお互いに楽なのですよね。それから、一つの目標に向かって皆さんと一緒に進んでいくためには、案外今までのやり方もよかったと思います。

それから、言い忘れてしまったけれども、今、ゆとりの教育とか何とか言っていますね。だからお子さん方も生意気なのが、そういうことを言うのがいると思います。けれども、一生懸命勉強しなくてゆとりが出るはずがないのですよね。そうでしょう。みんな仕事を一生懸命していなかったらゆとりができませんよね。毎日仕事のことを心配していましたら何のゆとりもありませんから、ゆとりのある教育なんていうのは、まず本人たちが勉強することですよね。それはよくお宅へ帰られましたら皆さんに言っておいてください。勉強というのは、要するに学校なら学校の4年間なら4年間で、一生それで生活しようなんていうのは、とても今の時代は違いますから、たった4年で40年生きようなんて、そんな無理なことを言うてはいけませんので、卒業しても、あるいは何十歳になっても、毎日勉強してほしいという、これもよく言っておいてください。まず手本を示していただきたいというのをつけ加えさせていただきます。

何か、質問を聞きに来てまたしゃべっていますが。いつでも、私へ、何かあったら聞きに来てください。

○質問者 千歳の大学の使命といますか、科学技術大学として、応用技術だとか基礎研究だ

とか、色々展開されると思いますが、今後どういう方向へ大学を持っていこうと考えているのですか。

○辻岡氏 専門としますのは、光科学という、これが日本で初めてだろうと思いますけれども、光を中心にした学問をします。それで、私、もう少し言えばよかったのですが、人間というのは才能が、色々な人があるわけです。だから学者に向いている人もあれば、そんな学者みたいなものはごめんこうむると。実際に工場をつくったり、あるいはそこでものを生産したりすることが好きだという人もいます。つまり応用的なことが大好きという人もいます。だからこれだけの人数がいますと色々な面が出てくると思うのです。だから、まずは色々な分野、好きなところに、その範囲内で行けるように、そういう教育体制をとりたいというのが一つです。

それから、この大学は社会に貢献しようというのですから、産学共同という、市も支援していますから、産学官共同という、それは最初から標榜しています。昔といっても今から20年ぐらい前までは、産学共同なんて言ったらゲバ学生が襲いかかってきたような、そんな時代でした。皆さん方でもちょうどそのぐらいの年代の方もいると思うのです。ところが今は、産業界と大学とが大いに手をつないで、学問、あるいは技術を進歩させよう、そういう時代になってきています。この大学はそういうことをやっていきたいというふうに思っています。もうそれは、今お話しになりますけれども、佐々木学長以下、もうその緒についているというか、もう手がけております。

何かございますか。それではどうもありがとうございました。（拍手）

学長（当時） 佐々木 敬介

②光技術の変遷と将来展望

初めまして、学長の佐々木です。

ごらんのように、千歳市の全面的な協力を得まして、大学が立派にできました。現在1学年270名あまり、在籍しておりますけれども、4年たちますと1,000人以上の完全な形の大学になるということになります。同時に、4年後には大学院をつくるという計画で、今年からその計画を始めます。

理事長がお話ししたように、この大学は大学だけであるということではありませんので、大学でできた技術、これを世の中に還元する。もちろん卒業生も世に送り出す、そういう考え方を基本に据えております。会社との関係の技術展開につきましては、既に昨年の8月から、何社かと協力体制をつくっております。今月の末にも、さらにこれを大きく強く打ち立てるという計画が現在決まっております。

光の技術大学ということですが、一口に光と言っても、光という言葉だけからすると狭いように受けとられるかもしれません。しかし、光は「森羅万象」にかかわるということで、今まで学問の敷居で光を使ってはおりませんけれども、このキーワードは実は非常に広い。その光の現象につきまして、エッセンスになる学問を、この4年間に学生に修得してもらう。さらにその延長上に、世界的な先端科学技術、これをかねがね我々、教員であると同時に研究者ですから、それぞれ具体的な課題を持っております。それを学生に渡して、学生も世界先端の科学者になる、技術屋になる、そういう形を想定しております。

後ほど、光の広い分野でも、ここで考える光は何かということについて話してまいりますけ

れども、今日はあまり難しい話をしないようにということを何回も念を押されておりますし、私もいきなりそういうことを話すつもりもありませんので、まずは電気、光に関係する科学技術の変遷、この話を我流でちょっと考えてみよう。こんなことで前置きさせていただきます。

19世紀、前の世紀ですけれども、ご存じのように、今の電灯とか発電機、モーター、送電線、そういう今日なくてはならないような電気に関する技術が確立したと、前の世紀の中ごろですけれども、歴史に残っております。皆さん小学校で実験をやったと思うのですけれども、釘に線を巻きつけてスイッチを入れますと電磁石になる。この周りに、例えば砂鉄がくっつくという現象は経験されたことがあると思うのですけれども、この電磁石の横に方位磁針を置き、片側が北でもう一方が南というふうにして、電磁石のスイッチを入れますと、方位磁針の片側の先がある方向に引っ張られます。磁石はもともと地球の北と南を指すというふうになっているのですけれども、電磁石のスイッチを入れると、こっちの電磁石の力が強いですから、その方向に引っ張られる。このスイッチを、プラスマイナスを逆にするようにつないでやりますと、つまり電流の向きを逆にするようにつないでやりますと、方位磁針のもう一方の先が電磁石の方へ引っ張られるということで、このスイッチを適当に順番に切りかえると、これはぐるぐる回り出すという現象が起こります。これがモーターの原理です。

それで、前の世紀の中ごろは、こういう電池が、今の電池ではありませんので、もっと複雑な電池を使い、電流を流すと磁石ができる。あるいは、メーターをいれて磁石を回しますと、ここに電圧が出てくるという、そういう原理で発電機ができた。そういう現象がわかったわけです。

その現象はファラディという人が見つけたわけですが、これをすぐそういうモーターとか発電機につくって商売にするということが、この現象を発見してから約30年以内に始まっております。シーメンス社とかアメリカのウェスティングハウス社、ゼネラル・エレクトリック社、そういった会社は、もうそれを商売に始めております。明治維新のころですから、日本はその技術を輸入して、三菱電機とか日立とか、そういう現在の大手電気メーカーが現在に至っている、そういうことになっています。

ではこの電流というのは一体どういう代物か。これは実はわからなかった。電流が流れるというふうにメーターで計れるのですけれども、一体その電流というのは、そのもとは何か。もちろん今は、電流はほとんど電子であるということになっております。電流の本質の方が後からわかったのだけれども、その前にこういう現象を使って売り物をつくる、そういうことを前の世紀の人はやったわけです。モーターとか送電線、こういうものは電流をよく通す金属、銅です。それから、磁石がよく起る鉄、鉄でない高いものもありますけれども、鉄は安いですから、この二つ、これが非常に重要な役割をして、製品をつくって商売をやったというのが19世紀のエレクトロニクスということになります。ですから、電流を通す、通さないということから言うと、電流を通すものは導体、これはほとんど金属です。特に銀とか金とか銅といったものがよく通します。ですから、前の世紀は導体をいかにうまく使って、電気をどうやって大きく起こすか、そういう時代が前の世紀だったということになります。途中、いろいろ有機科学の発展とかありますけれども、物質の観点からすると、導体、半導体、絶縁体、この三つにすべての物質は分類することができます。

ご存じのように、今世紀は、20世紀は半導体の時代ということで過ごしているわけです。もちろん、金属を使ったモーターとか送電線とか発電機、そういうものは大事なもので、いまだに使っておりますけれども、研究という先端的なことを基本的にやることはなく、そういう状態に入っているわけです。今、半導体が主役を演じております。皆さんお持ちのコンピュータ、パソコンとか、全部そういう小さいエレクトロニクスの機材は半導体をベースにしており

ます。それは私が20年ぐらい前に、薄膜の関係の国際会議に行ったときに、日本の微細加工技術、細かく線を引いたりパターンをつくったりする技術ですが、そういう技術がやはり日本は世界一なのだというのを国際会議上のあちこちで外国人がディスカッションしている、そういう状況が見られました。その状況が続くまま、結局半導体産業、これは日本を支える、日本が食べていく、そういう重要な柱になっております。ところが、この集積回路をつくるためにいろいろな機械が要ります。数値的には正しくないかもしれませんが、一つの工場で半導体の記憶装置をつくるというラインを構築するのに、2,000億円とか、そういう装置がいる。それを工場に投入して、製品をつくっても、売れるかどうか分からないという状態が続いております。2,000億円投資して、もうけが50億円とか100億円とか、そういう商売は成り立ちませんので、そういう危機に今日本は立たされているわけです。それで、これはもう注文するお得意さんがいなければ売れないというのは当然のことですが、それを使いこなすためのソフトウェアに関係する部分の主導権は日本にはございません。やはりアメリカに押さえられております。ですから、結局今になって思えば、そういう大変難しいテクノロジー競争をして日本は勝ち取っても、それをさらに上からコントロールするのはアメリカというふうになっております。この半導体産業の行く末、導体、これは19世紀、半導体、これは20世紀、この産業はなくなりはない。こちらと同じように、モーターとか発電機、こういったものもなくなりはない。ただ、わずかな利ざやとかいうのもうけを頼ってやる産業に落ちていってしまう、そういう状態になると思います。

我々としては、こういうふうに考えたときに、この絶縁体、特にプラスチック、これは石油からつくるわけですが、この絶縁体のうちで代表的なプラスチックビニール、これをエレクトロニクスの主役に打ち立てていく方法はないものかということを今回考えております。電流が流れないのに、電気の通し方と言うと、これはちょっと単位が専門的ですが、導体が $10^{-8}\Omega\cdot\text{m}$ ぐらいだとすると、半導体では $10^2\Omega\cdot\text{m}$ 、絶縁体では $10^{14}\Omega\cdot\text{m}$ ぐらい、これは正確な値ではないかもしれませんが、このぐらいずつ電流の通し方が違います。銅とかになるとものすごく電流を流しますけれども、半導体はそんなに流さない、ビニールとかそうなるほとんど流さない。電流が流れないのに、それではどうやって使うのかということとを解決するのが、これが光です。ご存じのように、こういうものは透明です。透明であるということと、電気を通さないということは大体一致しております。ですから、ガラスも電気は通しませんし、水も、何かを混ぜれば別ですが、ちゃんとした純粋な水ですと電気を通さないということになっております。ではそれをどうやって使うかというのが、光を手がかりにしてやろうというわけです。

それで、ちょっと光の話に入っていきます。ですから私としては、21世紀はこれでいけるのだと。少なくとも見方を新しくする分野の物質であるということは間違いのないと思います。光は、人類が生まれて400万年ぐらいというふうに言われておりますけれども、太陽の光をおかげとして人間は生きてきたということで、切っても切れない縁がございますけれども、この光というのは、水素原子が核融合でヘリウムができるという過程で大量の光を出す。人間がこの反応の恩恵を被っているということになっております。

しかし、こういう光はどんな性質があるかということについては、やはりこれも300年、400年前まではよくわからなかった。有名なニュートンとかいろいろな専門家の人がいますけれども、ニュートンは波、粒子、両方の説を考えています。フレネルとかホイヘンス、この人は光は波であるというふうに考えております。現在でも、この波の考え方は非常に有効です。波というのは、ご存じのように、振幅、縄跳びを振りますとできますけれども、こういう振

幅、それから周期、あるいは波長、それから時間とともにこういうふうになるわけですが、どこの時間を基本にするかがあります。例えばこれを基準にすると、この基準からの位相。結局、波を規定するものは、この三つの性質をちゃんと押さえることによって、波がどんな波か規定できます。例えば光の場合に、波長が変わると色が変わるということがあり、光が強いか弱いかは振幅で考えます。位相というのが非常にわかりにくい概念ですけども、この位相のことがはっきり制御できるようになったのはレーザーができてからです。レーザーは1960年に発明されたわけですけども、レーザーのコヒーレントという性質を利用して、プラスチック、ビニール、この中を光が伝わっていくことを利用しようということを考えております。なぜ伝わっていくかという、水の中に棒を突っ込んで動かします。そうするとこういう波紋ができます。この棒が太ければ、この山の高さが高くなる。早く動かすと、この周期、波長が短くなる。ということは、お風呂でやってみればわかると思いますけれども、それと同じように、原子、例えばガラスの原子はシリコンと酸素からできておりますけれども、原子核と周りを回っている電子、通常はこれは同心円で回っていますけれども、光が入ってくると、こういうふうに偏りが生じます。ここから分けて、こっちがプラス、こっちがマイナス。こういうプラスとマイナスが向かい合っている状態、これをプラス・マイナスで双極子を形成するというふうに言います。これが振動すると、これと同じように光をもらって光で原子が動くということで、周りにさらに光が出てくる、ということは光が伝わっていく、そういうことなのです。

物質によってその伝わり方が違うということで、屈折率とか位相のずれとか、そういうものが物質の性質によって全部違って起こってきます。それをプラスチックの種類を変えて、真ん中のプラスチックは屈折率が高く、外側は低い屈折率になるというふうなことをやりますと、これがプラスチックファイバーになるということで、この利用の方法を、今現在、郵政省の援助をいただいて、千歳の市民ギャラリーの4階で実用化の研究展開をしております。ハードだけでも、使い勝手がもっと広がるというわけではありませんで、いろいろな装置をそこに組み込んで、より一般の家庭でも使えるようにしよう、安いファイバーネットワークを構成しようということで、かなり実用に近い状態まで研究が進んでおります。機会があったらぜひごらんになっていただきたいと思います。

今日は時間がございませんので、非常に雑駁な話になりましたけれども、また機会がございましたら、もう一つ、この次のステップで詳しい話もできるかもしれません。今後ともよろしくお願いします。（拍手）

何かご質問があったらどうぞ。

○質問者 今の双極子の話なのですが、光が当たると、原子が動くと言われましたが、どの様に光が受け渡されるのですか。

○佐々木学長 双極子が振動すると光を出します。その光が次の原子を動かす、それでまたそこから光が出るという受け渡しをずっとやっていくわけです。

○質問者 発生し終わった双極子はまたもとの中立状態に戻ることですが、光の増幅との関連はどうなのでしょう。

○佐々木学長 はい。入った光が吸収とか増幅とか、そういうことでなくて、受けたものを素直にそのまま出すというのが、弾性衝突というふうに言いますけれども、この場合はエネルギーのロスがなくて、ただ受け渡しをするということで、位相差があるために屈折率が出てくるわけです。

今日、この場でなくても結構ですから、いつでもご質問があったら、私がいればお受けしますので、どうぞご質問ください。

それではどうもありがとうございました。（拍手）

学部長（当時） 川合 敏雄

③自然と計算

皆さん、今日はお忙しいところ話を聞いてくださってありがとうございます。話の筋は、皆さんのお手元に差し上げました赤い方の紙に書いてございますが、今日はあまり時間もございませんし、話の筋はざっとこういうことだということをはじめにご紹介しますが、実際には1、2、3ぐらいのところまでいたします。したがって、「自然と計算」という題はついておりますが、主として自然という部分に限ってお話をし、計算という部分は軽くふれたいと思います。

第1に申し上げたいのは、自然の基礎法則は極めて単純な、わずか3行の方程式、法則で支配されているということです。その特徴は、因果と無常ということです。その法則は、数字の言葉で書かれておりますが、要するに計算ができるということです。したがって、自然は大きな計算機です。

近年、計算機が長足の進歩を遂げました。私がか社に入社したのは、もう40何年昔のことですが、最初にした仕事は、ズームレンズの設計でした。これは手回し計算機を使って、このか細い腕で、人間計算機で計算をしたわけです。その計算能力は大体1,000秒かかって1計算という調子でした。それから40年の間、私は計算機と一緒に暮らしてまいりました。おかげで超並列計算機というようなプロジェクトにも参加しました。そして速度の点から言えば世界記録を日本で達成するということになったのであります。人間の計算速度が今、大体1,000秒に1回と言いました。パソコンが大体1秒間に100万回の計算をしておりますから、したがってパソコンというのは大体1億人力とか10億人力ぐらいの力を発揮するわけです。この世界最高速の計算機は、そのパソコンを大体100万台束にしたぐらいの能力を持っております。それだけの大きな計算機があったら、世の中のことは、今の自然の基礎法則から全部計算して何でもわかるかといいますと、いや、とてもそうはいきません。普通にありふれたエンジニアリング、工場なんかで問題になっている問題のざっと2割か3割ぐらいの比較的楽な問題は、この計算機で1時間か2時間やれば解けるけれども、化学屋さんとか材料屋さんがやっているような問題は、そのまた100万倍でも1億倍でも解けない。だから計算機でやって計算できるというけれど、人間の能力というのは自然の神様の能力に比べればはるかに劣っておりまして、現実には物を観測し、実験をするということは将来とも重要です。今でも工場や大学でも、大半の人は実験をし、試作してから製品を作っているわけです。

そういうわけで神様は偉大だということを悟る意味では、計算的自然観というのも結構な自然観です。自然、あるいは神の前に、人間はいかに小さいものかと教えられる機縁となります。しかし、私自身は小人ですけれども、計算機という巨人の肩に乗ってみますと、かなり遠くまでよく見ることができます。計算機ができる前の学者がよくわからない謎として残していたたくさんの問題の中の幾つかは、この小人でも見ることもできた、そういうお話を少しさせていたきたいような気はしておりますが、今日は割愛とします。

それだけ強力になった計算機ではありますが、今でも何か役に立つ仕事をしようと思うと、

専門の人が何カ月かからないとなかなかうまくいかない。もっと使いやすくなれば、だれでも1時間ぐらいの作業で、そしてコンピュータを一晩ぐらい動かせば、あしたの朝までにはおおよそその答えができるというかなり広い分野がございます。そういうような分野に対しての理想的状态を実現して、大学の中のいろいろな研究に役立てるとか、あるいは地域の皆さんのそういう疑問に答えるようなお手伝いをしたい。こういうことを千歳でしたいものだというふうに私は考えております。

そして結びとしては、真理、あるいは学問というのは、非常に単純でわかりやすく、そしてまたあらゆるところでいつも正確に成り立って、したがって役に立つ。真理、役に立つ、おもしろいという、その三つのことは緊密に一体となっているのである。よく世の中には、おもしろくないけれども役立つからやらなければならないなんていうことを言う人がいるかもしれない。そういうことはないのだと私は思っておりますが、それを学生にも伝えて、目の色を輝かせて、役に立ち、かつおもしろい仕事をし、学問を楽しむというような学生を育てていきたいものだと考えております。

以上が話の筋です。

まず「自然の法則」であります。

来年の景気はどうなるだろうかということは、経済の専門家が一生懸命予想しますけれども、確かなことはだれもわかりません。小渕さん自身、今日の夕方の我が身がどうなっているかは、恐らく定かではないのです。（注. この日は、総理大臣選挙の日だった）

ところが、太陽は、あした、何時にどこの方向に昇るとか、あるいは次の日食は何年後のどこで起こるかは正確に予言できます。

そこで、どこでもいつでも必ず正確に成り立つ法則、すなわち確実な真理というものはあるのだろうかという疑問が起こるわけです。動物でも、食べ物を求めたり、あるいは危険を避けたりするために、世の中がどうなっているかということを知る必要があって、彼らは彼らなりに知覚器官を持っています。人間の場合はさらに進んで、自然がどのような仕組みで動いているか、あるいは宇宙はどうして始まって、物質は細かく分けていくとどうなるのであろうかと考える人が現われてまいりました。ユダヤ人とかギリシャ人がその始まりです。もちろん、ギリシャ人にしても、大半の人たちは毎日の暮らしに追われておりましたから、「そんなことを考えて一体何の役に立つのか、あいつらは暇だな」というわけで、学者はスコラーと呼ばれておりましたけれども、これはギリシャ語の「暇人」という意味だそうです。私は生まれつきの貧乏暇なしであくせくとやってきたばかりに、大した学者になれないで終わりましたけれども、千歳科学技術大学の学者先生には、努めて自由な時間をふやしてもらいたいものだと思います。

それは余談として、ギリシャの学者が自然哲学というものを始めてから2,000年の後、ようやく大成功をおさめたのが、皆さんご存じのニュートンです。彼は水星とか土星といったような、いわゆる惑星の運動を研究していて、物体の運動に関する法則を発見し、それまですっきりしなかった色々な問題を一挙に厳密に解決しました。ニュートンの運動方程式は、これは力学の法則であります。質量とか目方、重さ、それに掛けることの、高等学校では加速度というのですが、要するに場所が時間とともにどう変わっていくか、その変わり具合が力に関係するのだというものです。これは微分方程式というので、高等学校の学生が微分ということをやっていると勉強してくれると、大学へ来ると先生が楽をするのです。要するに自然の法則は微分という言葉で書かれているのです。その意味は、力が原因となって位置が刻々と変わり、そして位置が変わることによって力が変わる。原因が結果となり、結果が原因となって、世の中

は時々刻々動いているということを表しています。世界というのも、結局は物体の位置の配置状況でありますから、したがって世界の法則の基本は、結局この因果と無常であるというわけです。

このようにして、何年か先の日食なんかも正確に予言できるようになりました。ニュートンの法則は、天上の星だけではなくて、身近なリンゴとか、飛行機とか、その他すべてのものを支配していることがわかってまいりました。ギリシャ時代以来、わからなかった地上の運動に関する謎も、少なくとも原理的には、きれいにわかってしまったのです。地上の問題というのは意外に複雑で難しいものです。けれど天上の問題は単純で易しい。天上の問題を考えて学問ができて、おかげで地上の問題もわかってしまったのですが、これが始めから地上の問題だけにこだわっていたら、学問は生まれなかった。よく理科の学習を好きにするためには、身近なものをよく観察させ、そこからいろいろなことに感動して、その理由を考えていくというのは自然の筋ではありますが、ただ見ているだけではよくわからないということもある。頭も使わなければいけないのだと私は思うわけです。

ともかく、ニュートンの法則が三つある基礎法則の第1でありまして、これが機械工学の基礎となり、またすべての学問のお手本として、力学をどこの大学でも1年生にはしっかり教えております。

ニュートン以後、物質は目方を持っているだけではなくて、電気というのを持っているのだということがわかってきました。目方の間には、ご存じの「万有引力」という力が働きます。電気の間には電気力がある。したがって、電車が走るのも、貴乃花が押し出すのも、また私の声が皆さんに届くのも、みんな電気力のおかげであります。本大学の柱である光もまた電気現象でありまして、その電気についての法則というのがこの1行なのです。 $\square A = I$ と書いた、あのわずか1行が、テレビ、コンピュータ、光など、すべての電気現象を書き尽くして余すところがないのであります。

ここで \square とは何か、 A とは何かというのをざっと言いますと、まず I というのが電気とその流れ、電流です。 A はポテンシャルという、要するに電気力のもとになるものです。この A というのはだれも見たことがないものですから、実在しないのだ、自分はこんなスタイルの書き方はしないのだと、多くの人は言うておりました。15年ほど前に、日立製作所の基礎研究所にいる外村彰さんという方が、世界で初めて A というものを観測することができて、そしてこれはれっきとした実体であるばかりでなく、我々が日常見慣れている電場だとか磁場だとかいう、ああいうようなもののもとにある一番根源的な実在であるということがわかってまいりました。理論的に言ってもあんなに単純に書ける A というものから入ると、すべてが整然とわかるし、計算もとてもしやすいのです。ですから、千歳の学生には、少なくとも1年が終わったころには、電気の基本のところはもう全部わかったという自信を持ってもらえるようにしたいと思っております。 \square というのが説明が難しいのですが、要するに3次元空間及び時間と一緒にした4次元の時間空間に関する微分という意味です。つまり A という電磁場のもとには I という電流、電荷によって、時間空間的に変わっていくことをあらわしています。電気があると、 A をつくって、その A ができると、力なんかが起こって、また電気が動いてという具合です。これはやはり因果と無常の法則をあらわしております。

そして最後の三つ目は、量子力学の法則です。これは原子分子という極めて小さい世界を支配している法則で、一番最後に発見されました。今世紀の25～26年のころです。これで法則は全部そろいました。もちろん、原子のまた何億分の1という小さい原子核の内部では、第3の力、第4の力があるとかという話は残っておりますが、我々が普通の実験装置を使って見る

ことのできる宇宙のはるか果てから原子核の内部と、生命現象までを全部含めて、「森羅万象」この3行の方程式に書き尽くされていると物理学者は考えております。

もちろん、現実是非常に複雑で、あの3行ばかり知っているからといって、テレビが故障しても直せるというものではありません。まして生き物なんてものすごく複雑ですよ。人間だとか社会だとか、先程の経済の成長率だとかなんていうようなことになると、この3行でわかるはずはない。そういうわけで、それぞれの専門家がいて、それぞれ学問をつくっているわけです。物理学者の扱う非常に単純な基礎的な方程式は、三つとも全部微分という言葉で書かれていて、今のことがわかれば一瞬後のことがわかり、そのまた一瞬後がわかると、繰り返して未来までわかっていく構造になっている。それは因果と無常の法則ですから、お釈迦様がおっしゃったと同っても、確かに真理を語っておられるのだという気がするわけです。

そこで、もし巨大な計算機があって、その計算機の中には自然法則が内蔵されているとしますと、人間は問題を書いておけば、はいよといって答えが出てくる。そうなりますと、これは中に自然と同じ法則が入っておりますから、「計算実験」をすることができて、自然と同じものを計算機で出すことができる。これをシミュレーションと言います。

我々が普通見ることができない世界、うんと小さい世界、うんと大きい世界、あるいは超高温、超高压、その他いろいろな実験条件を計算機ですと意のままにつくり出して、あらゆるところを見て回ることができる。実験的にできないところを見たからといって何がいいかということはあるかもしれませんが、例えば地球なんて、ほんの数キロ深く入ったら何が起きているかわからない。だけど地球シミュレーターによって、地球の中のことがわかる。また、100年後の地球温暖化なども見当をつけることができる。

日本が計画している次の大型プロジェクトは、さっき私が言った、パソコンを100万台並べたあの計算機のまた30倍か100倍速い地球シミュレーターをつくらうというものです。これは正真正銘の世界記録です。私共のつくった世界記録は、ついこの前、インテルという会社に破られました。同社が、核爆発の実験シミュレーターとしてアメリカ政府に納めたものです。要するにこうなってくると、5、6倍お金がたくさん出ると5、6倍速くなるというので、お金の競争になっている。ちょっとしらけてくる気はいたしますけれども、こういう超並列計算機とは、とにかく同じものをたくさん安くつなげなければいけないわけです。1万日は故障なく働く部品であっても、1万台並列にしますと、毎日のように故障するということになりますから、したがって大きなものをつくるには信頼性をうんと上げなければなりません。そしてまた、1万台つなげたけれども、値段は実は100倍で済んだというようなくらいに安くつくらなくてはいい。こういうことをやるのは日本のお家芸です。こういう計算機によって、日本が世界に文化なり産業に大いに寄与していくのは、まさに日本の一つの使命であろうと思います。

この後、計算のお話を少ししていくつもりではおりました。それについては、先程の話のように、まず人間計算機で私が手回し計算機でふうふうやって、その結果、今にして思えば、私の青春の1年間はパソコン0.1秒分の計算のために費やされたのでありました。その私がいかに愚かであったか、いやいや、愚かであるということは、どんなに報いの大きいことかなど、いろいろ雑談するつもりでおりましたけれども、またの機会にゆずることにして、どうも本日はありがとうございました。（拍手）

9. 千歳科学技術大学における光教育

レーザー学会誌「レーザー研究2007年3月」より

千歳科学技術大学

名誉教授 三戸 慶一・准教授 福田 誠

千歳科学技術大学は、平成10年4月に世界初の光を専門とする単科大学として、千歳市による公設民営の私立大学として設立された。その千歳市においては、昭和40年代から大学設立が度々検討されたが、その実現には至らなかった。その後、本学設立のきっかけとなったのは平成6年に文部省（現在の文部科学省）から、「光をテーマとする理工系の大学は興味深い」旨のコメントを受けたことである。その当時の文部省によれば、大学等の設置および収容定員増は原則として抑制の方向にあったので、本学の設立は困難を極めた。文部省の抑制政策の中にあって、「極めて必要性の高い大学の設立は認可する」という例外的措置が設けられていた。そこでは情報、社会福祉、医療技術、先端科学技術が必要性の高い大学の分野として挙げられており、それが本学設立への突破口となった。もう一つ本学の設立に欠かせないのは、多くの市民の賛同が得られたことである。このように千歳科学技術大学は、いくつもの困難な状況乗り越えて設立が認可されたことをここに記しておきたい。

以下に、本学の設立に携わった者として設立当時を目指した教育方針を簡単に述べたいと思う。一口に光科学技術といっても多くの分野に細分される。そのなかでも本学の初代学長である故佐々木敬介教授を中心に急速に研究が発展したプラスチック光ファイバを光科学技術の象徴として本学の研究目標に据えた。そのイメージを図1に示す。プラスチック光ファイバの研究には、物理学、化学、数学などさまざまな入り口があり、学生はどの登り口からでも頂上に向かって勉強できるようにすることを教育のコンセプトとした。設立に向けての文部省との協議において、「光科学を極めるためには多くの事柄を学ばなければならないので、学部レベルでは難しいのではないか」という意見も出たが、「実験、実習、演習といった学生が自ら手を動かして科目の内容を体得できるような科目を多く配置する」ということで、それらの意見に対する回答とした。その結果、本学の卒業単位である125単位のうちおよそ4分の1がそのような科目に充当されている。もうひとつ光科学技術の修得に欠かせないこととして、学生は教員から多くのアドバイスを受けることが必要である。そのためには、学生と教員の心理的な距離が縮まることが不可欠であることから、本学では入学してきた1年生に対して、入学時のガイダンスから機会あるごとに教員および職員と声に出して挨拶を交わすように指導している。これによって、学生は教員に質問をしたり研究室を訪ねたりすることが容易になり、授業時間以外に多くのことを学ぶことができるよう期待した。また、副次的な効果として、本学を訪ねてくださる企業の方から、「廊下ですれ違う大多数の学生から挨拶されてたいへん驚いた」という評価をいただくことができ、就職活動にもたいへんプラスになっているようである。

次に、図1で示した山の麓にあたる1年生の科目としての自然科学実験について述べる。この科目の基本方針は「学生が自らの手を動かして現象を理解し、実験が好きになるようにする。」ということである。したがって、実験テーマは基本的な内容としているが、できるだけ

プラスチック光ファイバ (POF)

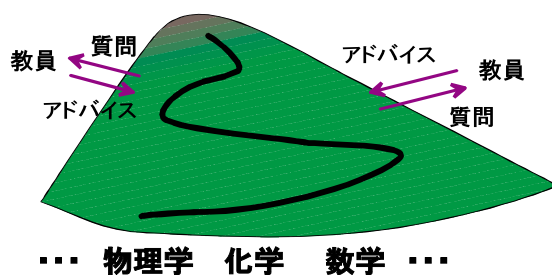


図1 学生は幅広く学んで最先端の光科学技術に到達するというイメージ

将来の専門分野の入り口となるようなテーマを設置した。学生は図2のように、7、8人程度の少人数のグループに分かれて毎週異なるテーマの実験を行っている。それぞれのテーマの実験装置はシンプルな構造とし、できるだけ手作りの装置を準備することによって学生が実験内容を見失わないように配慮している。また、それぞれのテーマを担当する実験の指導者は、本学の専任教員、近隣企業からの外来のTA（ティーチングアシスタント）および本学の大学院生のTAである。そのため学生はさまざまなタ



図2 自然科学実験の指導風景

イプの指導者とディスカッションすることになるので、コミュニケーションのトレーニングにもなる。実験を行う際も学生の安全の確保や学生からの質問に常に答えられるようにするために、実験指導者はその場に立会うこととした。実験およびレポート作成が終わると学生はそれぞれの実験指導者にレポートを授業時間内に提出する。指導者は学生が提出したレポートを見ながら実験に関する基本事項について質問し、学生の理解度のチェックを行う。レポートの内容が不十分であった場合には、その場でレポートの加筆・修正を命じる。このやりとりを何度か繰り返してレポートが受理されるとその日のテーマが終了となる。近年、高等学校において物理実験および化学実験を体験している学生は少数派であることから、このようなやりとりは学生にとって初めのうちはたいへん苦痛のようであるが、3、4週間もすれば学生はすぐに慣れてくる。このようにして、高等学校と大学の勉強の仕方の違いを理解させている。限られたスペースで本学の教育の特徴を説明することは不可能であるが、以上のような方針で懇切丁寧に学生の面倒を見るのが本学の最大の特徴である。

本学は平成10年の開学から10年が経とうとしている。開学当初は図1で示したようにプラスチック光ファイバを最先端の光科学技術の象徴としてカリキュラムを編成したが、10年間に光技術はもはや最先端ではなく基盤技術になろうとしている。また、学生の学力も大きく変化した。「分数ができない大学生」という本が話題を呼んだが、その当時は物理の授業を行っていてもまだそれほど実感はわかなかった。そのような学生はいたのであろうが、学年に数人といったところであろう。しかし最近はその数が明らかに増加した。高等学校と大学の間に崖が出現し、年々その高さが増しているというのが実感するところである。大学としてもこのような変化に対応していくことが求められており、今後は光科学技術だけではなく文理融合の分野の人材育成も視野に入れて変革していくことになるであろう。

10. 表彰

【外部表彰】

- * 雀部 博之教授
平成12年6月 電子情報通信学会「フェロー」叙任
- * 雀部 博之教授
平成12年11月 表面科学技術学会「表面科学技術賞」受賞
- * 吉田 淳一教授
平成13年6月 「平成13年度全国発明表彰発明協会会長賞」受賞
(吉田淳一ほか3名)
- * 吉田 淳一教授
平成14年5月 「平成14年度IEC－APC議長賞」受賞
- * 川瀬 正明教授
平成14年9月 電子情報通信学会「フェロー」叙任
- * 安達 千波矢助教授
平成15年3月 「平成14年度第2回船井情報科学振興賞」受賞
- * 雀部 博之教授
平成15年5月 高分子学会「高分子科学功績賞」受賞
- * 安達 千波矢助教授
平成16年6月 平成15年度応用物理学会
「第1回有機分子・バイオエレクトロニクス分科会論文賞」受賞
- * 安達 千波矢助教授
平成16年6月 nano tech 2004 IT・エレクトロニクス部門「ナノテク大賞2004」受賞
- * 吉田 淳一教授
平成17年6月 「IEC1906Award」受賞
- * 長谷川 誠准教授
平成18年3月 電子情報通信学会「2005年度活動功労表彰」受賞
- * 高岡 詠子准教授
平成19年3月 情報処理学会「平成18年度山下記念研究賞」受賞
- * 川瀬 正明教授
平成19年4月 「紫綬褒章」受章
- * 森田 恭平さん（平成19年3月 光科学研究科博士前期課程修了）
平成20年2月 電子情報通信学会「平成19年学術奨励賞」受賞

【教育研究貢献賞】



教育内容などの改善に関する教員の自発的な取り組みを奨励するため、教育において特に優れた成果を上げた教員を表彰する賞……平成13年度制定

年度	職 名	氏 名	貢 献 概 要
13	教 授	小 林 壮 一	分かり易い講義
	助教授	山 中 明 生	大学院の設立 教授方法の評価
	助教授	小松川 浩	講義内容の工夫 教育ネットワーク作りによる地域連携
14	助教授	安 達 千波矢	顕著な研究業績 卓越した研究指導
	専任講師	谷 尾 宣 久	実験実習系教育の確立・充実
	専任講師	福 田 誠	実験実習系教育の確立・充実
	専任講師	小 田 尚 樹	理論的実践的な情報基礎教育の確立・充実
15	助教授	Olaf Karthaus	科学技術振興事業団さきがけ研究 21「組織化と機能」 卓越した教育研究指導
	専任講師	高 岡 詠 子	P Cマエストロ構築 プログラミング言語教育支援システム構築
16	教 授	川 辺 豊	学生実験・演習の構築 学生募集及び入学試験に対する努力
	専任講師	長谷川 誠	小中学校向け理科実験教材及びそれを用いた授業プログラム 開発
17	教 授	三 戸 慶 一	本学の設立・運営に携わり、発展の礎を築くなど、創生期からこれまでにかけて多大な尽力
	助教授	今 井 敏 郎	化学系実験カリキュラム構築、出前授業の「蛍の光を作ってみよう」の導入、授業評価アンケートの改善、実験室・研究室の廃液処理法の確立
	助教授	碓 井 広 義	映像を基盤とした教育の実施、電子教材の構築、本学の広報活動推進、地域ポータルサイト開発等による地域社会の活性化
	専任講師	李 黎 明	レーザを用いた癌細胞の診断・治療分野の活発な研究活動、医療フォトリソグラフィ分野における本学の知名度向上、当該分野の学生指導
18	助教授	唐 澤 直 樹	超短光パルス技術及び光パルスの非線形伝搬解析の分野で卓越した技術を持ち、フォトリソグラフィ結晶ファイバによる超広帯域光発生に関する解析・実験に関心が深い大学院生及び学部生の教育に大きく貢献
19	専任講師	小 川 正 浩	独自に開発したeラーニング教材と教室での対面授業を組合わせた積極的な英語教育、TOEICの対策教材のeラーニング化、科目等履修生への教育をとおして高大連携への取組みに貢献
	教 授	山 林 由 明	修学及び課外活動等の学生生活上の諸問題への積極的取組、1年生へのアドバイザー制度の導入、活動をとおして、学生が快適で健康的な生活を送れるよう指導及び支援に貢献

11. 奨学金受給状況

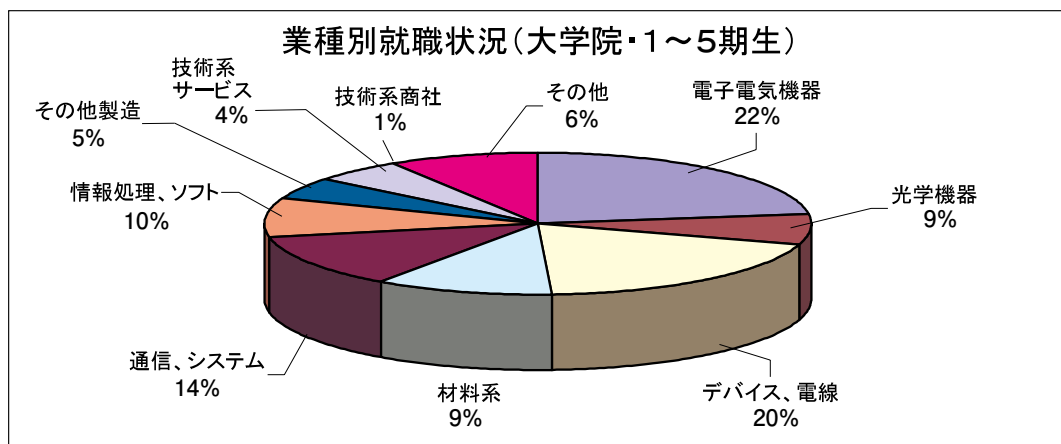
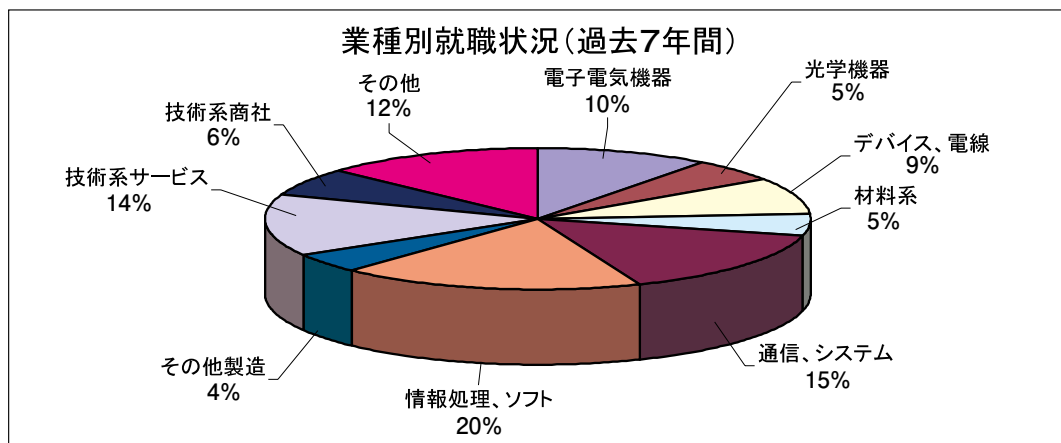
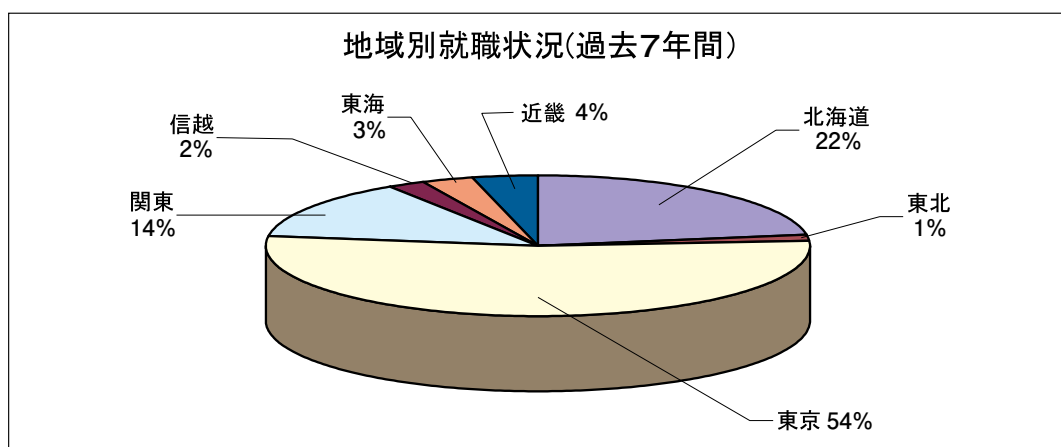
年 度	学年 区分	学 部					大 学 院						総計
		1 年	2 年	3 年	4 年	学部計	M1年	M2年	D1年	D2年	D3年	大学院計	
平成10年度	第一種	30				30							30
	第二種	15				15							15
	合 計	45				45							45
平成11年度	第一種	18	32			50							50
	第二種	55	35			90							90
	合 計	73	67			140							140
平成12年度	第一種	21	18	34		73							73
	第二種	29	62	43		134							134
	合 計	50	80	77		207							207
平成13年度	第一種	16	21	18	35	90							90
	第二種	42	41	69	43	195							195
	合 計	58	62	87	78	285							285
平成14年度	第一種	14	20	21	17	72	2					2	74
	第二種	54	48	43	62	207	4					4	211
	合 計	68	68	64	79	279	6					6	285
平成15年度	第一種	23	19	23	21	86	5	2				7	93
	第二種	66	61	52	42	221	11	4				15	236
	合 計	89	80	75	63	307	16	6				22	329
平成16年度	第一種	19	21	16	17	73	3	2	1			6	79
	第二種	66	74	61	45	246	1	9				10	256
	合 計	85	95	77	62	319	4	11	1			16	335
平成17年度	第一種	18	24	22	17	81	13	2	2			17	98
	第二種	84	74	77	55	290	7	1				8	298
	合 計	102	98	99	72	371	20	3	2			25	396
平成18年度	第一種	21	22	28	19	90	6	12		2		20	110
	第二種	71	92	75	72	310	7	7				14	324
	合 計	92	114	103	91	400	13	19		2		34	434
平成19年度	第一種	18	25	26	25	94	6	9	1		2	18	112
	第二種	64	75	94	79	312	5	7				12	324
	合 計	82	100	120	104	406	11	16	1		2	30	436

【資料提供：学生課】 各年度3月31日現在

12. 進路状況

年 度	卒 業 者 名	就職希望者 名	就 職 率 %	進 学 者 名
平成13年度	248	191	95.8	26
平成14年度	258	192	95.3	25
平成15年度	175	132	97.0	20
平成16年度	224	183	97.8	31
平成17年度	242	209	98.6	27
平成18年度	249	221	99.5	25
平成19年度	234	203	99.5	27

【資料提供：就職課】



13. 創立10周年記念事業

1. 記念事業の概要

(1) 10周年記念棟の建設と募金活動

延べ床面積2,000㎡の多目的複合施設を建設（総事業費5億円）。

建設費の一部は募金によるもので、募金総額は5300万円（20.3.31）であった。

(2) 記念誌の発刊

平成20年5月発刊。

(3) 記念式典

平成20年6月6日（開学記念日）に挙行。

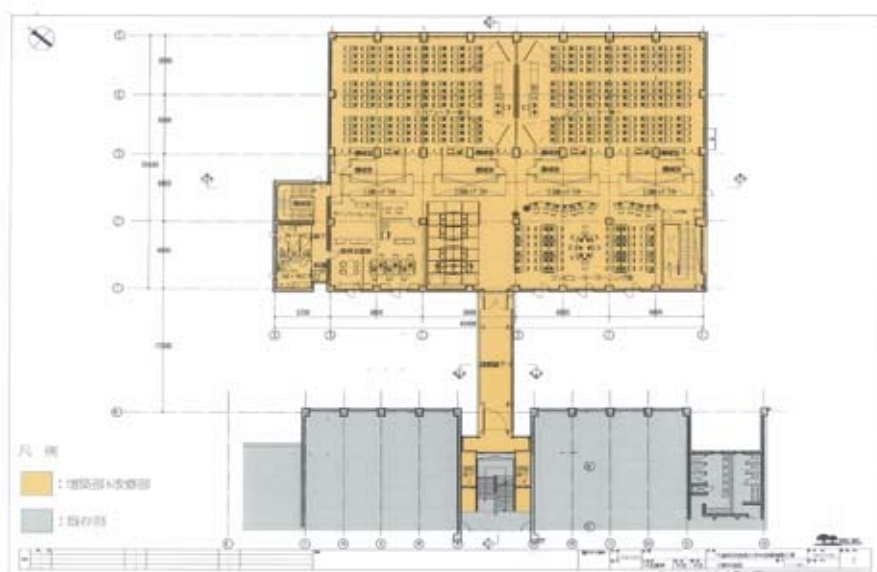
2. 記念事業実行体制

全体会議の下に4委員会を設置し、実行にあたった。



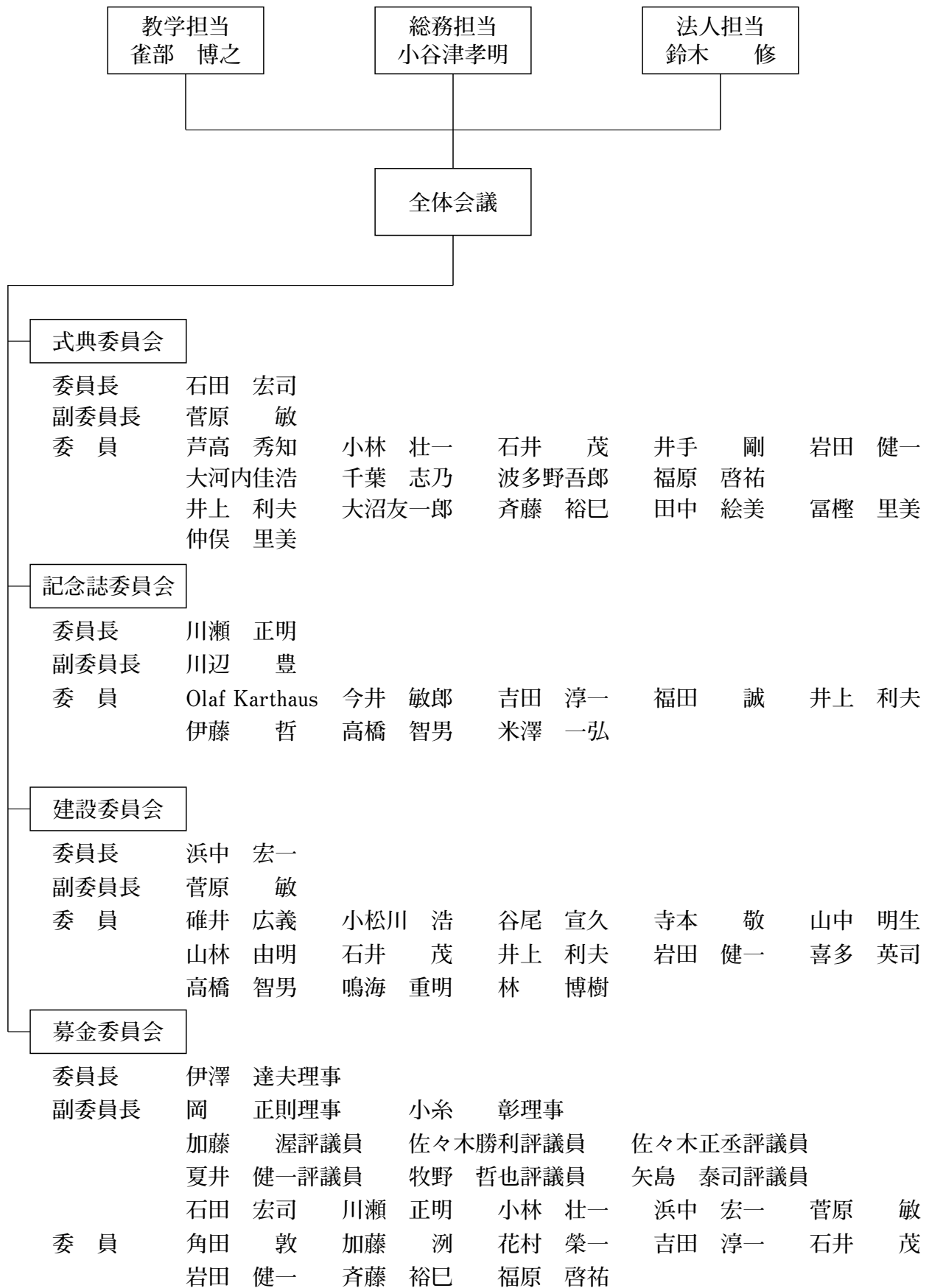
10周年記念棟

1 F：学生ホール



2 F：メディアホール

千歳科学技術大学開学10周年記念事業委員会名簿



14. 校章・校旗・校歌

千歳科学技術大学 校章・校旗（デザイン：篠塚正典）平成10年4月制定

千歳科学技術大学の頭文字「C」を基本にして、光科学の眩光をデザインしており、その鋭く四方に広がるシャープなラインは最先端技術を表し、また千歳を中核として世界に発信される光テクノロジーの広がりを象徴しています。



校 旗



校 章

千歳科学技術大学 校歌

- | | |
|--|--|
| 1 光の海を風がわたる
美々の森に四季を画く
いま ひらめきの橋に立てば
行手に明日が見える
究めるは光の神秘
世界の英知紡ぎつつ
集うわれらの C I S T
未来へすべての夢はここに | 2 千歳の土に足をふまえ
耳にとどく時代の流れ
いま 青空を仰ぎみれば
心は翼になる
翔び立てば光の浪漫
稜輝の虹を駆けあがる
若いわれらの C I S T
世界へすべての道はここに |
|--|--|

校歌作詞・作曲 寺島 尚彦

作曲家（作詞、編曲家として活躍）、東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。

本学校歌の制作にあたり、寺島先生自らが数度にわたり来学され本学学生とのインタビューを交えてイメージを創り、平成13年11月26日に制定されました。

*CIST（Chitose Institute of Science and Technology）とは本学の英語表記です。

千歳科学技術大学略年表

【財団法人千歳科学技術大学設立準備財団】

年 月 日	行 事 名
平成 7年11月28日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団の事前申請提出
12月11日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団設立発起人会開催
平成 8年 3月13日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団認可申請書を文部省に提出
26日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団認可
4月 5日	特定寄附金及び指定寄附金に関する指定申請
13日	教員候補者説明会
22日	第1回理事会・評議員会
5月16日	特定寄附金及び指定寄附金に関する指定認可
7月11日	都市計画法第37条第1項の建築確認申請
19日	都市計画法第37条第2項の建築確認認可
9月 5日	千歳市と「土地譲与契約」
13日	第2回理事会・評議員会 寄附金（現金個人369人・22,700千円・現金法人・1,043,376千円・現物11法人461点・223,124千円）
20日	第1次学校法人千歳科学技術大学寄附行為認可申請提出
26日	第1次千歳科学技術大学設置認可申請提出（大学）
30日	文部省が千歳科学技術大学寄附行為認可申請及び大学設置認可申請の両申請を受理
10月15日	大学設置・学校法人審議会に諮問（学校法人） 大学設置・学校法人審議会に諮問（大学）
11月14日	東急・鹿島・竹中特定共同企業体と建設工事（本部棟）請負契約 清水・日本国土特定共同企業体と建設工事（研究実験棟）請負契約 株式会社日本設計札幌支社と監査委託契約
12月 2日	校舎建設工事起工式（参加者69名） 起工披露式（参加者205名） 第3回理事会・評議員会
平成 9年 1月21日	大学設置・学校法人審議会-学校法人分科会による面接審査（大学）
24日	大学設置・学校法人審議会-学校法人分科会による面接審査（学校法人）
2月13日	「継続審査」の判定通知（学校法人） 「継続審査」の判定通知（大学）
20日	第4回理事会・評議員会
3月31日	ホトニクスバレー構想（概要）まとまる。
4月 1日	本部棟・研究実験棟建設工事継続
9日	地鎮の儀
5月27日	屋外付属施設建設工事（面積・342㎡） 学内LAN設備工事
6月 2日	構築物工事（総合グラウンド外8施設）
5日	図書購入（18,300冊） 教具購入（2,164点） 校具購入（2,462点） 備品購入（2,944点）
13日	第1回理事会・評議員会
25日	千歳科学技術大学設置認可申請追加書類・補正申請書提出（大学）
26日	学校法人千歳科学技術大学寄附行為認可申請提出
8月28日	ホトニクスワールド・コンソーシアム（PWC）設立
10月 2日	文部省大学設置分科会による実地調査（第1回）
29日	千歳科学技術大学設置認可申請に係る再補正申請書提出（大学）
31日	千歳市から大学設立創設財源補助金の受領
11月 7日	文部省大学設置分科会による実地調査（第2回）



12月 7日	教員予定者説明会
19日	学校法人千歳科学技術大学寄附行為認可 千歳科学技術大学設置認可 車輛購入（5点）
25日	第2回理事会・評議員会
平成10年 1月26日	電話加入権購入（11回線）
28日	公募推薦入試開始
30日	本部棟・研究実験棟建設工事竣工（引渡）
2月 1日	千歳科学技術大学使用開始
13日	前期一般学力入試実施
3月 6日	第3回理事会・評議員会
8日	後期一般学力入試実施
3月31日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団の解散及び残余財産の処分について文部省が認可
4月13日	平成10年度千歳市固定資産税（土地分）減免通知
5月 8日	平成11年度北海道不動産取得税（土地分）減免通知
平成11年 3月26日	第1回理事会・評議員会
3月31日	財団法人千歳科学技術大学設立準備財団解散

【学校法人千歳科学技術大学】

平成 9年12月19日	学校法人千歳科学技術大学寄附行為認可・千歳科学技術大学設置認可 辻岡昭氏初代理事長に就任
25日	第1回定例理事会・評議員会
平成10年 1月28日	公募推薦入試募集開始
2月13日	前期一般学力入試実施（受験者697名）
3月 6日	第2回定例理事会・評議員会
8日	後期一般学力入試実施（受験者173名）
4月 1日	千歳科学技術大学開学 佐々木敬介教授初代学長に就任
11日	第1回入学式（入学者273名） 宣誓 合志 憲一さん
5月26日	第1回定例理事会・評議員会
6月 6日	開学式・祝賀会（参集者約500名）（開学記念日）
7月16日	第2回定例理事会・評議員会
24日	第1回市民公開講座（参加者約120名）
8月 7日	オープンキャンパス1998
9月17日	第3回定例理事会・評議員会
25日	日本私立大学協会入会
10月 5日	佐々木敬介学長逝去
12日	先端有機ホトニクス物質と応用に関する国際会議（ICONO' 4）開催（参加者180名）
11月 4日	緒方直哉教授第2代学長に就任
5日	佐々木敬介学長を偲ぶ会（大学葬、参集者約600名）
18日	第4回定例理事会・評議員会
平成11年 2月18日	第5回定例理事会・評議員会
4月10日	第2回入学式（入学者277名） 宣誓 北 幹雄さん
5月27日	第1回定例理事会・評議員会
7月10日～11日	オープンキャンパス1999（第1回）
15日	第2回定例理事会・評議員会
9月 5日	オープンキャンパス1999（第2回）
16日	第3回定例理事会・評議員会
10月 2日～3日	第1回稜輝祭（学校祭）委員長 菊田直哉さん

	テーマ「Greate a new sensation (旋風を巻き起こす)」
12日～13日	第1回千歳光科学国際フォーラム (参加者108名)
12日	第1回佐々木記念賞授与 (学術奨励賞) 学術奨励賞・高橋 寛明さん・石岡 妃沙さん
11月18日	第4回定例理事会・評議員会
平成12年 2月17日	第5回定例理事会・評議員会
28日	常陸宮殿下・常陸宮妃殿下ご来学
3月10日	マルチメディア・モデルキャンパス展開事業公開講演会 (参加者120名)
4月 7日	第1回臨時理事会
8日	第3回入学式 (入学者168名) 宣誓 小山 栄紀さん
5月24日	第1回定例理事会・評議員会
6月	雀部博之教授 電子情報通信学会「フェロー」叙任
7月19日	第2回定例理事会・評議員会
8月	インターンシップの実施
5日	オープンキャンパス2000開催 (参集者125名)
9月5日～8日	ISOM2000光メモリー国際会議開催 (参加者約400名)
23日～24日	第2回稜輝祭 (学校祭) 委員長 菊田直哉さん テーマ「Bless my soul (魂の鼓動)」
28日	第3回定例理事会・評議員会
10月 5日	第2回佐々木記念賞授与 (学術奨励賞) 学術奨励賞・安藤 美和子さん・伊川 英男さん
11月27日	第4回定例理事会・評議員会 雀部博之教授 表面科学技術学会「表面科学技術賞」受賞
平成13年 1月23日	第2回市民公開講座 (参加者約200名)
2月15日	第5回定例理事会・評議員会
26日	学内企業説明会 (出展企業30社)
4月 7日	第4回入学式 (入学者235名) 宣誓 横井 伸浩さん
5月25日	第1回定例理事会・評議員会
6月14日	吉田淳一教授「平成13年度全国発明表彰発明協会会長賞」受賞 (吉田淳一ほか3名)
22日	大学院設置認可申請書提出
28日	学校法人千歳科学技術大学寄附行為変更認可申請書提出
7月18日	第2回定例理事会・評議員会
8月 4日	オープンキャンパス2001 (第1回)
9月 6日	第2回千歳光科学国際フォーラム (参加者250名)
21日	第3回定例理事会・評議員会
22日～23日	第3回稜輝祭 (学校祭) 委員長 吉田昌史さん テーマ「全員集合!!」
23日	オープンキャンパス2001 (第2回)
10月 5日	第3回佐々木記念賞授与 (学術奨励賞) 学術奨励賞・四十物 孝憲さん・土谷 麻依子さん
11月26日	校歌制定 作詞・作曲 寺島 尚彦氏 第4回定例理事会・評議員会
12月20日	大学院設置認可 学校法人千歳科学技術大学寄附行為変更認可
平成14年 1月22日	第3回市民公開講座
2月19日	学内企業説明会 (出展企業49社)
20日	第5回定例理事会・評議員会
3月 6日	平成13年度教育研究貢献賞授与 小林壮一教授・山中明生助教授・小松川浩助教授
16日	第1回学位記授与式 (学位記授与者248名) 代表 物質光科学科 ・堀岡 良太さん 代表 光応用システム学科 ・杉山 秀則さん

	答辞 永井 拓史さん
	第1回大学同窓会設立総会 小口敬太郎氏初代会長に就任
	第1回謝恩会
3月31日	緒方直哉教授学長退任
4月 1日	雀部博之教授第3代学長に就任
6日	第5回入学式・大学院第1回入学式（入学者268名） 宣誓 中原 誠さん
17日	第1回臨時理事会・評議員会
5月22日	第1回定例理事会・評議員会
24日	春の環境整備実施 吉田淳一教授「平成14年度 I E C－A P C 議長賞」受賞
6月 6日	大学院開設記念祝賀会
29日	第2回大学同窓会総会
7月 9日	ITU-T国際会議ワークショップ本学を中心に開催（参加者900名）
8月 3日	オープンキャンパス2002（第1回）（参集者約100名）
9月21日～22日	第4回稜輝祭（学校祭）委員長 新田智恵さん テーマ「真輝一点～Dream Lights～」
22日	オープンキャンパス2002（第2回）
24日	メディアコンサルタント業務開始
26日	第3回定例理事会・評議員会 川瀬正明教授 電子情報通信学会「フェロー」叙任
10月6日～7日	第3回千歳光科学国際フォーラム（参加者92名）
7日	第4回佐々木記念賞授与 奨励賞・平田 智子さん・知場 大記さん 貢献賞・村岡 利晴さん・五十嵐一哉さん 学術賞・小山田崇人さん・杉山 秀則さん
11月 8日	企業と大学の情報交換会 札幌会場（参加企業25社）
20日	企業と大学の情報交換会 東京会場（参加企業53社）
25日	第4回定例理事会・評議員会
平成15年 1月10日	大学同窓会会報創刊
12日	サンデー毎日に記事掲載される。 千歳科学技術大学は光科学の分野で成功をあげていることで知られている。地方で充実した研究、教育をしている大学は、もっと注目されてもいい。小さいながらも独自のカラーを持つ大学がこれから伸びていくはずです。（名古屋大学大学院教授 梅津和郎氏コメント）
18日～19日	大学入試センター試験会場
25日	第4回市民公開講座
2月19日	学内企業説明会（出展企業65社）
20日	第5回定例理事会・評議員会
24日	産学連携交流事業「研究成果社会還元セミナー」
3月15日	第2回学位記授与式（学位記授与者258名） 代表 物質光科学科 ・長谷川 智晴さん 代表 光応用システム学科 ・佐藤 智典さん 答辞 安藤 美和子さん
	第2回謝恩会
26日	平成14年度 教育研究貢献賞授与 安達千波矢助教授・谷尾宣久専任講師・福田誠専任講師・小田尚樹専任講師 安達千波矢助教授「第2回船井情報科学振興賞」受賞
4月 5日	第6回入学式・大学院第2回入学式（入学者287名） 宣誓 川本 裕太さん
	第1回父母・保護者説明会
5月19日	第1回臨時理事会
22日	第1回定例理事会・評議員会
29日	雀部博之教授 高分子学会「平成14年度高分子科学功績賞」受賞

6月 1日	産学官連携推進室発足 安達千波矢助教授 nano tach 2004 ITエレクトロニクス部門「ナノテク大賞2004」受賞
7月30日	本部棟学舎に大学名が入りライトアップされる。
8月 2日	オープンキャンパス2003（第1回）（参集者約85名）
4日	夢・化学21（一日体験入学）
9月 1日	産学連携交流事業「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」
25日	平成15年度文部科学省実施「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」が採択される。 第3回定例理事会・評議員会
10月 6日	第5回佐々木記念賞授与 奨励賞・中野谷 一さん・横井 伸浩さん 貢献賞・本郷 順一さん・学生会執行委員会 学術賞・合志 憲一さん・堀内 大嗣さん
11日～12日	第5回稜輝祭（学校祭）委員長 本田昌也さん テーマ「意気軒昂」
12日	オープンキャンパス2003（第2回）
23日	第3回大学同窓会総会
11月18日	企業と大学の情報交換会 札幌会場（参加企業24社）
27日	第4回定例理事会・評議員会
28日	企業と大学の情報交換会 東京会場（参加企業48社）
12月 3日	第4回千歳光科学国際フォーラム（参加者84名）
10日	大学同窓会会報第2号発刊（会報名「美々の森」と命名）
18日	大学院棟施設整備工事着工 大学院棟施設整備工事安全祈願祭
平成16年 1月14日	大学院棟施設整備工事基礎杭着工
17日～18日	大学入試センター試験会場
2月17日	学内企業説明会（出展企業72社）
19日	第5回定例理事会・評議員会
21日	サイエンス会議
3月10日	平成15年度教育研究貢献賞授与 Olaf Karthaus助教授・高岡 詠子専任講師
20日	第3回学位記授与式（学位記授与者258名） 代表 物質光科学科 ・平田 智子さん 代表 光応用システム学科 ・土谷 麻依子さん 代表 大学院修士課程 ・杉山 秀則さん 答辞 四十物 孝憲さん 第3回謝恩会
4月 1日	第4回大学同窓会総会 齊藤岳人氏第2代会長に就任
10日	第7回入学式・大学院第3回入学式（入学者238名） 宣誓 小幡 はるなさん
5月14日	第1回定例理事会・評議員会
6月26日	オープンキャンパス2004（第1回） 安達千波矢助教授 応用物理学会「第1回有機分子・バイオエレクトロニクス分科会論文賞」受賞
7月20日	産学連携交流事業「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」
22日	第2回定例理事会・評議員会
8月 1日	就職課が研究実験棟2階に移動
2日	大学院棟施設整備工事竣工（引渡）
3日	大学院棟施設使用開始 オープンキャンパス2004（第2回）
21日	大学等開放推進事業「大学Jr.サイエンス事業」
28日	大学等開放推進事業「大学Jr.サイエンス事業」
9月 4日	大学等開放推進事業「大学Jr.サイエンス事業」

- 9日 大学院棟竣工記念式典・祝賀会
- 13日 本学大学院博士後期課程に初の国費留学生入学
健康増進法の施行に基づく「館内全面禁煙」開始
- 18日～19日 第6回稜輝祭（学校祭）委員長 坂本竜也さん テーマ「新装開店」
- 19日 オープンキャンパス2004（第3回）
- 29日 平成16年度文部科学省選定事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」が採択（2件）される。
- 10月 5日 第6回佐々木記念賞授与
奨励賞・田中 敏博さん ・石田 朝千さん
貢献賞・伊藤大志（弓道部）さん ・バスケットボール部
学術賞・澤田 昌幸さん ・江口 薫さん
- 19日～20日 第5回千歳光科学国際フォーラム（参加者72名）
- 11月 9日 企業と大学の情報交換会 札幌会場（参加企業33社）
- 25日 第4回定例理事会・評議員会
- 26日 企業と大学の情報交換会 東京会場（出席企業54社）
- 12月14日 CISTテレビコマーシャルの放送開始
- 平成17年 1月22日～23日 大学入試センター試験会場
- 2月14日 学内企業説明会（出展企業90社）
- 17日 第5回定例理事会・評議員会
- 19日 サイエンス会議
数学・物理eラーニング展開セミナー
- 3月 9日 平成16年度教育研究貢献賞授与
川辺豊教授・長谷川誠専任講師
- 19日 第4回学位記授与式（学位記授与者224名）
代表 物質光科学科 ・中野谷 一さん
代表 光応用システム学科 ・佐藤 威さん
代表 大学院博士前期課程 ・江口 薫さん
答辞 横井 伸浩さん
第4回謝恩会
- 28日 オープンキャンパス2004（第4回）
- 4月 9日 第8回入学式・大学院第4回入学式（入学者271名）
宣誓 吉岡 毅さん
- 5月27日 第1回定例理事会・評議員会
- 6月15日 吉田淳一教授 「IEC1906 Award」受賞
- 6月25日 オープンキャンパス2005（第1回）
- 7月14日 本学が就職に強い大学として「週刊新潮」、「週刊エコノミスト」に取り上げられる。
- 21日 第2回定例理事会・評議員会
- 8月 3日 オープンキャンパス2005（第2回）
- 31日 辻岡昭氏理事長退任（最高顧問に就任）
- 9月 1日 小谷津孝明氏第2代理事長に就任
- 20日 コンピュータ・ラーニング・ルーム開設
- 10月 5日 第7回佐々木記念賞授与
奨励賞・泉 和宏さん ・正木 正嗣さん
貢献賞・辻 直也さん ・弓道部
学術賞・中井 直也さん
- 8日～9日 第7回稜輝祭（学校祭）委員長 前山龍介さん
テーマ「送りバント～未来に送る千歳の光～」
- 9日 オープンキャンパス2005（第3回）
- 23日 英語版ホームページ開設
- 29日 第1回父母懇談会
本学学生 小山田崇人さん 第19回応用物理学会「講演特別賞」受賞
本学学生 合志憲一さん「ポスター賞」受賞

- 11月 2日 「週刊東洋経済」の特集で本学の就職率が紹介される。
- 11日 企業と大学の情報交換会 札幌会場（出席企業42社）
- 24日 第4回定例理事会・評議員会
- 25日 企業と大学の情報交換会 東京会場（出席企業80社）
- 28日 「週刊女性自身」の特集で本学が「活力が高い大学」として紹介される。
- 12月15日 表千家茶道教授福永宗碧氏より寄付金の受領
- 平成18年 1月21日～22日 大学入試センター試験会場
- 13日 学内企業説明会（出席企業146社）
- 18日 サイエンス会議
CISTサイエンスフォーラム（現代GP）
CISTeラーニングフォーラム（特色GP・現代GP）
- 23日 第5回定例理事会・評議員会
- 3月 4日 第5回市民公開講座
- 8日 平成17年度教育研究貢献賞授与
三戸慶一教授・今井敏郎助教授・李 黎明専任講師・碓井広義助教授
- 18日 第5回学位記授与式（学位記授与者243名）
代表 物質光科学科 ・田中 敏博さん
代表 光応用システム学科 ・石田 朝千さん
答辞 坂口 貴子さん
第5回謝恩会
- 25日 オープンキャンパス2005（第4回）
長谷川誠准教授 電子情報通信学会「2005年度活動功労表彰」受賞
- 4月 1日 雀部博之教授学長再任
信州大学と共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
- 8日 第9回入学式・大学院第5回入学式（入学者243名）
宣誓 三浦 隆治さん
- 14日 独立行政法人メディア教育開発センターと共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
- 5月29日 第1回定例理事会・評議員会
- 7月 2日 オープンキャンパス2006（第1回）
- 20日 第2回定例理事会・評議員会
- 8月 2日 オープンキャンパス2006（第2回）
- 9月21日 第3回定例理事会・評議員会
- 23日 第8回稜輝祭（学校祭）委員長 佐藤健二さん
テーマ「燃年祭歳～ねんねんさいさい～」
オープンキャンパス2006（第3回）
- 10月 5日 第8回佐々木記念賞授与
奨励賞・田中 俊輔さん・佐藤加那子さん・石川 智也さん
貢献賞・大河内佑貴さん
学術賞・宮田憲太郎さん
- 28日 第2回父母懇談会
- 11月14日 学校法人運営調査（文科科学省）
- 10日 企業と大学の情報交換会 札幌会場（出席企業54社）
- 20日 第4回定例理事会・評議員会
- 21日 企業と大学の情報交換会 東京会場（出席企業98社）
- 27日～28日 第7回千歳光科学国際フォーラム（参加者146名）
- 28日～29日 千歳国際GPフォーラム
- 平成19年 1月20日～21日 大学入試センター試験会場
- 2月13日 学内企業説明会（出席企業185社）
- 17日 サイエンス会議
CISTサイエンスフォーラム（現代GP）
- 22日 第5回定例理事会・評議員会
- 3月 6日 高岡詠子専任講師 情報処理学会「平成18年度山下記念研究賞」受賞

7日	平成18年度教育研究貢献賞授与 唐澤直樹助教授
17日	第6回学位記授与式（学位記授与者248名） 代表 物質光科学科 ・ 泉 和宏さん 代表 光応用システム学科 ・ 坂本 堯也さん 答辞 冨田 量宏さん 第1回学生表彰 「優良賞」（学位記授与式） 物質光科学科 ・ 泉 和宏さん・歌川 馨太朗さん ・布施 舞さん 光応用システム学科 ・ 冨田 量宏さん・坂本 堯也さん ・佐藤 卓さん
	第6回謝恩会
24日	オープンキャンパス2006（第4回）
4月 7日	第10回入学式・大学院第6回入学式（入学者201名） 宣誓 長屋 則宏さん
26日	文部科学省に総合光科学部設置届出書提出
28日	第1回定例理事会・評議員会
29日	川瀬正明教授紫綬褒章受章
6月 6日	北星学園大学と共同研究（eラーニング関連）協力協定の締結
11日	平成19年度文部科学省委託事業「先導的教育情報化推進プログラム事業」が採択される。
23日	オープンキャンパス2007（第1回）
25日	文部科学省が総合光科学部設置届出受理
8月 2日	平成19年度文部科学省選定事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム事業（現代GP）」が採択される。
4日	オープンキャンパス2007（第2回）
9月16日	第9回稜輝祭（学校祭）委員長 藤上亘さん テーマ「自遊自在」
22日	オープンキャンパス2007（第3回）
10月 9日	第9回佐々木記念賞授与 奨励賞・岡田 孟矩さん・福田 智之さん 貢献賞・佐藤加那子さん（文芸部）・理工工房 学術賞・西出 順一さん・松原 悠平さん
11月29日～30日	第8回千歳光科学国際フォーラム（参加者120名）
平成20年 1月19日～20日	大学入試センター試験会場
2月21日	第4回定例理事会・評議員会
23日	I C T活用教育研究フォーラム開催（参加者95名）
3月 7日	平成19年度教育研究貢献賞授与 小川正浩専任講師・山林由明教授
15日	第7回学位記授与式（学位記授与者234名） 答辞 田中 俊輔さん 第2回学生表彰 「優良賞」（学位記授与式） 物質光科学科 ・ 佐藤加那子さん・田中 俊輔さん 光応用システム学科 ・ 石川 智也さん・石橋 克也さん 「善行賞」 光応用システム学科 ・ 秋山 慶造さん
	第7回謝恩会
22日	オープンキャンパス2007（第4回） 第6回市民公開講座

創立10周年記念棟建設資金御芳名

(平成20年 4 月15日現在)

10周年記念募金者芳名録（法人）

（あいうえお順）

あつまバス株式会社
 株式会社ADEKA
 株式会社アルファシステムズ
 アルプス電気株式会社
 株式会社イーテック
 有限会社井上書店
 株式会社ウレタン工業
 株式会社エイエルエステクノロジー
 株式会社エー・アール・シー
 ACJ株式会社
 株式会社エクスプローラ
 NTTエレクトロニクス株式会社
 エヌ・ティ・ティ・ワールドエンジニアリングマリン株式会社
 株式会社エム・ソフト
 有限会社岡本光学加工所
 株式会社オプト・システム
 株式会社カーネルコンセプト
 株式会社カミノ
 カンタツ株式会社
 北ガスジェネックス株式会社
 北日本石油株式会社 苫小牧支店
 株式会社共立鉄工所
 株式会社協和エクシオ
 極東高分子株式会社
 株式会社熊谷造園
 株式会社クリーン開発
 株式会社クロステック
 江東電気株式会社
 株式会社弘報案内広告社
 株式会社弘和建设工業
 五建工業株式会社 札幌本社
 坂本造園株式会社
 佐藤興業株式会社 北海道支店
 三友プラントサービス株式会社
 シグマ光機株式会社
 株式会社システムエービーシー
 株式会社システムディ
 株式会社システムブレイン
 株式会社島津理化
 株式会社ジャパンテクニカルソフトウェア
 株式会社正電社
 株式会社進研アド
 新興サービス株式会社
 株式会社信光社
 新日本監査法人
 株式会社スズキ技研
 住電オプコム株式会社

住電通信エンジニアリング株式会社
 住電ハイプレシジョン株式会社
 住友大阪セメント株式会社
 株式会社セイコウ
 セイコーエプソン株式会社
 セコム株式会社
 セラテックジャパン株式会社
 総合警備保障株式会社
 株式会社ソフトウェアサービス
 大宏電機株式会社
 株式会社ダイヤ書房
 株式会社竹中工務店 北海道支店
 株式会社タナカ
 千歳印刷株式会社
 株式会社ツジデン
 株式会社つうけん
 有限会社天使印刷所
 東京通建株式会社
 東京美装興業株式会社 千歳支店
 株式会社東洋精機製作所
 日興ソフトウェア株式会社
 日興電気通信株式会社
 日興ビジネスサポート株式会社
 株式会社ニッコクトラスト
 日本コムシス株式会社
 株式会社日本コンピュータ開発
 株式会社日本製鋼所
 日本通信電材株式会社
 日本電波工業株式会社
 ニューソン株式会社
 株式会社ニュートン
 ネットソフト株式会社
 株式会社白山製作所
 パナソニックエレクトロニックデバイス日東株式会社
 浜松ホトニクス株式会社
 株式会社ビーコンインフォメーションテクノロジー
 東日本リフトサービス株式会社
 株式会社日立国際電気
 日立コンピュータ機器株式会社
 株式会社日立製作所 北海道支社
 日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社
 株式会社日立ビルシステム 北海道支社
 株式会社VSN
 株式会社フォーラムエンジニアリング
 株式会社フジキン
 株式会社富士通ソーシアルサイエンスラボラトリ
 有限会社プロ・アシスト

10周年記念募金者芳名録（法人）

株式会社ベルックス
 北信濃コミュニティ協議会
 医療法人社団いずみ会 北星病院
 株式会社北洋銀行 千歳中央支店
 北海道日興電気通信株式会社
 株式会社北海道銀行
 北海道中央バス株式会社 千歳営業所
 北海道電力株式会社 札幌支店
 株式会社北海道ワーク
 千歳国際ホテル株式会社 ホテル日航千歳
 有限会社マスコンシステムズ
 松尾工業株式会社
 株式会社松本鉄工所
 三菱電機ビルテクノサービス株式会社
 ミネベア株式会社
 美和電気工業株式会社 苫小牧支店
 株式会社ユー・エス・イー
 株式会社ユー・ドム
 株式会社ライセンスアカデミー 札幌支社
 株式会社竜巧社ネットウエア
 株式会社ルーセントスクエア
 株式会社ルネサス北日本セミコンダクタ

10周年記念募金者芳名録（個人）

（あいうえお順）

相澤 克美	伊藤 佑輔	奥村 喜重	木村 公幸
相澤 正信	井上 利夫	小田 尚樹	木村進之介
相田 英紀	今井 順一	小田 久哉	木村 英子
会田 雄介	今井 敏郎	越智 昭広	木村 博嗣
青沼 光雄	今福 和子	小幡 日嘉	木村 雅史
青野 強	今村 陽一	小原 哲也	木元 康弘
青柳 秀明	岩井 武	小原 利道	楠本 鋭一
青山 朋史	岩隈 正博	小山田崇人	工藤 秀治
赤羽 正雄	岩館 敏幸	帰山 雅人	倉島 毅
阿河 路夫	岩村 麻希	角田 敦	栗原 司
秋田 雅人	岩本 陽介	蔭川 雄二	栗山 創希
秋山 正命	上田 実	柏倉 文則	黒光 翔太
浅沼千佳子	氏家 正樹	春日 健	桑島 洋志
旭 幸一	臼井 雅弘	片山 勝範	桑田 勝裕
芦高 秀知	歌川 一人	片山 新一	小出 清孝
足立 和舟	歌川 隆博	加藤 昭紀	小糸 彰
穴田 雄一	内生蔵朗子	加藤 敦紀	小島 一則
阿部 一文	打越カンナ	加藤 聡子	児玉 貴史
阿部 健治	内田 瑠梨	加藤 悟美	小玉 将貴
阿部 健	梅村 明弘	加藤 茂範	後藤 順子
荒木 一人	江口 真史	加藤 慎也	後藤 利昭
嵐 裕治	海老江邦雄	加藤 太一	小林 明美
有城 範生	蝦名 隆義	加藤 典子	小林 壮一
安藤 正顕	遠藤 仁	金澤 広司	小林 俊晴
五十嵐秀也	及川 実	金森 孝道	小林 宏章
池下 敏清	王 建康	金谷 健一	小林 誠
池田 早苗	大久保 肇	金子 俊彦	小堀内 浩
伊澤 達夫	大久保正己	兼平 久夫	小松 昭博
石井 茂	大倉 博	蒲谷 利行	小松川 浩
石川季子夫	大河内佳浩	鎌田 忠美	小谷津和矢
石川 展之	大澤 健一	亀田 秀夫	小谷津孝明
石川 洋	大高 弘二	唐澤 直樹	今野 正吾
石川 雅洋	大沼友一郎	川合 敏雄	今野 靖
石川 涼三	大畑 雅敬	川上 勝	今野 泰宏
石田 宏司	近江 重正	川口 大介	斉藤 榮史
石田 絢子	大森 義昭	川口 雄二	齋藤 一弥
石田 哲也	大矢 花	川瀬 正明	齋藤 恒一
石田 敏之	岡内 義考	川畑 和廣	齋藤 誠二
石田 英樹	小笠原俊夫	川橋 千春	齋藤 哲也
泉 純一	岡田 忠義	川辺 豊	齋藤 裕巳
板倉 俊久	岡部いづみ	河村 直樹	斉藤 光雄
井手 剛	岡本 栄治	川村 正秀	坂井 賢一
伊藤 克人	岡本 隆幸	川本 裕太	坂口 俊輔
伊藤 哲進	小川 聡	菊池 圭介	坂本 哲雄
伊藤 進	小川 英和	喜多 英司	佐川 克志
伊藤 孝子	小川 真	北畑 敦史	佐川 孝義
伊藤千鶴枝	隠岐 義毅	木葉 敏夫	佐々木勝利

10周年記念募金者芳名録（個人）

（あいうえお順）

佐々木 智	関根 貢	土谷麻依子	長谷川雄一	本多 章	柳谷 透
佐々木 信一	芹澤 岳志	坪田 弘	長谷川 豊	本多 英二	築田 俊幸
佐々木 徹	十河 人士	手塚 誠二	島 雅彦	本間 教嗣	矢橋 富士夫
佐々木 亨	曾根本 晋二	寺島 慶	島山 光夫	前田 正憲	矢野 哲夫
佐々木 亨	高岡 詠子	寺本 敬	畑中 広	前山 清一	藪内 孝光
佐々木 利明	高島 克文	土井 伸一	花村 榮一	政田 祐子	矢部 敏信
佐々木 啓文	高島 秀聡	土肥 守	浜田 幹悦	増子 仁	山内 良司
佐々木 庸二	高島 幸雄	富樫 建太	浜田 実穂	升田 和夫	山川 広人
笹嶋 豊	高梨 恵策	富樫 里美	浜中 宏一	松崎 正信	山川 洋二
雀部 博之	高野 猛	戸田 裕之	早坂 光正	松崎 康一	山口 頼彦
笹谷 一典	高橋 敦生	戸沼 幹郎	林 勝則	松田 憲一	山崎 淳
佐藤 勝典	高橋 功	内藤 憲男	林 知幸	松田 実	山崎 卓
佐藤 健一	高橋 悦	中井 雅司	林 博樹	松田 良枝	山崎 廣行
佐藤 賢太	高橋 幸一	中里 洋平	林 康弘	松橋 保美	山下 智晃
佐藤 順二	高橋 収一	中嶋 隆昭	原 徹弘	松原 和義	山田 繁
佐藤 正	高橋 清一郎	中島 辰美	春國 容樹理	松原 光憲	山中 明生
佐藤 信男	高橋 千秋	中田 徹	日高 重昭	松村 あや子	山林 由明
佐藤 春光	高橋 智男	長橋 徳幸	平寄 謙	松本 あや子	山森 一輝
佐藤 廣也	高橋 裕昭	長橋 翔	平野 一郎	松本 淳一	山森 義彦
佐藤 充	高橋 寛史	中原 広	平野 克裕	馬 信行	横濱 富夫
佐藤 裕司	高橋 広岳	長原 好伸	平野 浩	丸 琢磨	吉岡 猛
佐藤 由晶	高橋 優	仲俣 里美	福岡 雅晴	丸山 大志	吉岡 三彌
佐藤 芳文	高橋 正和	中村 孝幸	福田 和彦	圓山 孝史	吉田 周二
佐野 政則	高橋 道治	中村 陸	福田 誠	岬 長敏	吉田 淳一
猿田 幸雄	高橋 裕人	長屋 正志	福田 保文	三澤 和史	吉田 明
澤田 毅	高本 恵介	中谷 裕典	福永 宗碧	三品 弘光	吉田 昌史
柴田 誠	武井 哲也	那須 康広	藤井 秀人	宮島 彰久	吉谷 一弘
澁谷 直人	竹崎 薫	奈良 信昭	藤兼 正啓	宮本 南津子	米澤 黎明
島 恒夫	竹田 弘肇	成田 朋樹	藤木 健一郎	明田 善行	李 若井
島尻 篤	竹中 聡	成田 悠佑	藤沢 和彦	三好 研二	若槻 千寿枝
島田 和明	武花 真基	鳴海 重明	藤澤 進	宗田 敏之	渡辺 章
下村 篤子	田尻 豊	西方 仁司	藤田 公基	村井 一男	渡辺 敏彦
莊司 功裕	下 明寛	西川 亮	藤田 昇	村上 大介	渡辺 知宜
生水 賢一	田中 絵美	西島 良夫	藤巻 亘	村上 雅規	渡辺 信幸
白戸 紀久雄	田中 敏博	二本柳 勇	藤原 光則	村上 深雪	渡辺 弘幸
白木 論	田中 充	丹羽 秀雄	二又 忠一	村瀬 典子	渡辺 文子
菅原 廉介	田中 康勝	布村 和義	舟生 佐智悦	村上 雅樹	渡辺 不二夫
菅原 敏	谷尾 宣久	野澤 邦彦	古川 健博	村田 正俊	渡邊 敦雄
杉森 光	田畑 圭一	野村 勝夫	古林 博文	茂木 修	和田 文幸
鈴木 修	玉川 美和子	野村 俊基	文屋 千鶴子	元木 幸浩	
鈴木 崇弘	田村 進	芳賀 耕生	細川 雅弘	森田 博勝	
鈴木 年男	千田 義彦	橋本 利幸	堀井 泰輝	安瀬 美智子	
鈴木 豊文	千田 志乃	橋本 麻美	堀内 大嗣	保原 憲司	
清野 悟史	千葉 公儉	長谷川 貢一	堀 清志	柳町	
瀬川 好太郎	張 眞己	長谷川 茂夫	堀部 喜三男		
関根 榮	辻				

D V D 版 目 次

1. 10周年記念誌本編全編
2. 大学報（第1号から第20号）
3. 自己点検評価資料
 - （1）平成14年度
 - （2）平成17年度
 - （3）平成19年度
4. 大学パンフレット
 - （1）入試編……大学案内（平成10年度～平成19年度）
 - （2）入試編……C I S T ドリーム（平成15年度～平成19年度）
 - （3）就職編……就職ガイド（平成10年度～平成19年度）
5. 卒業記念
 - （1）平成13年度（記念アルバム・謝恩会集合写真）
 - （2）平成14年度（記念アルバム）
 - （3）平成15年度（記念アルバム）
 - （4）平成16年度（記念アルバム）
 - （5）平成17年度（記念アルバム・謝恩会集合写真）
 - （6）平成18年度（謝恩会集合写真）
 - （7）平成19年度（謝恩会集合写真）
6. 新聞で見る開学準備から現在まで
 - （1）学部は「融合理工」「総合情報科学」……平成7年4月8日（千歳民報）
 - （2）名称は「千歳科学技術大学」……平成7年7月12日（千歳民報）
 - （3）市民説明会始まる……平成7年8月29日（北海道新聞）
 - （4）文部省がおおむね了解……平成7年11月25日（千歳民報）
 - （5）財団設立発起人会……平成7年12月9日（千歳民報）
 - （6）設立準備財団第1回理事会……平成8年4月23日（北海道新聞）
 - （7）文部省に認可申請書提出……平成8年9月21日（千歳民報）
 - （8）準備財団が設計図を提示……平成8年10月26日（千歳民報）
 - （9）学生募集委員会発足へ……平成8年11月26日（北海道新聞）
 - （10）千歳科学技術大学起工式……平成8年12月3日（北海道新聞）
 - （11）学生募集要項きまる……平成9年12月20日（千歳民報）
 - （12）入試合格者は448人……平成10年3月26日（千歳民報）
 - （13）初代学長佐々木氏が死去……平成10年10月7日（千歳民報）
 - （14）便数少ない路線バス……平成11年1月6日（北海道新聞）
 - （15）科技大「稜輝祭」にぎわう……平成11年10月4日（千歳民報）
 - （16）千歳科技大に大学院……平成11年10月27日（千歳民報）
 - （17）広がる千歳科技大のインターンシップ……平成12年3月12日（千歳民報）
 - （18）無料シャトルバス運行……平成12年3月21日（千歳民報）
 - （19）千歳科技大の五十嵐さんインカレへ……平成12年7月25日（北海道新聞）
 - （20）初の市民公開講座……平成13年1月16日（北海道新聞）
 - （21）2.4倍の狭き門に挑む……平成13年2月5日（千歳民報）

- (22) 定員割れ、大幅に改善……平成13年4月5日（千歳民報）
- (23) 第2回千歳光科学国際フォーラム……平成13年8月10日（千歳民報）
- (24) 快挙！全国で6位に……平成13年8月28日（千歳民報）
- (25) 東京と札幌で情報交換会……平成14年12月2日（千歳民報）
- (26) 緒方学長が最終講義……平成14年3月11日（千歳民報）
- (27) 知名度アップが急務……平成14年3月6日（北海道新聞）
- (28) 千歳科技大で初の卒業式……平成14年3月16日（千歳民報）
- (29) 就職内定率95%……平成14年3月25日（千歳民報）
- (30) 入学者3年ぶりに定員を上回る……平成14年4月2日（千歳民報）
- (31) 校歌の額、後輩たちへ……平成14年4月15日（千歳民報）
- (32) 科技大の名誉教授に……平成14年4月18日（北海道新聞）
- (33) 科技大「就職に強い」お墨付き……平成15年1月29日（千歳民報）
- (34) 千歳の雪原で「両面」発電開始……平成15年2月19日（北海道新聞）
- (35) 科学の面白さ伝えたい……平成15年7月3日（北海道新聞）
- (36) インターンシップを単位認定……平成15年8月5日
- (37) 電子学習システム導入……平成15年8月23日（千歳民報）
- (38) 大学院博士課程を設置……平成15年10月17日（北海道新聞）
- (39) 「小さな親切」運動実行章受章……平成15年11月7日（千歳民報）
- (40) あす一般入試……平成16年2月2日（千歳民報）
- (41) 熱気帯びる学内企業説明会……平成16年2月19日（千歳民報）
- (42) e-ラーニング展開セミナー……平成16年2月22日（千歳民報）
- (43) 入学式（目標見つけ、個性磨け）……平成16年4月12日（千歳民報）
- (44) 教育連携講座（光科学に興味津々）……平成16年7月21日（千歳民報）
- (45) オープンキャンパスに100人……平成16年8月4日（千歳民報）
- (46) 第6回稜輝祭（ご機嫌だねソーラーカー）……平成16年9月20日（千歳民報）
- (47) 初の国費留学生……平成16年9月28日（千歳民報）
- (48) 第5回千歳光科学国際フォーラム……平成16年10月20日（千歳民報）
- (49) 2年ぶりに定員満たす……平成17年4月2日（千歳民報）
- (50) 新理事長に小谷津孝明氏……平成17年7月26日（千歳民報）
- (51) ラーニングルーム開設……平成17年9月21日（千歳民報）
- (52) 産学官連携交流事業フォーラム……平成17年12月20日（北海道新聞）
- (53) 2.1倍の難関に挑む（2006年度一般学力試験）……平成18年2月4日（千歳民報）
- (54) 先端の光でがん克服（市民公開講座）……平成18年3月6日（千歳民報）
- (55) 少子化などで2年ぶり定員割る……平成18年4月4日（千歳民報）
- (56) PWCの提案、経済産業省が採択……平成18年6月2日（千歳民報）
- (57) いざYOSAKOIソーランへ……平成18年6月2日（千歳民報）
- (58) 千歳市社協と科技大が開発……平成18年7月13日（千歳民報）
- (59) 科技大と企業の連携促進……平成18年7月20日（千歳民報）
- (60) 第7回千歳光科学国際フォーラム……平成18年11月8日（千歳民報）
- (61) 多目的複合施設を建設……平成18年11月24日（千歳民報）
- (62) 開学記念優遇制度……平成18年12月12日（千歳民報）
- (63) おおた工業フェアに初出展……平成19年2月13日（千歳民報）

- (64) 就職率99.5%過去最高……平成19年4月4日（千歳民報）
- (65) 2年連続定員割れ……平成19年4月5日（千歳民報）
- (66) 先導的教育情報化プログラム採択なる……平成19年6月19日（千歳民報）
- (67) サイエンス・パートナーシップ・プログラム……平成19年9月4日（千歳民報）
- (68) H P 全面リニューアル……平成19年12月5日（千歳民報）



平成20年3月15日 学位記授与式
(本年度よりひとり一人に学位記が授与されました。)



7. 大学関連ビデオ

- (1) 大学設立の経過（開学式より）
- (2) 大学案内ビデオ（君たちが創る「光」の新世紀）
- (3) 大学案内ビデオ（これがボクらのめざす道）

あとがき

初めての記念誌と言うことで、大学が誕生する前から開学後の10年間のあらゆる資料を集めることから作業をスタートしました。

今、記録に残しておかなければ、という危機感もあり、倉庫の古い資料を探し出し、そのままでは記念誌に掲載しきれない膨大な資料が集まりました。また、データをそのまま記念誌にしても読んでいただけないだろうということから、写真をできるだけ多く使い、アルバム集に近いイメージにすることにし、掲載しきれなかった資料等は付属のDVDに収納することにしました。DVDには、ほかに各種の動画も含まれておりますので、是非ご覧いただきたいと思います。

この10年で本学の大きな出来事を3つあげるとすれば、開学したこと、佐々木敬介先生が亡くなられたこと、そして10年を機に3学科体制への変更を決定したこと、であり、開学時の理念は、開学前後の記事や佐々木先生のお話を読んでいただければ、良く理解していただけると思います。

開学の精神を引き継ぎつつ、社会の変化に合わせた新たな3学科体制により、次のステップを着実に歩んでいくうえで、この10年の記録が多少でも役立てば望外の喜びです。

終わりに原稿執筆や資料提供に快く応じていただいた町村信孝内閣官房長官・衆議院議員、山口幸太郎千歳市長はじめ関係者の皆様に心からお礼を申し上げ、編集後記といたします。

平成20年5月

記念誌委員会	委員長	川瀬 正明
	副委員長	川辺 豊
	委員	井上 利夫
		伊藤 哲
		今井 敏郎
		Olaf Karthaus
		高橋 智男
		福田 誠
		吉田 淳一
		米澤 一弘

千歳科学技術大学創立10周年記念誌

平成20年 5 月発行

発 行 千歳科学技術大学

編 集 開学10周年記念事業委員会記念誌委員会

印 刷 千歳印刷株式会社

千歳市錦町 3 丁目 3 番地 TEL 0123-23-2229